
AKB48 少女たちの軌跡と少年の奇跡

夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

AKB48 少女たちの軌跡と少年の奇跡

【Zコード】

Z3985U

【作者名】

夢

【あらすじ】

人気アイドル境直人は、48人の少女で構成されたアイドルグループAKB48のマネージャーとなる。メンバー一人一人の心を癒し、少年は少女たちを成長させていく。

第一話 中学卒業

第一話 中学卒業

「やっぱり境直人はすげえなあ」

「そうね。デビューしてすぐアイドルランキングとか一位だもんねえ」

完璧な歌声と容姿で人気を得た境直人は中学卒業を迎えて、屋上で寝そべっていた。

「いい風だ」

それが中学校生活に残した最後の言葉だった。

「敦子と優子は今頃美術室かなあ」

直人は空を見て微笑む。

「出番が来た」

そして、AKBが舞台上にたつ準備に入る。

美術室では、後にセンターとなる前田敦子と大島優子が話していた。

「敦子、ほんとでできるの？ 多勢の前で歌える？」

「うん、直人がいたら、大丈夫だと思う」

「ナオ君もきっとあなたを守ってくれるでしょ」

二人がアイドルになるうと決心したのは、この瞬間だった。

第一話 アイドル（前書き）

これは、全くではないですが、AKBのifストーリーです。

今回はチーム結成をして半年ほどという設定です。

一応、正規は48人ですが、大島麻衣や小野恵令奈などがいたりと
ちょっと人数設定があやふやになっていますのでご了承ください。

第一話 アイドル

境直人の中学校卒業から、ちょうど一年が経過していた。

「康さん、一応メンバーはそれなりに集めましたけど、レッスンとか、公演とかどうすんすか。上には期待してくれって言っちゃいましたよ」

「いいんだよ境君。君は物事をマイナス思考に考える男ではないだろ？」

とある劇場の控え室。境直人と、秋元康がいた。

「マイナス思考とかそういう問題じゃないでしょ。チームは皆素人の女の子。中には、子供のころから女優としてやってきた人とかいますけど

「まあ、そう焦らなくてもいいだろ。AKBは、君のチームなんだよ」

「僕のチーム、ですか・・・」

そうだ。あれは、僕が作ったチームなんだ。

中学卒業後、直人は秋葉原を拠点においたアイドルグループAKB48を結成した。正規メンバーは48人。それに研究生を交えている。実際は正規に予備メンバーがいたりするのだが、そこはそこだ。あまり気にしてはいけない。

半年間、彼はスカウトに励んだ。

メンバーの条件はただ一つ。諦めない心を持つた少女。

彼はまず、昔からの友人である前田敦子と大島優子を誘つてみた。二人はすぐに了承してくれた。

その後、とりあえず、宣伝してみようと思つて全国にポスターを配布した。

応募者は1000人を超えたので、結果的にその中から直人が決めることになったのだが、人を比べるのを好まない直人はそれがで

きなかつた。そのため、くじ?のような結果になつた。

親の反対。駄目だつたらどうしよう?という恐怖感。それが原因で、メンバーになれないものもいた。

直人は一人ずつ会い、勧誘していった。

その結果、メンバーはそろつたわけである。結果的に直人のチームだ。

「康さん、あんたは僕の恩師だ。だけど、本当にこれでいいのかな?」

「ああ、いいとも」

「・・・そつか。じゃあ僕は、これからメンバーに会つてくるよ」

直人はその部屋のドアノブに手を差し伸べる。

「逃げない僕たちに、非常口はいらない・・・か」

直人は秋元康とはまた別の恩師(命の恩人)の口癖を、呟いた。

直人は、その言葉の感想を述べる。

「ドラマの名言だな」

第三話 テピューオの準備

一つの広場に集まれた48人の少女たち。

そこは、ダンスレッスンルームと呼ばれる場所だった。

「直人、こんなに女の子集めて、ほんとにアイドルグループ作るつもりなんだね」

48人の中に、敦子がいた。彼女は優子と一緒にいる。この二人は、直人が一番最初に誘った人物である。敦子と優子はすぐには了承してくれた。

二人の周りには同世代の女の子ばかりだった。

「ねえ、私、『長髪の直人』に誘われたんだけど」

「私もなんだあ」

直人は、髪が女の子のように腰まであり、それを一まとめしていることから『長髪の直人』と呼ばれている。彼は中学三年生の二学期頃に伸ばし始めた。ちょうど一年がたつた今、髪は腰まで伸びている。

ガールズトークがあちこちで聞こえる中、ダンスレッスンルームい一人の少年が入ってきた。少年は長い髪を翻し、中央の鏡の前に立つ。

「みなさん、はじめまして。境直人です」

直人はお辞儀をする。少女たちもお辞儀をする。頭を上げた直人はふつと微笑む。

「みんな、着てくれてありがとう。聞いたとおり、僕は君たちを、アイドルグループAKB48として成長させたいと思う。まず、君たちにはこれを見てもうつ」

そう言って直人はみんなに書類を渡していく。

「今ここにいる、メンバー最優先候補者のリストだ。他の女の子たちのことをよく知つてほしいと思う。レッスンする前に、まずはこれからだ」

直人はそう言いながらその場にしゃがみこんだ。
正座で。

「さあ、今から自己紹介タイムだ」

直人は腕時計を見る。

「約三十分・・・そんぐらいあつたら十分か。はい」

直人は両手をあわせ、パチンと鳴らした。

「自己紹介タイムスタート」

第四話 自己紹介タイム

「自己紹介タイム、スタート」

直人のその一言により、静寂だつたルームがざわざわと騒ぎ始める。

直人がレッスンルームに入るまでに、もう会話を始めた者などもいた。たぶんもうちゃんとした初対面も済ませただろうと思う。だが、直人は、もっとたくさんの人を知つてほしかつた。だから自己紹介タイムを実地した。直人は正座を崩さないまま皆の様子を伺う。ここにいる少女は全員直人がスカウトした。

ここにいる48人はそれぞれ同年代の女子と打ち解けていたる者が多かつた。

宣伝を行つていたときはまだ実感が湧いてこなかつた。だけど、応募してきた少女たちはただの興味本意で応募している人たちもいたが、自身のアピールから、本気でアイドルを目指しているという少女が分かつた。その中から、60人ほど選んだ。そして、前田敦子、大島優子をスカウトし、OKしてくれた。

その後、選んだ60人に直人が会いに行つた。一人ずつ、住んでいる家まで行き、両親の許可を得る。それで初めてスカウト成功になる。時に問題も起つたが60人が60人スカウトに成功した。そして最後に、境直人は篠田麻里子に出会つた。

「麻里子さんは、ほんとスカウトに苦労したよなあ」

そうだ。カフェで働いていた背の高い女性。いや、大人びた少女と言うほうが正しいのだろう。

60人と直人自らがスカウトした3人の中から正規メンバーの最優先候補を48人選び、ここに呼び出した。

「スカウトするのになんであんな苦労したんだろう」

直人は天井を見る。そして思い出す。この半年間に渡る、少女たちとの出会いを。

「残り十分。なんかみんなの顔が笑顔でいっぱいだ」

これできつと、このチームはそれぞれ仲良しの子を見つける。敦子も今麻里子と喋っていた。

「なぜだろ？ 昨日までがとても昔のような気がする。とても懐かしい・・・」

自分の両手の掌を見下ろす直人。

「俺も、どれだけもつだろ？ か・・・」

また天井を見上げる直人。

直人の脳裏に浮かんだのは、麻里子との出会い。

第四話 自己紹介タイム（後書き）

この物語は、ところどころで、メンバーのスカウトをしていた日々の場面が流れます。設定は直人の回想です。次回は篠田麻里子との出会いを描いてます。

第五話 麻里子との出会い

それは、直人が麻里子と出会った日の出来事。

直人は自身の特徴と言つていい後ろの髪をジャケットで隠し帽子をかぶつて秋葉原を歩いていた。

誰も彼が境直人とは気づいていない。

「僕つて、そんなに人気なかつたかなあ」

通行人が自分に気づいて騒がないのは自分の人気にあると思っている直人。

能天気の彼は、上を向きながら歩いていた。

直人の目的は、AKBの劇場に選んだ建物の点検。

「なんか、喉がわいたなあ」

辺りを見回し、近くの喫茶店へ。この時間帯は出入りが多いらしく、人が多かつた。直人はカウンターから遠い窓際の席に座った。頼んだのはアップルティー。熱め。直人は一日に五回紅茶を飲むことがある。暇さえあれば飲むというタイプ。

「紅茶をお持ちしました」

少し長身の少女が紅茶を持ってきた。

「ありが……」

お礼を言おうとして少女の顔を見た瞬間、言葉がとまつた。

どう説明したらいいだろう。なんていうか、綺麗だった。可愛い笑顔と、整えられた髪。完璧だと一瞬思った。こんな人が、チームに加入してくれれば……

「君……」

しかし、それだけではなかつた。

AKBを考案した秋元康。結成を実行する境直人。

芸能界に出たいと、あらゆる気持ちがこもるメンバーオーディションの応募。

そして、選ばれなかつた少女たち。

「なんでしょう？」

ウエイトレスの少女が問いかける。

そうだ、この少女は……

「いや、なんでもないよ。紅茶、おいしいよ」

「ありがとうございます。それでは……」

あのウエイトレスの少女は、応募に受からなかつた少女たちの一人だ。

こんな近くに、いたのか。夢が叶わなかつた人が。

「……」

直人は感じた。ただの見当違いかもしけないが、この少女には才能がある。

ちらつと店内を見回す。《当店人気ウエイトレス第一位！篠田麻里子！》と掲かれた名札と、その上に先ほどの少女の写真。決めた。

この少女も、チームに加入させよう。

あの子には、類まれぬ素質がある。僕はそう思つ。

「君！」

「はい？」

少女は、篠田麻里子は振り返る。

「ちょっと、いいかな？」

直人の目にとまつた一人の少女。

直人と麻里子の出会い。

直人は麻里子にチームへの勧誘をし、麻里子はすぐに了承する。

秋元康は、賛成することも、反対することもなく、話を聞くと、ふつと笑つた。

第六話 対面

自己紹介タイムは終わった。これで一通りの流れが終わった。

「さて、どうしようかねえ」

直人は、優れた頭脳を持つている。その頭脳を活かして、彼はいくつもの計画を練り、ファンをサプライズに導いた。だが、計画性はもつっていない。

自己紹介をした後の計画を、直人は考えていなかつた。

「えつと、一通り終わつたみたいだね。どうだつたかな？」

直人は時間稼ぎをすると同時に、次はどうするかを考える。

「これで、メンバー同士の対面は終わつたね。じゃあ次は・・・」

「どうする、どうするんだ僕！」

直人が、考えていたときだつた。

突如、レッスンルームの扉が開かれた。そこから現れたのは、秋元康だつた。

「やあ、はじめまして。総合プロデューサーの秋元康だ」

言いながら、康は直人のところまで歩いてきた。

「どうも」

「苦戦しているようだね」

「分かりますか」

「君は分かりやすい」

直人と短い会話を終わらしたところで、康は少女たちを見回す。

「一ヶ月後に、初の公演を行つてもらいます。みんな、しつかりダンスの練習をしてください」

「待つてください！」

直人が康に講義する。

「素人の彼女たちに、たつた一ヶ月で歌とダンスを完璧にしろって
いうんですか！」

「そうです」

「なつ……」

直人はたじろぐように康から距離を取る。

「頑張つてください。以上」

秋元康はそのままレッスンルームを出て行つた。
「やつてくれるじゃないか。康さん」

直人は少女たちを見回す。

少女たちの顔色には、不安の曇りが見られた。
だけど、それを僕が笑顔にしなければいけない。
「まずは、歌だ」

第七話 レッスン・歌

直人は秋元康がレッスンルームから出ていて数分後に行動に移つた。

「じゃあまずは歌からはじめたい。えつと……」

様々な理由で女の子たちを集めては見たが、実際に歌が上手いのかどうかは言いがたい。歌の観点なんていつこも考えていないというわけではないが、正直曖昧だ。

「えつと、歌い自信がある人！」

拳手してくれといわんばかりに直人は自分の右手を上げる。上げてくれたのは48人中……13人。

まあ、最初はこんなもんだ。

「康さんが考えてくれた曲が一曲ある。それがこれだ」

右手を下ろした直人は左手に持っていたあるものを掲げる。それは、歌詞。

「この曲は、君たちの『レビュー曲になると思つ。だから、この曲を歌えるようにしてもらいたい。だけど、急じゃ無理だと思つから、まずは僕の曲を歌つてもらう」

「はい？」

最初に声を出したのは高城亜樹だつた。そのまま直人に話しかける。

「あの、それつて、男の人の歌を私たちが歌うつてことですか？」

「なんか不満？」

「いや、あの、音程とか……」

「それなら大丈夫。女性が歌いやすいように変えてあるわ。じゃあ、今からみんなに歌詞をくばる」

直人は歩きながら一人一人に歌詞をくばつていく。

48人全員が「ありがとう」という言葉を言つ。

当たり前の言葉だつたが、直人の心にはなぜか深く響いた。

(僕はなんで当たり前の言葉に感動してんだ?)

不思議に思つてゐる直人だが、本当はその答えが本当は分かつているのかもしねり。

「まず、僕が歌つてみるから。聞いてて」
直人は先ほどいた場所まで戻り、みんなのほうに顔を向ける。
今から歌うのは、直人の思い出の曲であり、みんなに感動を呼ぶ
歌と評判になつた曲。

『子供から大人へ』

それが、この歌の曲名。

アイドルのような元気な曲ではなく、声援を上げるようなもので
はない静かな曲。

「すう……」

大きく息を一つ。

そして、直人は口を小さく開け、歌い始めた。

『世界のお、かあたあすうみで～』

彼が歌つてゐる間、誰も声を出すことはなかつた。
(これが、ナオ君の歌か。良い歌)

優子は心の中で呟いた。

そして微笑む。

その隣で、敦子は複雑な想いを抱えていた。

第八話 歌声（前書き）

第七話に前書きで書いた通りでした。
初の歌レッスン編スタートです！
ちなみに、これから「編」というふうにしていきます。

直人が歌い終わり、次第に歓声の声が漏れていく。「ここにいる少女全員が、初めて直人の歌を生で聞いた。敦子と優子さえでも歌を傍で聞いたことはなかつた。

「分かつたかな？まあ、何度も聞いてくれたらいいさ。じゃあ、メドレーを流すよ」

CDを用意し、直人は歌のメドレーを流す。

「このタイミングで歌いだし。まずはここを練習してもらう。その後、一人ずつ歌つてもらう」

「どうして？」

亜樹が問う。彼女はさつきから反抗してばっかだ……と直人は思う。

「歌い方には、その人の本性が表れる。それを見る」

直人はみんなを見渡す。

48人いるから……グループ分けが一番良い。

この部屋には、ラジカセが六つある。

「じゃあ、今から七つのグループに分けるから。適当に決めるからね」

48人いるから。一つのグループに8人。

直人は前から適当にグループを作つていき、それぞれレッスンルームの端に固まらせた。ラジカセでメドレーを聞きながら、歌いだしの練習を始めさせる。

「少しは休憩できるな」

正直、この短い時間……疲れた。

偶然だつたが、敦子と優子は同じグループだつた。

いや、必然なかもしれない。

「さつきの亜樹って子は、正規メンバーに入りそうだな」

意見を声に出さない少女たちの中、堂々と意見を出した少女。恥

すかしがらない少女はステージに立つた時歌えるはずだ。
の前にたつてほら歌えなどと言わされて歌える人は少ない。
高城亜樹という少女はできそつた。

急に多勢
だけど、

「とりあえず、30分待とう」

第九話 亜樹（前書き）

今日は、回想です！

回想内容は、高城亜樹との出会いです。

実際なら、六期生のオーディションに合格した亜樹。

この物語では、物凄く速くステージに立つてます。

第九話 亜樹

「とりあえず、30分待とう」

直人はその場に寝転び、高城亜樹を思い出す。

（そういえば、家族、おもしろかつたかも）

直人が選んだ48人は様々な地域に住んでいる。高城亜樹は、高城樹衣を姉に持つ少女で、しかも東京都に住んでいる。そのため、直人はすぐ訪問することが出来、敦子と優子を除いて、二人目のスカウトとなつた。彼女は学生であるため、同級生などに亜樹の事を聞いたところ、天然キャラらしい。聞いた時、相手の女の子からサインをねだれたりして聞くのに時間がかかったが。我ながら人気だな……なんて自惚れてしまった。

「ここかな……」

住所確認。たしかに高城という札がある。

ここで間違いない。

一つ心を落ち着かせるための呼吸をしてから、インター ホンを押す。

「はい？」

ドアを開けて、顔だけを覗かせる少女。それが、亜樹との出会い……ではなく。

「えつと……境直人です」

バチン！

勢いよくドアを閉められた。

「えつと……拒否されちゃつた。これじゃあ、スカウトできないじやん」

たぶん、さつきのは亜樹の妹なのだろう。あんな行動取るってこ

とは、僕のことを知つてゐるはずなんだろうけど……僕つて、変人に見られてる？

直人の苦惱が一分続いた。

そして…

「すいません！どうぞ上がつてください」

さつき見た時はスッピンだったのに、たつたの一分で完璧にメイクしている！しかも服がオシャレになつていて！さつき明らかにパジャマだつたぞ！女子恐るべしだ！

「あ、じゃあ、遠慮なく」

（いきなり家を訪問するのが間違いだつたな）

一つ勉強になつた、直人であつた。

家に入る。今日は土曜日だつたことからか、亞樹の父は休み。直人は和室に案内されて、そこには一家四人が揃つていた。

「座つてください」

「あ、はい」

母親の真正面に座らされてしまつた……なんか、怖いな。
「ああ、ごめんなさい！」

腰を落とした途端、和室に一人の少女が入つてきた。

それが、高城亞樹だつた。亞樹は母親の隣に正座で座り込む。

「やあ、君が、亞樹ちゃん？」

「はい！そうです！私、受かつたんですか！」

身をテーブルに乗り出して問う亞樹。

「あ、うん！」

「やつたあ！私、すつごく嬉しいです！」

なんか、スカウトどころじゃなくなつてる気がする……
しつかし、この家族…仲良いなあ。

そう思いながら、直人は急な展開？的な感じの、家族の喜びを見守つてゐるのであつた。

第十話 パート練習（前書き）

初の歌レッスン編は、大きな章……
レッスン編に入つていきます！
ちなみに、とっさに思いついたことです。

第十話 パート練習

「やっぱ、小学校の音楽での練習とは名が違うね」「当たり前だよ」

暢気なことを言つ優子に対して喋る敦子。

（直人の歌声、初めて近くで聞いたな）
だが、敦子は練習とは全く別のことを考えていた。

「直人……」

敦子は少年の名を呟く。

「おーい、あつちゃん？」

気がつくと、敦子の田の前を優子の手がひらひらと動いていた。

「え？」

「次、あつちゃんが歌う番だよ」

七人が七人、敦子をじーっと見ていた。

「その田は、恋煩いですか！？」

途端に、七人のうちの一人、指原莉乃が言った。

「え？ は、はい？」

一気に敦子の頬が紅潮する。

「確かに、そうかもしませんね」

「由紀ちゃんも何言つてんの！？」

「なんか、慌てるのも怪しいなあ

「優子まで！」

完全に悪戯の的になつてゐる。

「え、えつと……」

敦子は返す言葉が見つからない。
(どうしよう……)

敦子が困り果てた、その時だった。

「いり、お遊びはそこまで。早く、練習しなさい。一番最初に歌わせねよ」

気がついたときには、直人が近くにいた。

「優子、君に敦子を護つてもらいたいのに、一番悪戯楽しんでちゃ

駄目じゃないか」

直人は冗談のようないいながら敦子に視線を移す。

「頑張つて、練習してくれよ」

直人は微笑み、元いた場所に戻つていった。

「面白くないなあ、ナオ君つてば。さ、あっちゃん

「う、うん」

敦子はラジカセに一步近づく。

（また、直人に助けられたな）

第十一話 歌の良む悪む（前書き）

やばい！第十話更新したらお気に入り登録が減ってしまった！
それは、さておき……ここで一つお知らせ！

高橋みなみと峯岸みなみ。

名前、どちらもひらがななので、この一人は一ヶクネームで記させてもらいます。

第十一話 歌の良を懸け

30分たつた。そろそろ始める時間だ。

直人は立ち上がり、両手を合わせてパチンと慣らした。
「時間だ。みんな、そこに適当に横に三列に並んでくれ」
みんな、直人の言うとおりに三列に並んだ。偶然だろうか、背の順に並んでいる。

「一番前の列……その一番右から、一人ずつ歌つてもらひ。みんなが聞いているからって緊張しなくていいから」

最後に緊張をほぐせるような言葉を言つてからワジカセをセットする。

（今の言葉……緊張ほぐせたのかなあ）

不安な直人だつた。

「てことで、まずは君だね」

前の列の一番右にいるのは、高橋みなみ。

背が一番小さいその少女は、少し男っぽかつた。

……氣のせいだな。うん、今の言葉は却下だ。

「たしか、高橋みなみ……だつたよね？」

「は、はい。みんなからはたかみなつて呼ばれてます」

「じゃあ、たかみな。歌えるかな？」

「はい！歌えます！」

ビシッと右手でグッドマークを見せるたかみな。
声が低いな……

直人はそう思つた。

とりあえず、歌声を聴いてみよう。

「じゃあ、かけるよ。歌わない人は座つててね」

ラジカセの再生ボタンを押す直人。

メドレーは流れ、次第に場に緊張が走る。

一応、緊張ほぐす言葉あは言つたよ……

歌いだしにかかる。そして……

たかみなが、歌い始めた。

直人は瞬間、驚いた。

あの低い声で、たかみなは直人を驚愕させるほどの歌声を發揮した。

他の少女たちも、固唾を呑んでその歌声を聴いた。

たかみなが歌い終わつたが、直人はしばらく啞然としていた。気を戻してから慌ててラジカセの停止ボタンを押す。

「えつと、私、悪かったですか？」

たかみなは不安そうな表情をしながら直人を見た。

「いや、むしろ神様みたいな歌声だったよ。この声にはびっくりした

「いや、そんな……」

今言つた言葉は決してお世辞なんかじゃない。
あの歌声は本物だ。

そして、次々と歌い始める少女たち。

直人は、たかみなが一番上手いと感じた。

第十一話 歌の良む悪む（後書き）

感想受け付けます！

良いところを言つてくれるとありがたいです！

悪いところを言つてくれると次から気をつけれるので
どんどん言つてください！

第十一話 背の低い少女／前編（前書き）

今回は、回想です。

前話で直人を驚かせたたかみなどの出会いです。

第十一話 背の低い少女／前編

敦子と優子をアイドルの道へと誘った直人。

本題はこれからだ。いまから、46人の少女に会い、スカウトしなければならない。

まず最初に、東京からだ。

「顔写真からして、身長はそこそこ高そうに見えたんだけど、まさかの148cmかあ」

スカウトしなければならないのだが、なにせアイドルの直人はスカウトなんてものをしたことがない。一体、どうすればいいのだろう。

一緒に食事？違うな。それじゃ、ただのデートだ。

直人はずつと悩んでいた。その悩みは、横浜市に来るまでずっと消えないでいた。

「よし、ここだな」

ついた一軒。そこは、直人の初のスカウトとなる相手が住んでいる家。

「なんか、不安だな……」

ぼそつと呟きながら、直人はインター ホンを鳴らした。数秒待つと、背の低い少年が現れた。

「はい？……え、境直人？なんで！？」

ソロのアイドルって、やっぱり地名度高いんだな……と自惚れる直人。

「えつと、みなみさんの、弟？」

「あ、はい、そうですけど……」

「高橋みなみさんは、いるかな？」

「あ、はい。自室で昼寝でもしているんじゃないかなと」

まだ昼じやないけど昼寝と言つている弟は、直人を見てパニックに陥つていた。

直人は失礼します、と言いながら玄関に入る。

「その、自室つて？」

「あ、ご案内します」

別に敬語じやなくともいいのに、歳近そعدだし……と頭の中で呴く直人だった。

自室の前まで案内してもらい、直人は弟にお礼を言つてからドアをノックした。

「そういえば、昼寝……だっけ」

直人はドアノブを握る。そして、開けていいのかなと躊躇しながらもドアノブを回す。

弟の言つたとおり、昼寝していた。ベッドで豪快に。

「えつと…おーい！」

大声を出してみる。

「おーい！」

繰り返し三回。次第に瞼が開いていった。

「え？」

みなみは、直人を視界に捉えた瞬間、目を見開いた。

「……おはよう」

みなみは仰天した。

「境直人……さん」

「スカウトに来ました」

「見ないで！私スッピンですう！」

枕を投げられてしまった。

第十一話 背の低い少女／前編（後書き）

初の回想前編ですが、後編は多分日曜日に更新すると思います。
みなさん、面白くなくてもぜひ読んでください。

第十二話 背の低い少女／後編（前書き）

久しぶりの執筆……

少々腕が鈍っているやもしれません。

十分後。簡単にマイクを整えたかみなは改めて直人と対面した。なぜか、直人は正座だった。たかみなが正座をしているから……という理由ではないが、なぜかたかみなからなんらかの威圧感を感じる。

たぶん、緊張感だ……緊張感であつてほしい。

「えつと、初めまして。境直人と申します」
なぜか武士っぽく自己紹介してしまった。

「高橋みなみと申します」

武士っぽい自己紹介したら武士っぽい自己紹介されてしまつた！
これは何かが気まずい。

どうしたらいいんだ、優子よ？

直人はこの場にいない人物に相談していた。

「えつと、君を、アイドルチームのスカウトしにきたんだけど……どうかな？歌とか、ダンスは、得意かな？」

「いや、私インドア派なんで、あんまよく分かりません」

普通の面接だな。こりや。僕は楽しくスカウトしたかったのに

……

心の中で唸る直人だつた。

（はあ……一応、キヤプテン候補だつて言つといたほうがいいのかなあ）

そう、直人の目の前で正座しているたかみなは、キヤプテン候補。理由は……直人の思いつき。

思いつきだけど、少しぐらいならつちゃんとした理由あるぞ！
誰に言つているのだ、直人よ。

「えつと、なんで私選ばれたんですか？」

「え？ それは……」

どう答えたものか、直人は数秒間返答することができずに迷い続

けた。

迷い続けた結果……

「僕は、君に何か運命的なものを感じた。ただ、それだけだ」

「え？ あ、そうですか……」

俯ぐたかみな。

（言う言葉ミスつたかな？）

ある意味明らかにミスつっています。

それから数分間。一人は黙つたまま、時を過ぎます。

（これは、もう言つたほうがいいな……）

直人は深く一呼吸。そして、たかみなを見据えて言つた。

「高橋みなみさん、僕のチームにあなたも加わってくれませんか、キヤプテンとして」

「え？」

たかみなが顔を上げる。

嬉しいのか、不安なのか、たかみなのは頬を一筋の涙が流れた。

「え、僕なんかしたかな？」

「い、いや、あの、私がキヤプテンって、どういうことですか？」

「あ、それは、えつと、君に相応しいと思つたからで……」

「そうなんですか……」

キヤプテンという言葉を聞いた瞬間、不安が募り、たかみなは一筋の涙を流したのもしれない。

第十四話 直人のお手本

「ありがとう。みんな、歌はとても良いよ。ああ、上手だ」
これは、お世辞で言つているのか、自分でも分からない。
「じゃあ、これから、本格的に歌のレッスンを始めたいと思つ。今
から、君たちに楽譜を配るよ」

直人はさきほどと同じような手順で楽譜を配つていく。
「君たちが、ステージで初めて歌うことになる曲だ。これから、こ
の歌を練習していく。まずは、メドレーを聞いてもらいたい」「
さつきから使つているラジカセ。それを使用する。ちなみに、こ
のラジカセは直人の家から持つてきたものだ。まあ、どうでもいい
と思うが。

「じゃあ、かけるよ」

ラジカセの再生ボタンを押す。
約4分。メドレーが終わつた。

「次に……僕が……歌つてみるから」

少し恥ずかしいが、直人はみんなのためにも歌わなければなら
ない。

いかにも女子っぽい曲なので、直人は少し……いやかなりの抵抗
感がある。

「そういうえば、この楽譜曲名が書いてないね」

敦子がぼそつと呟いた。その隣で優子が肯定の意を見せた。

「ほんとだ。なんて名前なんだろう。ナオ君教えてくれないのかな
あ？」

そう言いながら優子は直人を見据える。

「歌い終わつたら、教えてくれるんじやない？」

「そうかもね。でもナオ君、恥ずかしくて言わないんじやない？」

「実は私もそう思う」

敦子と優子は誰かをからかつているような笑みをした。

当の直人は、頬を真っ赤に染めていた。それほど抵抗感があるのだろう。

（ああ、トライアになりそつだあ……）これを何回も続けると思つと

……

そう思いながら、右手を胸に当てる。

直人はいつも、歌い始める前にいくつかの仕草をとる。それが、

直人の癖だ。

右手を下ろし、左手で髪をいじる。

「……ふう」

ゆつくりと息を吐きながら、ラジカセの再生ボタンを押す。

直人の、本田一回目の歌が始まった。

第十五話 ステージにたつ者たち

直人は歌いだした。低音が低いため、実際に彼女たちが歌う時は雰囲気が違う歌になるかもしれない。

「きょうしつのまどべには」

あれ、別に男が歌つても違和感ないな、と思いながら歌い続ける直人。

サビにさしかかる。

「さくらのはなびらたちがさあくじゅあ、どこかできいぼうのか
あねがありいひいびくう」

直人は歌うほど、心に何かがこみ上ってきた。それは、アイドルとしての、アーティストとしての感覚。そうだ。歌うとき、直人はいつも心の中で盛り上がっていた。気持ちが高ぶり、ずっと歌い続けたくなつてくる。それは、今も同じだつた。

歌い続けて約五分。ようやく歌い終わった直人は、久しぶりに歌つたためか、少し息が荒くなる。

以前自身が歌つたのは、秋元康とアイドルグループを作ろうと決めた二日後。一日かけて開かれた直人のコンサート。その終盤で、彼は「僕は、新しいアイドルグループを作ろうと思います！」と宣言した。その宣言がコンサート終幕のきっかけになり、その日のコンサートは幕を閉じた。それから半年間少女たちのスカウトに専念し、今こうしてレッスンを行つてゐるため、ここ半年間コンサートをおこなつていない。

「まあ、こういう歌だよ。みんな、分かつてくれたかな？」

「ごく僅かだが、頷いてくれた。小さく。

「この曲は、48人全員で歌えるわけじゃない。それは、想像した
ら分かることだよね？」

「なんだろうか……」

「この曲の名前は『桜の花びらたち』だ。最初の舞台に立てるのは

48人中たったの16人だ。『桜の花びらたち』をダンス込みで歌つてもらつた後、48人全員が舞台に上がるんだ。まあ、それは、いつになるかわからないけど

「どういうことですか？」

そう聞いたのは渡辺麻友だつた。ツインテールの髪型をした彼女は真つ直ぐ直人を見つめる。その質問をした後、他の少女たちも直人を見た。

「客が集まるという保障はないんだ。観客席が、客でいつぱいになつたら、48人全員を舞台に上がらせる。それが、今の僕の目的だ」ファンとは言わない。観客席が埋め尽くされても、それはただの興味心で来ただけの人たち。その時、まだ彼女たちを好きだとは断定できない。

「この曲は、48人全員で歌う曲だ。ここに、僕が頼んで……アーティスト八人でこの曲を歌つてもらつた。誰かは会えて言わないよ一応、忠告しておく。ちなみに、そのアーティストとうのは誰もが知っている、オーディションで受からなくて踏ん張り続けた女性たちのグループである。

「そのアーティストに歌つてもらつた『桜の花びらたち』をCDで用意したから、さつきのように分かれて練習してくれ。さあ、今からしばらくその練習続けるから、何か、聞きたいことあつたら、僕に直接聞きにきてくれ……じゃあ、スタート」

直人は、両手を合わせ、パチンとならした。

「二回目のパート練習……といったところだ。

みんなはさきほどいた場所へ向かう。直人はそれぞれ集まつているところに向かい、CDを渡していった。すべてのCDを渡して終えると、鏡の前辺りまで戻り、その場に座り込んだ。

正座で。胡坐をあぐのがいつもの直人なのだが、今はなぜか正座をしたくなつた。

だがその気持ちも数十秒であつていう間に撃沈。直人はリラックスできるように座りなおした。

第十六話 音楽の楽しさ（前書き）

今回は、回想です。

誰かは……まあすぐに分かります。

ちなみに、AKB正規メンバーは、二千一年時点に決定いたしました！最近まで大島麻衣とかどうしようかなあと悩んでたんですよ。メンバーの年齢は二千十年六月時点です。一応、デビューしていないとうことを考へると、もづけよつと若いほうがいいかなと思つたので。

第十六話 音楽の楽しさ

直人は質問がない限り暇となつてしまつた。みんなはそれぞれの場所で眞面目に練習している。サボつている者はいないうだが、まあガールズトークはおこりつつある。まあ、別に最初のうちはいいだろう。

などと甘い考えをめぐらせていくと、

「あの、ちょっとといいでですか？」

さつそく質問が来た。

直人はすぐさま顔を上げる。渡辺麻友だ。

「質問？ 何かな？」

直人が立ち上がりうとする前に麻友が直人の前に座り込んだ。

「えつと、こここのリズムなんんですけど、コツつていうか……どうや

つたら上手く歌えるとかつてありますか？ 音程とか」

「うーん、そうだねえ。難しい問題だな。少し、待つてもらえるかな？」

「はい、大丈夫です」

音程は、やっぱ女の子は高い方がいいよなあ。『翼をください』みたいな音程が似てるかなあ。いや、それで通じるか？ リズムを考えるべきか。うーん、答えづらい……。

悩む直人に、麻友がまた話しかけた。

「そういうえば、あなたがスカウトしに来た時も、同じような質問しましたつけ？」

「え？……ああ、確かにそうだね」

あの時は、スカウトつていうより高校生がするよつなどうでもいい話みたいな感じだつたけど。

「こここのリズムは、音程を上げて歌うといいね。腹式呼吸をしてみるといいよ」

「分かりました。ありがとうございます」

麻友は立ち上がりお辞儀をしてから、もといたグループの場に戻っていく。

「質問……か……」

今日は、渡辺麻友といつ、まだ学生の少女をスカウトしに行く。奇遇なことに、今日は3月26日。プロフィールで知ったのだが、麻友の誕生日だった。せっかくの誕生日なので、祝つてあげようと、誕生日プレゼントにネックレス（値段は一千円ぐらい）と小さなショートケーキを三個ほど買って彼女の家に向かつた。

埼玉県。直人は、麻友の家に着いた。

もう何度もスカウトを経験したので自然と緊張はない。

「あの、どちらまで？」

出でてきたのは麻友の母だった。

「えっと、境直人です」

「えっと……」

お母さん、完全に焦つてるよ。

「麻友さんと、お話がしたいんですね」

「えっと、どうぞ。上がってください」

見た目からして、焦りは一瞬で消えたようだ。

リビングに案内された。結構綺麗だ。

「麻友さんは、どこに？」

「部屋にいると思いますよ……それは？」

麻友の母親は直人が持つてているケーキやネックレスをいれた袋に気がつく。

「あ、今日誕生日だつて聞いたんで、ケーキとプレゼントを」

「あらーきっと麻友も喜ぶわ。今すぐ呼んでくるわ」

そそくさと麻友の自室があるらしい方向に向かう。

数分後。眼鏡をかけた少女がリビングに現れた。少し寝ぼけている

るらしく、田をこすりながら来た。

「どなたですか？」

長い髪をくくりもせずに、しかもパジャマ姿じゃないのか、これ。

「お誕生日、おめでとう」

直人はそう言いながら微笑んだ（50%営業スマイル）。

「さ、やさ……」

「……？」

「境、直人……！」

「え、あ、うん、そうだけ？」

「な、なんで？」

完全にパニクってる。どうしよう。ここは垂直に言つべきか。

「渡辺麻友……僕の、アイドルグループに入つてくれないか？」

「はい！」

返答、早っ！

「あ、そつ、良かつた」

ちらつと、隣の母親に視線を向ける。

母親はこいつと微笑んだ。どうやら、不安があるとか、そんなの

認めたくないとかいうのはないらしい。

「あ、まあ、このまま帰るのも尺だから、とりあえず雑談する？」

「はい」

麻友と直人は向かいあつて座る。どちらもソファだ。

「お茶用意してくるわね」

母親は台所へ向かった。

「えつと、今日誕生日だつてプロフィールに書いてあつたから、ケキを用意したんだ。それと、誕生日プレゼントも」

そう言って、袋に入れたネックレスを渡した。

「やびやあ！ ありがとわざこまますー！」

「やびやあ？」

「あ、やばいの意味です」

そうなのか。最近の女子高生たちはそのような言葉を使つてゐる

のか……一歳ぐらいしか歳違わないのに、こんなことも知らないのか、僕は……

心の中で唸る直人だった。

しばらくして、母親がお茶を持ってきた。そこからケーキを食べる時間が始まる。

「私、凄いアニメが好きで、よくネット見てるんですよ。AKBのメンバーを応募してるっていうのもあなたの公式サイトで知つて……」「ああ、あれか」

直人は、自身の公式サイトを立ち上げている。ほぼブログなのだが、公演内容とかを表示しているサイトだ。あれに、メンバーを応募していますと宣伝したんだつけ。半年間でスカウトをはじめて終わらせるつもりだったから、誰かを決めるという作業は早く終わらしたかった。だから、宣伝して、一ヶ月までに応募してくださないなんて言つてしまつた。だから、みんな慌てて応募してきたよ。よくそんな決心ができるねと思つた。

「な……境さん、えつと」

「あ、好きなように呼んでくれていいから」

「あ、そうですか。じゃあ……直人さん」

「はい」

「アニメはお好きですか？」

首を傾げながら問う直人。

「うーん、アニメは見るほうかな。よく読書するから、それがアニメ化したら見る程度」

「へえ、そうなんですか」

しばらく、麻友の話にあわしていたので、アニメの話ばっかりだつた。

「でも、そんなアニメばっかり見ていたら、いつまでたっても好きな人ができないよ？」

「私は三次元になんて興味ありません。絶対に一次元は裏切りませんから」

「あ、そう……」

少しがつくり頃垂れる直人だった。実際、（麻友に好きになれたら、どんなアプローチされるだろうか？）などとはしたないことを考えていた。直人のアイドル精神はどこへやら。まあ、ほぼ関係ないんだが。

しばらく続くこと、30分。

「面白いね、麻友は」

「そうですか？」

「ああ、正直そう思う。話してて飽きないよ」
さすがにちょっと分からない話もあるが。

だけど、直人は思つた。

こういう気さくで、自分の好きなものを、誰かに楽しく言う入つていうのは、チームには必要だと思うと。

第十七話 練習といつも交流（前書き）

今回は、直人の視点から離れます。
少し短いかもしません。

第十七話 練習といつ名の交流

直人がぐるぐると頭を回転させていろいろ思い出している頃。少女たちは時折直人に質問をしながら練習していた・練習はちやんとしているのだが、たまに会話が弾んでいく。

「さつきの自己紹介タイムでんまり自己紹介できなかつたですね。私は柏木由紀です」

「よろしく。私は北原里英。よろしくね」

と、改めて自己紹介をする人たちもいれば

「へえ、そなんだ」

「でね、佐江はそこでどばつーと立ち向かつたわけよ」と、仲良く会話を弾ませている人たちもいる。

人はそれぞれだ。友達の作り方もそれぞれで、その人のペースといふものだ。早くに仲が良くなれるなんていうポジティブで友達作りが上手い人。逆に、ゆっくりと、相手の好い所を見つけて、そして相手に見つけられて初めて仲良くなるなんて人もいる。ちなみに直人は、前者だ。

「おう、段々歌えるようになつてきた!」

優子がガツンポーズをとる。敦子はそれを隣で見ていた。

「私はまだあんまり歌えないやあ」

「じゃあナオ君に「ツ」とか聞いてこれば? ほら、もつ聞いてる人いるよ」

「え?」

優子は直人がいる方向を指差した。敦子はその指先の方向をうかがう。

麻友がさつそく直人に質問をしにいつている。敦子はそれを見て「どうやつたら歌を上手く歌えるのか」と聞いていると予想した。実際当たっている。

「いつまで見てんの?」

気がつくと、優子が敦子の肩を揺らした。

「別にナオ君が好きなのはいいけど、歌にも集中してね」

「優子は『冗談がおもしろいね』

「敦子、なんか怒つてない？」

同じグループの子が練習で一通り歌った。次に歌わしてと敦子が手を挙げる。誰も否定はせず、敦子はラジカセの再生ボタンを押す。（歌を上手く歌えるようになって、ソロの歌手になるんだから！）それが、敦子の夢だった。

第十八話 練習といつ名の交流は過去でも続く（前書き）

今回も回想です。

長い半年間のスカウトの日々。 そんな日々が始まるまえの物語です。

そして、境直人という人物がイメージできない方！

境直人の姿についてちょっと説明されますので。

第十八話 練習という名の交流は過去でも続く

世界つてのは、どんなことが起きたらひっくりかえったように感じられるんだろうか？

中学生を卒業した直人は、昔は行きたかった高校を諦め、アイドル仕事に専念することにした。そんな彼に与えられた仕事、それはアイドルグループを結成すること。

最初はすぐにできるだろうと簡単に思っていた。だけど、後から気づいた。これは、一千万人を前にして歌うということよりも辛いのだと。

アイドルグループ。それは、何人かのアイドルで構成されたグループ。直人は、恩師である秋元康の頼みを断ることはできなかつた。まあなんとかなるだろう、そう思つて軽々しく了承してしまつた。だけど……

「はあ……」

直人は机に置かれた数え切れないほどの資料を見渡す。ここ一週間で応募された、AKB48のメンバーになりたいという人たちのプロフィール。

あまり応募は多くないと思っていた。だけど、違つた。直人がざつと見ただけでも軽く300人分はある。ここから、48人だけを選ばなければならぬのだ。直人にはとても無理に思えた。いや、46人か。

「直人、それどうしたの？」

「僕のチームに入りたいという人たちだよ」

「ああ、たしか、アキバ48だつけ？」

「 - AKB48だよ」

「ああ、ごめん……」

直人がいるのは、家のリビングだつた。そして、卒業してまだ三日しかたつていないう子と優子を招いている。

彼に、親はいない。兄弟どころか、血のつながる者もここにはいない。両親は直人が六歳の頃に死んだ。直人の目の前で。

ドライブしている日。直人には、家族の中心だった母親、優しくいつも場を和ませてくれた父親、高校生でモデルをしている姉がいた。歳の離れた弟を可愛がっていた姉の提案でドライブすることになった。だけど、交通事故が起きた。それは、交差点での出来事。信号が赤だったので父親は車を止めた。だけど、後ろからトラックが猛スピードで走ってきた。当然直人たちが乗っていた車は衝突した。母親は直人を抱えて護つた。父と姉も必死に車にしがみついた。だけど、運命は直人と姉から両親を奪つた。親戚も近くにはない、かと言つてこの街から離れたくはなかつた。姉は高校を中退し、仕事に集中した。おかげで不自由なく暮らせた。

だが、直人は更なる悲劇に襲われた。唯一の肉親であつた姉が、殺されたのだ。モデルで人気も高かつた。熱狂的なファンも少なくない。そして、ストーカーもあつた。

姉のストーカーはある日の夜、姉を襲つた。そのストーカーは情緒不安定だった。そのまま彼は気が狂い、姉をナイフで殺害した。直人は悲しんだが、その分生きようと思つた。そして、その日から髪を切らなかつた。

一年かけて彼はアイドルとして芸能界にデビューした。すぐに絶大な人気を得た直人は、後ろで一つに束ねている長い髪が特徴的なことから『長髪の直人』と言われた。

「なんで髪伸ばしてんの？いつも気になるけど」

敦子がお茶を入れて直人に渡してくれた。敦子と優子はいつも直人の家に来て、家事をしてくれている。一人暮らしである直人は悪いと思つてゐるが、正直有難い。直人は料理は大得意だが、アイドル仕事で洗濯や家の掃除ができるないので。敦子と優子はそれを気遣つて家事をやつてくれているのだ。

「微妙に伸びていったもんねえ、その後ろ髪」

優子も敦子の質問の答えに興味があるようで、そそくさと直人の

座るソファにこしかけた。優子の横で直人は何枚もの資料とにらみ合っている。

「決別したいんだ。姉に頼つていた頃の僕と直人は資料から目を離さず、一人に言つた。少し場の雰囲気が悪くなつたかもしない。

「お姉さん、優しい人だつたね」

「そうだつたね。僕にとつて、尊敬できる人だつたよ。それに、弟の僕が言うのもなんだけれど、とても綺麗だつたよ」

姉の話をするときの直人は、とても幸せそつだつた。それほど、姉のことが好きだつたのだろう。小学校の頃、何度かパソコンといわれたことがあつたが、直人は気にしなかつた。

「あ、この人可愛い！」

ふいに、優子が一枚の資料を手にとつた。資料一枚につき一人のプロフィールが書かれている。左上に写真が貼られているため、どんな人か見ることができる。優子がとつた資料を直人が横から覗く。「誰？」

直人が問う。

「……篠田……麻里子……さん、だつて」

篠田麻里子。もう二十歳過ぎてる……まあ、顔立ちはいい。表情も明るく感じる。だけど……

「この資料だけだと、選ばれないな」

「どうして？」

「何かが足りない。実際会つてみないと」

「じゃあ会つてみたら？」

敦子が提案する。確かにそれも正論だ。

「そんな余裕はないよ。すくなくとも、七ヶ月以内には全員のレッスンを始めなければならぬ」

「へえ……で、何人？」

「48人だよ」

「へえ……」

優子は篠田麻里子の資料を机に置く。

「……なあ、二人とも」

直人は机から視線をはずして、敦子と優子を覗いた。

「アイドルになりたくないか？」

「「え？」」

二人同時に声を漏らした。

「それって……」

「AKB48に、加入してほしい」

直人は言った。それから、三十秒は沈黙が続いた。次第に、声を出したのは、敦子だった。

「いいよ、優子もいいよね？」

「うん。ナオ君の頼みなら、断れないもんね」

二人は了承してくれた。

「ありがとう、敦子、優子」

直人は微笑んだ。それは安堵からくるものというより、とてつもない安心感。チームを作り、政庁させる。だけど、最初は会話をしたりすることができないかもしれない。だけど、知り合いがいたらだいぶ安心できる。直人はそう思つたのだ。

それに、直人は今日の前にいる二人は可愛いと思っている。中学校でも音楽の成績は良かつた。きっと、この二人には才能があると思つたのだ。その才能を惹きだしたかった。

「じゃ、残り46人か」

直人は再び机に視線を釘付けにした。

第十九話 つかの間の会談（前書き）

今回は前話に続いて回想です。
前話よりも前の話です。

第十九話 つかの間の会談

直人と彼が作り上げるチームAKB48の物語が始まつたのは、あの日なのだろう。

直人はレッスンルームを見渡す。直人が集めた少女たちが歌の練習をしている。誰も、練習をサボるうとしている者はいない。皆は自分自身の歌声をだしている。すぐ高音な子もいれば、逆に低音だが、個性をだす子もいる。

「ぼくと……彼女たちの始まり……それは……康さんとの打ち合わせ、のときだつたな。ずいぶんと軽い始まり方だよな……」

だけど、あの日の記憶は、今でも昨日のことだったように、鮮明に蘇る。

今日のライブが終わつた。直人はすぐにシャワーを浴び、その後は待合室で読書をしていた。読書をするときや、てがみを書くときは直人は眼鏡をかけている。そこまで悪いといつわけではないが、眼鏡は昔から読書用として愛用していた。いまやかける理由も分からなくなってきたほどだ。

「もう今日は仕事はないですよ」

待合室にマネージャーの橘花蓮たちばなかれんが入つてきた。彼女は二十二歳にして優秀なマネージャーで、直人が絶対的信頼を置く数少ない人物でもある。

「そうですか」

「ですが、秋元康さんがお会いになりたいそうですよ

「康さんが？」

直人は読んでいた本をテーブルに置いた。

「第一会議室でお待ちです」

「分かりました。ありがとうございます」

直人は立ち上がった。腰まで伸びる髪が揺れた。彼の身長は170？。そして一つに束ねた後ろ髪は80？弱。つまり彼の後ろ髪は身長の半分の長さを誇るということだ。直人の特徴として取り上げられるのも分かる。彼の髪は長いし、細い。普通の男なら少し髪が跳ねるが、直人の後ろ髪は束ねても女性のようすらりと伸びている。女性も男性も見惚れるほどのかわいい髪だ。

「じゃあ、今すぐ向かいます」

「分かりました」

直人は眼鏡をはずして上着の内側ポケットにしまいこんだ。

直人は待合室をでた。花蓮は待合室に残っている。第一会議室はナオとの待合室から左に向けて三つ先の部屋だ。

「失礼します」

第一会議室の前に来たナオとは、ドアを二回ノックしてから一声かけた。

ドアを開けると、机をはさんで真正面に秋元康が座っている。「どうしたんですか、康さん？ 真面目な話ですか？」

「ぼくはいつも真面目だよ」

康は微笑む。直人は部屋に入ると、康の向かい側に座った。

「あなたはいつも、無茶な事を要求してくる。それも突然に」「別にいいじゃないか。サプライズだよ」

「はあ……あなたって人は」

いつも笑えない冗談ばかりだ。

「ぼくは、君に一つ頼みがある」

「それは、すぐ終わることですか？」

「いや、すぐには終わらない。もしかしたら一生終わらないかもしない」

「……聞きたくないです」

直人は今日の前にいる人が、自分にとつてろくでもないことを頼むと思っている。確かにそのとおりだった。だけど、直人にとって、

秋元康は恩師だ。命を救ってくれたほど……いや、少し大袈裟かもしれない。

だが、姉を失った自分に対しても差し伸べてくれた友人……敦子と優子。嬉しかったけど、今の世の中、金がなければ生活ができない。こんな世界は嫌いだが、存在する以上仕方がない。中学一年生に何ができるだろうか？僕はずつと悩み、悩み、悩んでいた。そんな僕は、秋葉原で、秋元康と出会った。それは、道ですれ違つただけのことだったけれど。康さんは、数秒後に僕に声をかけてきた。そして、一言、ただ一言聞いてきた。

アイドルになりたくないか？

それが、少年が境直人と名乗ることになるきっかけだった。

「……康さん、僕は、もう境直人なんですよね？」

「ああ、そうだよ。君が、過去にとらわれないために新しい名前を与えた。この僕が。君はもう、幸せのときを過ごしていたこの名前を名乗らなくていい。新しい君が生まれたんだよ」

「……分かりました。あなたの頼みごと、何ですか？」

「……君が、アイドルグループを作るんだ」

「はい？」

直人は恩師に向かつて目を見開いた。

「名は、AKB48。アキバの略だよ。48人のメンバー構成で行こうと思っているからそういうネーミングにした」

「ちょ、ちょっと待つてください……僕に、一からグループを作れってことですか？」

「そうだとも。一言で言つと、君は48人の少女、あるいは女性をスカウトし、世纪メンバーリングを構成する。その後、秋葉原を拠点として活動開始。拠点地に舞台を設立してそこで踊つて、歌つてもらつ。そのときは16人程度。観客席が埋もれば、48人でデビュー曲を披露してもらつ」

「デビュー前提ですか……」

「私の眼鏡には、成功の一文字しか移らないのだよ」

言つてくれるねえ、決め台詞。

「で、その後の想像は？」

直人は聞く。

「人気があがれば、TVにも出放題だよ。そしたら、出る人をきめなくちゃいけない。ステージに立つ者たちもだ。そのときは選挙しようと思う」

「これはまた、大胆ですね」

直人はそう言うしかなかつた。

「できれば、姉妹グループも作りたい。そうだなあ、東京にあるんだつたら、大阪とかがいいなあ……直人君はどう思う?」

「そうですね、名古屋とかどうですか?」

「いいねえ、それ」

康が相槌を打つ。

「色々したいことがあるんだ……そこで、君にお願いしたんだよ。AKB48を作つてほしい」

「どうして僕なんですか?あなたには他にも頼める人がいたはずですが……てかそもそも、自分で作ればいいじゃないですか」

直人が正論だ。だが、康には直人にこれをさせるちゃんとした理由がある。

「AKB48を構成するにあたつて、さまざまなスタッフが専属の役職についてもらう。直人君。君には、それら役職をしきる、総合プロデューサーになつてもらいたいんだよ」

「だから、どうして僕が……」

「自分では気づいてないかもしれないが、君には統率力がある。誰にも負けない、まっすぐな強き心がある。その心は類まれぬ才能だ。その才能を生かしてもらいたい」

「統率力なんて……」

「そんなものあるわけがない。

「君には、責任力がある。だから、総合プロデューサーになつてもらいたい」

「……いいでしょ？」

「いきなりそんなこと言われても無理だと思つた。だけど、断る理由もないと思い、直人は頷いた。

「引き受けてくれると思つてたよ。だが、一つ忠告しておくよ。これはとても重要な仕事だ。一からつくり、そのまま引っ張つていくのだからね」

「……よおく、分かつてますとも」

直人は咳く。その後に康を見る。

「僕のライブは？」

「しばらくできないうだろうねえ」

「そんなん

がつくりうな垂れる、直人だった。

第一十話 小さな組織

「まあ、あの日は少し慌てたが、やつぱり、これから組織を作るんだつていうワクワク感があつたんだよな」

直人は小さく呟いた。あれから半年。彼は歌うことがなかつた。ステージに立つ事もなかつた。

みんなが歌の練習をしているところを覗ると、ステージに立つて思い切り歌いたくなつてくる。今はその衝動を抑えることしかできない。

「そろそろ復帰しようかな」

そう独り言を呟きながら直人は時計を見やる。

「もう終わりどきかな……」

後10分で正午をまわる。そろそろ昼飯どきにしないといけない。一応、弁当を持参してこいと言つてきたが。「持つてこれる人は」と言つていたのできつと持つてきていない人もいるだろう。

「はい！終わりにしてくれ！みんな集まつて！」

全員に一声かけると、次第に聞えていた音楽が止まつていく。

数分たつて全員が集まつた。直人は立ちあがる。

「今から昼食にしようと思つ。弁当を持ってきていない人はいるかな？」

直人がそう聞いた丁度三秒後に、10人ほど手をあげる。

「僕は近くのコンビニに昼飯を買いにいくから、弁当を持ってない人はついてくる？」

結果的に絶対についてくることになるのだが、直人は一応聞いてみた。さきほど手を挙げたものたちで断る人はいなかつた。

「じゃあ、もう弁当食べていいよ。買いに行く人は、僕から離れないでね」

別にそんな言葉は言わないでいいと思つが……言つてみたくなつた直人であつた。

レッスンルームは、建設中の建物の一室だ。後にドン・キホーテと呼ばれるその建物の八階にAKB48劇場を建設中だつた。直人たちがいるレッスンルームはドン・キホーテの一階にある。レッスンルームを出て廊下が続いている。その廊下を少し歩くと階段があるのだ。

「ここ秋葉原は一通りも多い。近くのレストランに行くという方法もあるのだが、それじゃ弁当を持ってきている人たちと平等にならない。

「ナオ君、どうして弁当作つてこないの？」

「優子、それはこっちの台詞だよ」

優子も弁当を持ってきていないのは想定内だ。

「いやあさ、あつちゃんが弁当作つてくれないんだよお」

「当たり前だろ。作つてくれる人つていつたらお母さんだろ」

「まあ、そなんだけどね」

優子はいつも陽気だつた。それは直人にとっても、優子の好きな一面だ。

「ナオナオつて、なんでそんなに人気なんですか？」

「ナオナオ？」

話しかけてきたのは亜紀だつた。それにしても、ナオナオなんてニックネームつけられたの初めてだよ……

「人気の理由かい？なんか、自分では答えづらい質問だね……」

直人は自信家でもなければ、自分を過小評価しているわけでもない。亜紀の質問に答えるのは結構難しい。

「ナオ君は容姿がいいからじゃない？」

直人の横で優子が言つた。

「そんなことないさ」

直人は少し照れながらも否定する。

「いやあ、それに、ナオ君はファンにサービス旺盛だもん」「サービス？」

今まで聞いていただけの宮沢佐江が声をだした。なんか、疑問系

なのに「彼女からす」とい元気が伝わるな。

「ライブ中にするべての席回ってハイタッチしたりとか…」

「時間かかりそうだね」

亜紀が感想を呟く。

「そのほかにもすこいよね。この前なんか、誰かも知らない女の子にハグしてたときもあつたよ」

「こり、優子」

嘘ではないが、あの時はちゃんとした理由がある。いざ言われる恥ずかしくなつてくる。

「たくよ、歌いたくなつてくるからライブは禁句な

「ええ~」

亜紀がおもしろくない!と言つてきたが、直人は軽くスルーした。
「直人お、女の子無視するのは駄目だよ」

そう言つたのは佐江だった・

「どういう君はいきなり呼び捨てか」

「私のほうが一つ年上ですけど?」

「はあ……おっしゃるとおりで」

「年上の私を敬つて、佐江様と呼びましょ!」

「なんで様なんだよ!?」

「コンビニはまだまだ遠い。」

第一十一話 ハハヤマ着くまで (漫畫セ)

レッスン編はまだまだ終わらんつてあります。

第一十一話 ハンマー着くまで

「コンビニに行くのにこんなに遠いと思つたことはない。直人はそう感じた。

女性陣のガールズトークは終わることを知らない。しかも、一步の歩幅は非常に遅く、身長が高いため歩幅が多い直人は合わせるのに苦労していた。

「でねでね……」

直人は無論男であるため、ガールズトークには入りにくい。

「ナオ君ってこの半年間出会い続きだつたんだよねえ」

直人の左横を歩くのは優子。優子は直人に歩幅をあわしているらしいが、実際あわしているのは直人のほうだった。

「合計48人」

直人が答える。

「ねえ、そういうえばわ」

「？」

「篠田麻里子さんつてあなたが自ら加入させようと決めたんだよね？」

「？」

「うん、そうだけど？」

「もともとの48人目つて誰だったの？」

48人目。それは麻里子ではなく、別の誰かだった。それは確かだ。だけど……

「48人目は、もともといなかつたんだよ。誰にしようか迷つてたときには、彼女と……麻里子さんと出会つた」

「そなんだ……」

優子は相槌を打つよにして納得した。

「私はそれほど綺麗に見えたってことよ」

「え？」

後ろから麻里子が話しかけてきた。そういえば、さつき後ろ歩い

てたなあ。

「麻里子さん、自分を過大評価してますね」

「ファッショնには結構自信あるよ」

まあ確かに、いま来ている服もオシャレだった。直人にはあまり女性のファッショնはよく分からぬが、それでも可愛いと思えた。「似合つてますね。そんなにファッションセンスあると羨ましいですね」

「あなたの服もコーデしてあげよつか?」

「お願いします」

「私をおいてかないでよお」

いつのまにか会話から外れていた優子がようやく割り込んできた。「てか、麻里子ちゃんには敬語で私にはタメ口なの!一応私も年上なんですけどお」

「優子は昔からの友達じゃないか」

「友達、ねえ……」

「なんだよ? いきなり暗い顔して」

「なんでもないよお、だ」

優子がそっぽを向く。

「もしかして、中学は先輩だった、とか思つてる?」

「……」

「いつつ!」

直人は優子のチョップをくらつた。

「図星かよ……」

「なんか言つた?」

「いえ、何も」

一瞬、優子からものすごい威圧感と殺氣を感じた直人はとつそに言葉を閉ざした。あそこで何か反論したら、自分が怪我をすると判断したようだ。

「そりいえば優子、今は女優の仕事してないね」

「AKBに加入するつて報道されてからはみんなレッスンするだろ

うとかつて言つていろいろな仕事一気にやつちやつてね。それで今は仕事なし

「へえ、優子つて女優だつたんだ」

「七歳の頃からセントラル子供劇団に所属してたの」
「麻里子がいきなり呼び捨てになつていて気に気づいていないのか、あえてスルーしているのか、優子はそのまま喋つていた。

「十人十色、己を信じ精進せよ……確かに、君の座右の銘だつたよね

「うん、高校での恩師の言葉だよ。私すつごく気に入つてるんだ」
「そなんだ……」

そこで直人の脳内にふと一つの考えが思い当たる。

やっぱ、アイドルつて、人気とかあつたら、言葉の一つや一つ、
いるよな？

「ねえ、みんなにキヤッチフレーズを考えもらおうと思つてるん
だけど」

直人は麻里子と優子に話題を持ちかける。

「キヤッチフレーズ？」

「AKBの公演にはMC……つまり、演奏の間に君たちが会話をす
る時間が五分ほど設けられる。そこで、自分を紹介するときにキヤ
ッチフレーズを言つて紹介してもらおうと思つてるんだ。相手に印
象付けるために。別に、キヤッチフレーズはいらないっていう人は
言わなくていいんだ。でもなるべく言つてほしいなつて、思つて」
「へえ」

優子より先に、麻里子が反応した。

「また後で説明しないとね

麻里子が言つた。

「その前に歌だよ」

直人は少し歩幅を緩めた。

「お、コンビニについたな

直人が小さく指差した。その方向の先に大きなコンビニが見える。
「なんか長い道のりだつた気がするね」

優子が言った。

「うん、そうだね……」

「言いたかつた事を先に優子に言われてしまった直人だった。

「そういえば私、お金持つてくんの忘れちゃった」

優子、来た意味ないじゃん。

第一十一話 今日は客が多い

直人たちがコンビニに入った。集団で入ってるためか、いつも人気が少ないコンビニは少しにぎやかになつた。

「みんな、できるだけ早くお願ひな」

一言そう言つた後には、みんな弁当が並ぶ棚に集まつていた。

「私これ！」

「私おそば！」

次々と商品棚から弁当が消えていく……と思いきや、みんな他の商品にも目がくらんでなかなか決められていなかつた。

直人は昼飯を選ぶ前に雑誌棚の前に来た。彼はコンビニに来ては色々な雑誌を読む。ちなみに、読書が趣味で、小説も漫画も何でも読む。

ちなみに、直人が好きな漫画雑誌はジャーブである。

直人がとつたのは男性誌だった。

「うん？」

直人がとつた男性誌があつたすぐ横の女性誌がとられた。それに反応して直人は横にふりむいた。

いたのは、横山由依だつた。

「あ、直人さんも雑誌読むほうなんですか？」

「うん、まあね。君も読むほう？」

「はい」

「そりなんだ」

彼女がとつたのはどうやらファッショントーマにした雑誌のようだ。女性誌は大体そうだと思うが。

「お昼を選びにいかないの？」

「コンビニ来たらまず読みにいくんです」

「へえ、そういうえば、好きな食べ物はなに？」

「えつと……牛丼、です」

少し言つのが恥ずかしかつたのか、その時だけは目を逸らしながら答えた。

「へえ、確かにおいしいよね、牛丼。女の子でも結構好きな人多いからね」

「あ、そ、そうですか？」

由依が顔を上げる。やはり、女の子が好きな食べ物とかつてあんまりじんぶり言わないからためらつたんだろうな……と直人が解釈した。

「あのや、じつに上京してこないの？ほら、京都から通うの、つらいでしょ」

直人がさつきと話題が変えた。すると、由依は快く説明してくれた。

「今、部屋を探してます。私、やっぱ京都からだと辛いなあと思つたから。でも、なかなか見つかんないなんですよねえ……」

「そ、うなんだ。僕も探すよ」

直人はそう言いながら男性誌をしまい、別の雑誌をとつて適当にページを開いた。そのページにはマンショソの特集が載つている。「君は、中学の頃バスケに夢中だつたんだよね？」

「はい」

由依が頷いた。彼女からは疑問の表情が浮かび上がつていた。

「僕も、バスケに夢中だつたんだ。小学校の頃も、お金はなかつたけど、友達が誘つてくれたおかげで、ミニバスに参加することはできた。中学もバスケ部のキャプテンをしてたんだ」

「え？ そ、うなんですか？」

同じ事が好きだとその相手に共感できる。直人はそれをよく知つてゐる。

「バスケが好きな人に悪い人はいない。だからこそ、助けてあげな

くちゃな」

「……ありがとうございます」

由依は一言お礼を言いながら由依は雑誌を棚にもどして直人が持

つている雑誌に目を凝らした。

「ここなんかいいと思わない？」

「予算が……」

「ああ、そうだな。生活費がいるもんね」

直人はお金の問題について考えなかつた。最近、アイドル仕事をする分報酬がもらえたために最近はお金について考えることはなかつた。もちろん、両親を失つた後の頃は稼いでくれる人が姉しかいなかつたため、電気を節約、水を節約、などばっかり考えていた。「安くていいいところつて、なかなかないんだよねえ」

「そうゆうもんですよね」

「…そういうえば、生活費つてどうするの？やつぱり、実家から？」「はい。部屋が決まつたら、十分な生活費を家族からもらつて。後で返そつて思つてます」

「真面目だね」

「小さい頃とかは、親孝行できませんでしたから
それからしばらく、雑誌で良い部屋を探してみる。
だけど、結局見つからなかつた。

「まだ、時間はあるから。ゆっくり探そつね」「はい」

由依は部屋が見つかるまで京都と東京を行き来するのだろう。直人はそう思つた。実際、そうだ。由依は休日を東京で過ごし、平日は京都で過ごす。きっと疲れるだろう。

「あ、麻里子さん。もう買つたんですか？」

「うん、まあね」

麻里子はビニール袋を持ちながら近づいてきた。そしてファッショング雑誌を取り出す。

「お昼にカレー？レッスンルームにはレンジないよ？」

「いいよ、一応今温めたから」

「そういえば、好きな食べ物はカレーってプロフィールに載つてた
な、といまさらながら過去をプレイバックする直人。だが、そのプ

レイバックは右耳に激痛が走ったことによって遮られた。優子が直人の耳たぶを思いつきり引つ張つていたのだ。

「はい、これだけ買って！」

「うわ……おにぎり、パン、プリン、ジュース……なんか見ただけでも十個もの食品が優子の腕で抱えられていた。

そういえば、お金忘れたから僕が奢るんだった。ああ、言うんじやなかつた。食いしん坊だつてこと思いつきり忘れてたあ……

財布の中身を見る直人。今日はあまり入れてはいけない。

「はあ……ほら、自分で買つといで」

そう言つて、直人は福沢諭吉さんを優子に渡した。

「ありがとう、いつか返すねえ」

いつかつていつだよ……

返してもらえないだろうと確信しているため直人はあえてツッコまなかつた。

「はあ……」

直人は今持つてゐる、マンションの特集が乗つてゐる雑誌と適当にファッショングと情報誌を一冊ずつとる。直人はよく雑誌を買う。今から買うのは、AKBについての方向性を考えるためだつた。ちなみに、直人の昼食は、メロンパン一個とスポーツドリンクのアクエリースである。

「もう、みんな買つたみたいだね。じゃあ、そろそろ行こうか」

直人がレジ店員から雑誌等を入れた袋を渡される。

「この女の子たち、あなたのチームの子ですか？」
店員が袋を渡す際に問う。

「まあね」

嘘をつく必要はない。デビューするまで秘密だ、なんてことはする必要がないため、直人は頷いた。

「頑張つてくださいね」

それはアイドルの直人に言つたのだろう。

「ありがとう」

だが、直人的には、AKBになる彼女たちに言ってほしかった。

第一十一話 今日は客が多い（後書き）

この小説がおもしろいと思う方は、感想をお願いします！
良ければ、でいいので。

直人たちがコンビニに向かっている頃、レッスンルームでは弁当を持参している少女たちが食べ始めていた。レッスンルームにはいくつもの小団体が見える。今までの練習の経緯で、気が合つ子でも見つけたのだろう。気が合うと大抵は仲良くなれる。だが逆に、趣味が違つたり、相性が悪いからつて仲が悪くなるわけじゃない。少なくとも、敦子はそう信じていた。

敦子も三人ほど誘つて一緒に昼食を食べていた。彼女の弁当には鮭味のふりかけをかけたご飯、卵焼き、ワインナー、それに小さなハンバークとたらこスパゲティが入つていて。そのほかはサラダなど、野菜を盛り付けている。

「おいしそうだね、あっちゃんのお弁当」

「そんなことないよ」

彼女の隣で峯岸みなみが敦子の弁当を覗き込んでいた。

敦子は彼女をみいちゃんと呼ぶことにした。さつきの自己紹介タイムでたかみなと対面している敦子は、同じ名前の人人がいるということでニックネームを考えてみた。すると、みんながそう呼ぶようになつた。

みいちゃんのほかに、敦子の周りには板野友美、小嶋陽菜、たかみながいる。さつき気が合つていた麻里子はコンビニメンバーの人だ。優子もコンビニに買いに行つていた。

「なんで財布忘れるかなあ？」

敦子は優子の忘れ物に気がついていた。優子のことだから、ただ単に忘れただけなのだろう。

「優子ちゃん、お金使いたくないから誰かに奢つてもいいおつって考えてるんじゃない？ 直人君とか？」

「ありえるなあ」

ほんとにそうだったら、今頃両手にいっぱいパンとか抱えてるだ

ろつなあ。

優子の行動を予想しているうちに、敦子の弁当の中身はほとんどなくなつてきていた。

「あつちゃん、食べるの早いね」

友美が言つた。

「暇がある時間イ「ール食べる。私の生活つてそんな感じだから」敦子は言つた。彼女はよく食べる性格だ。それは直人も知つてゐる。直人が作つた特製オムライスも7分で平らげたことがある。ちなみに、優子は4分だった。決して特製オムライスの量が少なかつたわけではない。

「直人君つて、実際どうやつて呼べばいいのかなあ?ニックネームとかあるの?」

陽菜が敦子に聞く。

「えつと、私は直人つて呼び捨てで読んでるよ。優子はナオ君つて読んでるし、中学校ではナオとか、なつくんとか、色んな呼び方があつたよ。彼、友達も多かつたから」

「へえ、そうなんだあ」

陽菜の横で友美が相槌を打つ。

みいちゃんもなるほど、と呴いている。

「じゃあ、私はなんて呼ぼつかなあ」

みいちゃんのその一言で、話題は直人の呼び方へと変わつた。そこまで深く考へる必要はないと思うが、敦子もその話にのつた。

「うーん……」

みいちゃんは深く考へていた。

「陽菜……にゃんにゃんは?」

「にゃんにゃん?」

陽菜がそう言いながら猫の手招きをする。さつきとつさに敦子が考へたものである。

「私は……直人つて呼ぶ!」

陽菜が大きな声で宣言したため、部屋にいた全員が陽菜を見た。

「あれ？ ちょっとうるさかった？」

暢気だな……陽菜の傍にいる三人はそう感じた。

「もしかしてパクリ？」

敦子がイタズラっぽい微笑みで問う。

「駄目？」

陽菜は本当にパクリをするよつだつた。

「ともも直人かなあ」

「ええ、ともちんもお？」

敦子はそう言いながらも、友美はそれが一番良いと思つていた。

友美自信、呼び捨てが一番自分らしいと感じている。

「みいちゃんは、結局どうするの？」

「やつぱり、直人君、かな？」

「結局、そうなるんだね……はい、次の話題にいこ

と言つても、何も思いつかない敦子だつた。

とそこへ、コンビニに行つていた直人たちが戻つてきた。

「ああ、戻ってきた！」

一番最初に反応したのは陽菜だつた。

「もう食べ終わつてる人いるかな？ 後一時間ぐらい休憩とるから、みんなゆつくり体を休ましてね」

と言つても使つてたのは声だけだけどね……と付け加えながら直人は歩いていく。

そして午前中ずっといた鏡の前に座り込んだ。

「私もいれでえ！」

明るい声をかもし出しながら優子が敦子の隣に滑りながら近づいていく。後で麻里子もやつてきた。優子の隣に麻里子が座り、少し急いでカレー弁当を取り出し、口に頬張る。

「やつぱり、カレーが一番おいしい」

麻里子が幸せそうな顔をした。その横で優子がガツガツ、パンをかじつていく。

「優子、財布持つていってないけど、そのパンどうしたの？」

「ナオ君に買つてもらつた

「最初からそのつもりだった?」

「ナオオフノホモ?」

きつと、「何の事?」と言いたかったのだろう。だけど、優子の口の中にはまだ消化してきれていないパンがあるので上手く喋られなかつたみたいだ。

悪女……今の優子にはそれがぴつたり……だと敦子は一瞬思ったが、優子の表情からして本当に忘れただけなのだと感じ取ることができた。

「優子ってほんとドジなんだね」

微妙に冷めているカレーを口に運びながら、麻里子は呟いた。

第一十四話 元気のみなもと（前書き）

今回も回想が入ります。

第一十四話 元気のみなもと

パンを豪快にかじりながら、直人は雑誌のページをめくついていた。内容は、『激安マンション!』という見出しの特集。

やはり直人には、由依の住める所を探してやりたいという気持ちがあつた。

こうなつたのはやはり自分がスカウトしたせいなのだから、自分が責任を持つて助けなければならない。直人にはそういう想いがあつた。

「京都、かあ。綺麗な都市だつたなあ」

直人は呟いた。

由依の故郷。それは京都。京都の町並みは東京と比べ物にならないほど綺麗だつた。

横山由依。京都出身。高校三年生。そろそろ卒業式の練習を始めている頃の時期。直人は京都を訪れた。由依の暮らす街に来る前に、彼は金閣寺を見てきた。直人は金閣寺の美しさに涙が出しそうだった。いや、少し大袈裟かもしれない。

「由依が住んでる家つて、どこだ?」

恥ずかしいことに、直人は道に迷つてしまつた。確かに近くには来ているのだが、分からぬ。金閣寺のことばかり考えてしまつたからだろうか……

直人は辺りを見回す。だが、彼の頭の中には金閣寺が思い浮かんでいた。彼は世界遺産などに興味があるわけではない。目立つようなものが好きなのだ。金閣寺はとくに、金色でピカピカ光つてゐるから好き……というのが直人の思考内の理由だった。

「はあ……やっぱ来たことがない地域つて、よくわかんないなあ」
呟きながら、直人は地図を広げた。

地図を見ても現在地すら分からなかつた。

「はあ……とりあえず、休める所を探すか……」

直人は近くに公園があるか探した。運が良かつたのか、直人はすぐ公園を見つけることができた。

今日は休日だつたため、人通りも少なくない。戯れる子供、サッカーをする中学生、散歩をする女性と犬……様々な人たちがいる。そんな中、直人は誰も座っていない木の下のベンチに座つた。

小さく深呼吸を一つ吐く。目的地がどこにあるか分からぬ以上、探す方法を考えるしかない。誰かに聞くのが一番だの方法だが、公園が現在地なら地図で少し調べてみるのも良いだろう。

「こここの公園は…お、見つけたぞ」

地図を開くと、自分がいる公園がすぐに分かつた。だが、肝心の由依の家が分からなかつた。

（お手上げだ……）

誰か一緒についてきてもらえれば相談できたのに……と後悔する直人だつたが、今更どうしようもない。

直人はとりあえず今の気を紛らわそと、音楽再生機……別名アイポッドを取り出す。正確にはアイポッドタッチ。タッチパネル式だ。アイドルたるもの、アイポッドは欠かせない。

一応、練習するために自身の歌を入れているが、ほとんどは女性アーティストの曲だ。ちなみに直人が好きな女性アーティストは、面識があるYUIである。アルバム、シングルともにすべてアイポッドに入っている。YUIも直人のことを良く思つてくれている。何せ、直人がAKBの前に芸能界にデビューさせた女性でもあるのだから。

「あ……」

イヤホンをつけようとしたときに地図が落ちてしまつた。イヤホンを耳につけてから地図を取ろうと直人は体を屈めた。だが、地図を拾つたのは直人ではなく別の人だつた。足を見てすぐに女性だと分かつた。直人はすぐさま顔を上げた。

「落としましたよ？…… 境直人さん？」

地図を拾つてくれたのは、直人自身が探していた人物であった、
横山由依だった。

「あ、えつと、やあ」

とりあえず挨拶をしながら体をベンチにもたれさせる。

「もしかして、私が採用されたんですか？……いや、そんなわけありませんよね」

由依がそう言いながら地図を直人に渡した。

「いや、僕は、君を採用したんだよ」

「え？ ほんまですか？」

由依が一瞬ほころんだ。

いや、一瞬どころではない。直人の言葉を聞いてずっとほころんだ表情が続いた。

「いやあ、ちょっと道に迷っちゃって。あははは……」

とりあえず直人は笑つて誤魔化してみた。

「悪いけど、家まで案内してくれるかな？」

「あ、はい、もちろんです！」

由依は力強く頷いた。

応募のプロフィールには、保護者からの評価という項目がある。由依のプロフィールは彼女の母親が書いたものだった。

彼女は誰もが認める努力家です。

ただ一言だけ。評価はその一言だけだった。

それが、直人の興味を引いたのだ。

直人は立ち上がった。由依は歩みをはじめ、直人もそれに続いた。由依は散歩していたらしい。そして少し足を休めるために公園に着いた直後直人と出会つた、という経緯である。

歩いて数分、由依が住まう自宅に着いた。

「ご両親は反対はしていないんだよね？」

一応、スカウトというのには両親の説得という目的もある。

「はい。それじゃあ、入つてください」「じゃあ、失礼いたします」

玄関に入つた直人は、すぐに由依の母親に出迎えられた。

「あ、あの境直人さん！？うちの娘、採用されたん。嬉しいわ！とにかく、入つて」

手招きされ、直人は小さく礼をして靴を脱いだ。リビングに案内され、直人は横山親子と対面する形で椅子に座つた。

直人はリビングに案内された。

「この子、すつごい努力家なのよ」

「ええ、分かつてますよ」

直人は娘を褒め称える母を見てほくそ微笑んだ。自分の母も、今生きていたら同じことを言ったのだろうか……

「僕は、必ず彼女を素敵なアイドルにして見せますよ」

「ほんと？約束してくれるん？」

由依の母親が問い合わせる。

直人は母親の隣に座る由依を見据えた。

「はい」

自分でも、この言葉には強さを感じられるはずだ、と思った。保護者の評価で、たつた一言しか書かないということは、その一言に相当自信があるということだ。

横山由依は本当に努力家なのか、本当はサボりたがり屋ではないのかと、直人は一瞬考えたが、すぐにその考えを頭からかき消した。人の言葉を簡単に信じるな、と前にある人から教わつたが、直人は逆に思う。

人の言葉を簡単に疑うな、と。

第一十四話 元気のみなもと（後書き）

いやあ、思わずAKB以外の女性アーティストの名前をだしちゃいました。一応それが直人の過去設定なので、不満がある人はどうか簡便してください。

第一十五話 片隅の記憶

「またか……」

痛くてどうしようもない頭痛が、直人を襲った。必死に堪えたため、周りの人には頭痛のことを気づかれていない。
(どこだ、頭痛薬は……)

直人は服のポケットをあさった。左ポケットに手を入れると、直人は探していたものを見つけた。直人はポケットから取り出す。それは、錠剤が入ったビンだった。

直人は薬を三つほど取り出して口に放り込む。錠剤のため、すぐに飲み込むことができた。

「俺もそろそろ永眠かな……」

「冗談めいた言葉を口ずさみながら、直人はビンを再びポケットにしまいこむ。

直人は逆の右ポケットに手を入れた。そこから取り出されたのは、黒のカラーリングが特徴の録音機だった。ちなみに、直人が自分で作り上げたものだ。機種はデジタルオーディオプレーヤー。

直人は、アイドルとしての仕事で、様々な資格を獲得しているため、色々な作業ができる。録音機を作るという作業もそのうちの一つだ。実際に今も試験を受けている。

直人はイヤホンを耳につけた。録音機で二ヶ月前の記録を再生する。

その記録は、今この部屋にいる少女たちと出会ったときの記録。

「どうしたの？」

「え？」

直人に話しかけてきたのは、柏木由紀だった。そういえば、近くで食べてたような気もする。

「録音した音を聞いてるだけだよ」

「何を録音してるんですか？」

「色んなことだよ……お弁当は、もう食べたのかい？」

「はい」

「そつか。もう少し休憩してていいよ。まだまだ食べてる人多いから」

「はい。ありがとうございます」

由紀はまだ直人が聞いている音が気になるようだ。

「ごめんな。この音は、人には聞かせたくないものなんだ」「そうですか。残念です……」

由紀は名残惜しそうにその場を去つていく。

でも、直人にはどうしても他人にこの録音機を使わせたくなかつた。

これは、直人の生きる目的を思い出させてくれる大事なものなのだから。

直人には、欠点が一つある。

それは、重い病気を抱えているということ。病名は不明。治療法なし。

いわゆる、不治の病というやつだ。医師は健忘の可能性が高いと言つていた。

不治の病が引き起こす症状……それは記憶障害だった。彼の病気事態が記憶障害だと断言できる医師はいなかつた。脳の状態が記憶障害そのものの状態ではないといふらしい。記憶障害よりもひどいらしかつた。

直人は忘れないように、もしくは忘れた時に思い出せるようにと、色々な工夫をしている。録音機で録音し、こまめにメモを取り、一日の最後にはページ一枚で一日分の日記を書く。

それでも、記憶障害は悪化する一方だ。

脳の状態は悪化していく一方だつた。優秀な医師は、直人にこう告げた。

いつか、近い将来に身体が動かなくなる。手も足も。そして、視覚が悪化して目が見えなくなる。視覚の悪化だな。そして、視覚の他に、臭覚、聴覚が悪くなる。最悪だと、身体の機能はすべて低下するだろう。声も出せなくなるな、たぶん。

「今は悪いこと考えてても仕方ないよな……」

録音機をさらに巻き戻した。

（不治の病って、ほんと、漫画みたいな話だよな。身体の機能全部が停止するって、現実にはないと思ってたよ）

直人は心の中で微笑んだ。本当は怖いだけだ。強がってるだけだ。「後二十分休憩とるからねえ」

みんなに合図してから直人は身体を床に倒した。

境直人 12歳 6月10日 午前12分

時間が詳しく説明された後、数秒間イヤホンから音は聞こえない。ありがとう！

ただ、一言、少女が発した5文字の言葉だけが、その時間の記録だつた。

たつた5文字だが、直人にとっては大切な記録だつた。

「はあ……休憩が終わつたら、何しよ……」

やはり、計画性がない直人だつた。これは決して病のせいではない。

「今日は歌のレッスンだけで終わらせようと思つたけど、大丈夫かな。レッスン終了予定は確か……何時だっけ？」

「四時だよ」

いつのまにか、直人の傍に優子がいた。独り言を聞かれたみたいだつた。

「そつか。今日は早く終わるかもしれないな」

「たつた一ヶ月で歌とダンスを完璧にしなきゃいけないのよ？素人の私たちが。なのに、そんな暢気でいいのぉ？」

「ああ、きつと大丈夫さ」

きつと……いや、たぶんかな。

第一一十五話 片獨の記憶（後書き）

いやあ、すいごに重い病気つていつのを説明したくて、よくわから
ない文章になっちゃったかもしません。

第一十六話 テスト

休憩は終わりだ。そろそろ練習に入らないといけない。直人は辺りを見回す。皆誰かと会話している。

「みんな、集まってくれ！」

元々直人の傍にいた優子は「整列！」といわんばかりに手を挙げた。

「最初に並んでたときと同じように並んでね」見事に背の順だった。どうしたらこんな風にすぐ並べるのだろうか。

「じゃあ、今から一人ずつ歌つてもらおうと思つ。簡単なテウトだと思ってくれたらいい？」

周囲から、というか列からどよめきの声が上がる。

あんだけ練習したんだから大丈夫だと思つのだが……

「今回は、順番は自由にしようと思つ。さあ、誰から行く？」すぐには誰も手を挙げなかつた。

まあ、当然だと思う。

「僕が決めて、いいのかな？」

きつと、少女たちはそれも嫌だろつ。

一分待つても、手を挙げる者はいなかつた。

直人は、自分が決めることにした。

「誰にしようかな……」

直人自信、最初に歌わせるとなると、判断にこまる。正直言つて、歌の上手さには人それぞれ違がある。ここは、とてもなく上手い人を先に出すべきなんだろうか……

「じゃあ、一人目は、君にしようかな」

直人は適当に指を指してみた。

「え？ あたし？」

反応したのは、小嶋陽菜だつた。

「ああ、君」

別に彼女を指差したわけではないのだが、直人は頷いた。直人は嘘をつくのが引けるが、仕方なかつた。直人には迷つて選べない。

「さあ、前に出て」

陽菜に直人は手招きをした。

陽菜は少し表情を曇らせたが、立ち上がり前に出た。

「カラオケだと思って歌つてみてくれ。今回は歌詞を見てもいいし、音楽もカラオケじゃないから」

「はあい」

陽菜は返事をする。スカウトした日にも思ったが、この人は天然なのだろうか……

「じゃあ、かけるよ」

直人はラジカセを少し陽菜に近づけて置いてから再生ボタンを押した。

次第に音楽が歌いだしに近づく。

「……」

陽菜が歌いだした。音程は取れている。歌としてはいいだろう。直人は最後まで歌を聞くことにした。全員の歌を最後まで聞くのは少々時間がかかるが、直人はそれでもいいと思っている。

「……ありがとう。歌い終わつた人はこつちに来てくれ」

歌い終わつた陽菜を列から巣押し離れたところに座らせる。

「次から、適当にどんどん当てていくからねえ、覚悟しとけよ」最初からこう言えれば良かつたと心の内で後悔するな大だつたが、もう過ぎたことだつた。

「次は、君だ」

直人が指差したのは、敦子だ。

「はい、敦子だね」

選んだ人を手を引つ張つてでも前に連れ出していった。そのまま、テストは続いた。

皆、最初の時より歌は大分良くなつてている。自分たちだけで練習

をしていたとは思えない。

学生は、音楽の授業もあるおかげか、音程もちゃんと取れていたため、直人にとっては好評価だった。

最後は増田有華だつた。

「君で最後だな」

確認してから、直人は音楽を流した。

有華が歌いだす。

（歌唱力、完璧だな）

彼女の歌声は歌手の直人自信驚くべきものだ。たかみなも良かつたが、有華には少し劣る。午前に歌いだしたときは全く上手さが違う。

直人は、ずっと有華の歌声を聞きたいと思ったが、今はテスト中であり、音楽は永遠に続くわけではない。

直人が思った一分後、有華は歌い終わり、全員のテストが終わつた。

第一十七話 キャッチフレーズ

テストは終わった。実際、今日はテストで終わらうと思つたが、いくらなんでも早すぎる。

「みんな、ありがと。」ここで一旦歌の練習はやめるよ。他にやつてもらいたいこともあるから」

直人にはふとひらめいたことが一つある。

「今から、自己紹介時のキャッチフレーズを考えてもらいたい」「キャッチフレーズ?」

佐江が咳く。

「ああ。公演にはMCの時間がある。その時に、自分を自己紹介するときに、観客が心にグッとくるようなキャッチフレーズを考えてほしい。別に、言いたくないとが言わなくていいって人は考えなくていいんだけど」

直人は立ち上がった。

「座つて待つてくれ」

直人はそう言いながらレッスンルームの端に向かう。その先には小さな机がある。

直人はその机の引き出しを開けて、中から何かを取り出した。それは小さな紙。その紙を何十枚と持つている。

「みんな、鉛筆は持つていいよね?今から、考えたキャッチフレーズを紙に書いてもらう。書いたら、僕のところまで持ってきてほしい。いいね?」

否定するものはいなかつた。

「じゃあ、配るね」

直人は一人一人に紙を配つていいく。それはB4サイズの白紙を小さく切りとつたものである。

「では、始めてくれ」

直人の始まりの合図と共に、皆が鉛筆を取りに行く為にレッスン

ルームを出た。

鉛筆は当然鞄に入れてある。その鞄はとくに皆更衣室においてある。ということは、皆は更衣室に鉛筆を取りに行つたのだ。したがつて、レッスンルームにいるのは直人一人だけだった。先ほどまで可愛い少女が48人もいたのに今は男一人だ。

なんだか、寂しかつた。

「こういう時に音楽はかかせないんだな」
人が誰もいないと、辺りは静かになる。そんな時、直人は必ず音楽を聞く。

直人はイヤホンを両耳につける。

流れるのは女性アーティストの曲である。実際、直人は女性アーティストの曲ばかりを聞く。

なので、I podに男性アーティストの曲は少ない。

「はあ……少し、音程が低いんじゃないのか、この曲は。あまり良い曲とはいきれないかも知れない」

直人は呟く。最近独り言が多くなつてきたかも知れない。
「キャッチフレーズ、なんにしようかなあ」

最初にレッスンルームに戻つてきたのは由依だつた。直人は喋り方ですぐ分かつた。由依は京都弁だ。

「ゆつくり考えてね」

直人はそう言いながら、聴いている曲をスキップする。
シャツフル再生しているので何が流れるかは分からぬ。
……イヤホンから聴こえるのは自分の歌だつた。
「自分の曲を聴くのは性に合わないな」

直人は微かに、笑みを浮べた。

第一十七話 キャッチフレーズ（後書き）

少し短かったかもしれませんね。

第二十八話 続・キャッチフレーズ

次第に皆がレッスンルームに戻ってきた。仲が良くなつた子にどんなのがいいか聞いたりしている。

「一番最初に店に来るのは誰かなあ

直人は咳く。

やはり、自分のキャッチフレーズを考えるとなると、すぐに思いつく人はいな。

直人は待つ間、ずっと音楽を聞くことにした。

……正直、暇だった。

「ううん……キャッチフレーズは難しいな」

佐江が唸る。

「やっぱ、普通じゃダメだよね？」

「そうだね」

佐江の質問に答えたのは優子だ。優子は優子でキャッチフレーズに悩んでいる。

「私はキャッチフレーズいらないかなあ」

「え？ 敦子、いらないの？」

敦子は紙を床に置いた。

「なんでなんで！」

佐江が驚いた表情を見せる。

「なんとなく、私にはい必要ないとと思って」

敦子は言った。

「じゃあ、ナオ君に言いにいきな

「うん、そうするね」

敦子は立ち上がり直人に近寄った。

「もう思いついたのか？」

「ううん」

敦子は首を横に振った。

「いらないのか、キヤツチフレーズ?」

「うん、私はキヤツチフレーズはいらないの。だから、紙返すね」

「……わかつた」

直人は頷き、敦子から紙を受け取る。

「……私はどうすればいい?」

「そうだね……どうしようつか?」

「考え方とかないと駄目じやん」

「まあ、そうなんだけどね」

直人は顎に手を当て、しばらく考えるそぶりを見せた。

「そうだ。これを貸すよ」

直人が渡したのはデジタルオーディオプレーヤーだった。

「これに、YUIに歌つてもらつた『桜の花びらたち』が入つてい
る。これを聞いて、リズムを覚えてほしい」

「わかりました」

敦子はデジタルオーディオプレーヤーを直人から受け取った。

「YUIさんと随分仲が良いよね、直人は」

「彼女は僕のおかげで今アーティストとして生活できるからね」

「威張っちゃって。もう……」

直人は敦子の言いたいことが分かる。

きっと、私も有名人と友達になりたい、と思つてゐるに違ひない。

「凄く身近に、幼馴染の有名人がいるじゃないか」

「あなたは男でしょ。女の子で、有名人の友達がほしいのよ。とい
うか、言葉に出してないのになぜ分かるの?」

一応、敦子はつっこむが、直人の返す言葉はいつも一緒だ。
「顔に書いてある」

本当にいつもと一緒に言葉が出てきた。

「今度YUIに会わしてやるから、さあ行つた行つた」

「なによそれえ……全く、これだから気分屋は……」

「それは関係ないだろ」

直人が反論する。

「音楽聴いてるんじゃないの？」

「実は音楽ストップしてる」

「詐欺つたなあ」

「なんでだよ。さあ、早くYUJIの天才的な声でも聞いて来い」

「はいはい、分かりましたよ」

敦子はさつきいた場所に戻つていった。

直人は再び音楽を再生させていた。

「それ、どうしたの？」

優子が敦子の左手に包まれているものを指差した。もちろん、さきほど直人が渡したものである。

「直人がYUJIさんの歌声を参考にしろ……だつて

「なんでYUJIさんなの？」

佐江が敦子に聞いた。

「頼みすいから……だと思つよ」

答えたのは敦子ではなく、優子だった。

「知り合いなの？」

佐江はさらに質問を投げかける。

「まあ、そんなところだよね」

「そうだね」

敦子と優子は顔を見合わせる。

「なんか私、一人だけ直人のこと知らないみたいな感じで仲間はずれっぽい……」

佐江が少し俯く。

「なんでそんなところで悲しくなっちゃうの？」

確かにその通りもある。

「元気に行こうよ。ね、佐江」

「……そうだね」

佐江が元気よく頷く。大体、なぜあれでへこむのだろうか、優子

にはあまり理解できなかつた。

「ゲンキングだね、佐江は」

優子言つた。

「ゲンキング?」

佐江が反応し、優子は説明を始めた。

「元気の王様。ゲンキのキング。略してゲンキング。これ、良いと思わない?」

優子が敦子と佐江に聞いた。

「私は良いと思うよ」

敦子が肯定の顔を見せた。佐江はとくに、しばし考え込んでいた。

「よし、決めた!」

佐江は勢いよく立ち上がつた。

「何を決めたの?」

いきなり立ち上がつたためか、少し注目を集めめた。音楽を聴いている直人は目を瞑つていて佐江には気づかない。

「キャッチフレーズ!」

佐江はもう一度座り、紙に考えたキャッチフレーズを書きこんだ。そして、紙を持って直人のところに向かつた。

「直人、起きて!」

佐江は直人の肩を叩いた。

「決まったのか。どれ、実際に言つてみてくれないか?」

直人は音楽を停止させた。

佐江は一つ咳をする。

「ゲンキングこと、富澤佐江です」

「……シンプルで良いと思うよ、ただ……さりげなくゲンキングを説明しといたほうがいいかもね」

直人は微笑んだ。

「これで決定だ。佐江。君のキャッチフレーズは、これでいいよ」

直人は佐江の手からそつと紙を取つた。

「この紙は僕が預かる。後で報告書にまとめるから」

「分かつた」

「じゃあ、敦子と一緒に歌を聴いてリズムを覚えてくれりょうかいい……」

佐江は敦子の元へ駆け寄つた。

一人目、キャッチフレーズ決定。

第一十九話 キャッチフレーズ・開始十分後

佐江のキャッチフレーズは決まってから約十秒。

直人は、佐江のキャッチフレーズが書かれた紙を眺めていた。
「はつきり行って、なんでもいいんだよなあ。僕が良いか判断する
みたいな感じになっちゃったけど」

直人は咳く。佐江のキャッチフレーズでは個性的で良いし、ゲン
キングというネーミングはなかなか良いと思う。だが実際のところ、
直人はどんなキャッチフレーズでも良いと言つだらう。

「次は誰だらうなあ……」

直人は辺りを見回す。次に誰が来るかは全く予想できない。
だが、必ず誰かが来る。

麻友は思いつきそうで思いつかなかつた。彼女はキャッチフレー
ズを考えることを甘く考えている。

そう大袈裟で言つことでもないが。

麻友の隣に座つているのは柏木由紀。彼女もアイデアが全く思
つかない。

さらにその隣で指腹梨乃が唸つている。

3人中3人が、アイデア一つ浮べていない。

「やっぱり、印象的なのが良いよねえ」

由紀がペンを口に当てる。

「自分のニックネームを入れるとかは? 例えば……まゆゆー」
梨乃が麻友を指差した。

「まゆゆ?」

「そう。麻友ちゃんのニックネーム。良いと思わない?」

「……そうですね」

麻友は「まゆゆ」というあだ名を気に入つたのか、何度も咳いて

いた。

「まゆゆ……でキヤツチフレーズか……難しいなあ」

麻友は気に入つたあだ名でキヤツチフレーズを考えようと決めたらしく、紙の真ん中にまゆゆ、左端にまゆゆと書いては消してゆく。「私もなかなか思いつかないなあ……梨乃ちゃん、良い案ありますか?」

「うへん……難しいなあ」

梨乃はしづかに考え込む。

「由紀……ゆきりんなんだよね……ゆきりんワールドなん'D'W.'」

「ゆきりんワールドって……どう書つたですか?」

その通りだつた。

「夢中にさせちやうぜ!……とかは?」

「うへん……なんかイタイタしい……でも思いつかないから、そうしましょう!」

「え?ほんとにそれにするんですか!?」

梨乃のシツコミを無視して由紀は紙に文章を書き出した。

「じゃあ、直人さんに見せてきます」

由紀は静かに立ち上がつた。佐江の時とは違い、みんなから注目を浴びるのは一瞬だつた。

佐江の時は勢いよく立ち上がつたからだ。由紀はとても静かに立ち上がつたため、気づいていない人さえいる。

「直人さん、どうですか?」

「言つてみて」

佐江の時と同じように促す。

「寝ても覚めてもゆきりんワールド……夢中にさせちやうぜ!」

「きりん」と柏木由紀です

「……言こんじやないかな?」

「ほんとですか!?いやあ、よかつた。少しイタイタしいなあ、とか思つてたんですよ」

由紀は安心したように紙を由紀に渡した。

「……これ聞いてリズム覚えてね」

「わかりました」

直人からデジタルオーディオプレーヤーを受け取った由紀は満足したように麻友たちの元へ戻つていった。

確かに、少しイタイタしかつたのかもしれない。だけど、一人ぐらいはこういうのが良いだろう。直人はそう思つ、ことにしたのだった。

直人は佐江の紙の上に由紀から渡された紙を重ねた。

「次は手短なキャッチフレーズを来てほしいなあ」

直人は今願うことしか出来ない……

麻友は由紀が戻つてきた瞬間に思いついた。自身のキャッチフレーズを。

「さつしー、あなたのおあげですよ！」

「え？ あ、どういたしまして」

麻友は早々に直人の元へ駆け寄つた。

「今度は待たずに済んだな…… たあ、どうぞ」

「……言っちゃいますよ」

麻友は相当自信があるようだつた。言葉に出さなくとも分かる。何せ、麻友の口元がいやらしいほどにつりあがつていてるのだから。

「み～んなの目線を、いただきまゆゆ～ まゆゆこと渡辺麻友です」

「……凄くいいんじゃないかな。僕は気に入つたよ」

自信の二ツクネームをキャッチフレーズに入れるというのは直人にとって想定内だ。

「じゃあ、由紀と音楽を聴いてリズムを覚えてくれ」

「わかりましたあ」

麻友はそそくさと戻つていった。

「まともなキャッチフレーズだ」

直人はまた、紙に紙をかぶせた。

第三十話 手紙（前書き）

今回はいきなり回想に入ります。

ちなみに、時間的に問題に気づいたので設定を変更
メンバーの年齢は……直人の同じ年である敦子を基準に考えてく
ださい。彼女が中学を卒業して半年とちょっと経つた……という感じ
です。

東京都出身の女の子ってのはほんと非常に有難い。他にも東京出身がいたが、その時も同じことを思った。

今日は、富澤佐江という少女をスカウトしに来た。直人が聞いた時点では、彼女はとても元気で明るいらしい。高校の同級生に会った時、彼女はボーアッシュ・シユキヤラだと言っていた。だが、佐江には中学という言葉はあまり使わないほうが良いのかかもしれない。

中学時代、佐江はバスケ部に所属していた。だが、一時期いじめにあい不登校になっていた。バスケ部の顧問でもあつた恩師がいなければ、佐江はその先一生いじめに苦しみ続けていたかも知れない。

「ここか」

佐江が住む家を見つけた直人。

インター ホンを押してすぐに玄関が開いた。玄関からひょいっと顔が突き出される。

佐江だった。

直人は佐江の母が出てくると予想していたため少し驚いたが、顔には出さなかつた。

「境直人です。よろしく」

直人は手を差し伸べる。無論、握手できる距離ではない。

「わあ！ もしかして、私受かった！？」

印象的な声だった。これから忘れる事はないかも知れない。

直人は頭の中で冗談を呴きながら手を下ろした。

「あ、どうぞ上がってください」

佐江は玄関をさら大きく開け、直人を家に招き入れた。

玄関に靴はない。今佐江が履いているサンダルだけだ。

「佐江ちゃん、だよね？」

「うん、そうだよお」

さつきは敬語じゃなかつたつけ。

「じゃ、お邪魔します。家には誰もいないの？」

佐江以外に誰かがいるような雰囲気はなかつた。

「うん、今はママ……お母さんも仕事だから

「いつもの呼び方で大丈夫だよ」

佐江の頬が少し赤く染まつた。きっと、恥ずかしいのだろう。

直人は佐江に優しく対応した。直人はとても温厚な性格だ。それは直人の身内ならば誰もが認めることだろう。直人は今まで他人に怒つたことがない。

「こつちに来て」

「ああ」

案内されたのはリビングだ。

凄く綺麗だつた。家具の配置がとても良い。机に置かれたリモコンやティッシュペーパーが綺麗に固められて置かれている。

「綺麗だね」

「私が片付けたの。なんか、部屋が汚いって、凄く嫌じやない？」

「ああ、確かにそうだ」

そう言えば、保護者の評価……綺麗好き……だつたのを今更思い出した。別に悪いことではない。いや、むしろアイドルグループにはあつてほしい性格だ。

直人はソファに座つた。佐江は一人分の紅茶を用意し、机に置いた後直人の左横に座つた。このリビングにはソファの向かいに椅子はない。あるのはテレビだ。

「知つてるんだ、僕が紅茶が好きだつてこと」

直人は紅茶をする。

「みんな知つてるよ。あなたのサイトでも載つてるし、この前テレビで一日に三回ぐらい飲むつて言つてたじやん」

「ああ、そういえばそうだつたね」

確かに、三日前に放映された番組で直人はそう言つた。だが実際は撮影したのが一ヶ月も以前であるため、直人は全く覚えていなかつ

た。

「なんで私なの？」

佐江は聞きながら紅茶をすすつた。

「君みたいな元気な子が、グループには必要だからだよ

直人はゆっくり紅茶を味わつた。

「それに……僕は、バスケが好きでね。同じスポーツが好きな人がいてほしいなって……」

佐江は直人の言葉を聞いて俯いた。紅茶が入つたカップを机に置く。それに続いて直人もカップを机に置いた。

「中学の時、僕はバスケ部だった。アイドルを初めて、キヤブテンになることはできなかつたけど、練習できる時は僕が指示を出していくんだ……だけど、僕の指示に反対して、揉めたことがあるんだ。その後、僕は一時期悪ふざけのようにちよつかいをかけられいた。それは、第三者から見たらいじめだつたのかもしれない……だけど、僕は乗り切ることができた。大切な友人のおかげで」

直人の脳裏に、二人の少女の顔が浮かび上がつた。

「君も、あの人のおかげで乗り切られたんだよね。自分自身じゃなく、支えてくれる人のおかげで乗り越えたんだよね、君は」

佐江は頷く。

「僕もそうだ。やっぱり、同じ境遇の人がいるとね、傍にいてほしつて思つちゃうんだ……一言で言つてみるよ。僕は、自分のわがままで君をAKBに入れたいと思つたんだ」

直人が言い終わる頃には、佐江の頬を一筋の涙が浮かんでいた。聞いたとおり、彼女は涙もろかつた。

直人は佐江に共感していた。彼女を選んだ理由は、ただ共感したからだと思ったからなのかも知れない。

「僕には君が必要なんだよ」

直人は言つた。佐江を嫌う人なんて絶対にいない、直人はそう感じていた。

涙を流す佐江の肩を、直人はそつと抱いた。抱き寄せられた佐江

は彼女の腕に頬をつけた。

「ありがとう、直人さん」

「さん付けはいいよ」

「……わかった、直人」

「……別に、慣れない泣き方はしなくていいんだよ」

「うん、そうだよね」

佐江は鼻をすすつた。

「あ、でも、僕の服で涙を拭ぐのはちょっと……」

「……わかってるよ」

「だけど今明らかに僕の服で拭こうとしてたよ……」

直人の静かなツツコミは声にだしていないため、佐江には聽こえなかつた。

第三十一話 キャッチフレーズ・開始一時間後

キャッチフレーズ考案時間が開始されてから一時間が過ぎた。キャッチフレーズがいらないと言つ敦子をふくめ、17人がキャッチフレーズを決めた。

正直、みんな良いと直人は思った。それに、直人は一時間で17人もキャッチフレーズが決まるとは思わなかつた。

直人自身、印象的だつたのが小嶋陽菜の「埼玉県から来ました！こじはること小嶋陽菜です」だつた。別に以外だということではないが、実際に聞いてみると、シンプルすぎて逆に印象に残つた。あまりアイデアが思い浮かばなかつたのだろうな。

「僕もキャッチフレーズ考えてみようかな」

良い暇つぶしになるだろうと、直人は考えた。

だが、全く思いつかない。自分を紹介するための言葉を考えるだけなのに……

「僕の良いところって、なんだ？」

自分の良い所……いわゆるチャームポイントが分からない。

自分のことをアピールできない奴にキャッチフレーズはいらないか……

「あの、決まりました」

「言つてみてくれ」

キャッチフレーズを言おうとしているのは、田名部生来だ。

「熱EYEに火の用心！あなたのハートをロックみん。たなみんこと田名部生来です」

「良いね。これで決定だ。じゃ、リズム覚えてね。確かに……みいちやんが一人で使つてると思つよ」

「分かりましたあ」

生来は満足したような顔つきで去つていつた。

これで18人目だ。そろそろ直人は待つのに飽きていた。

生来とすれ違ひに板野友美がやつてきた。彼女には今時のギャルという印象があつた。

「君は……いるのかな？」

「え？ なんで分かつたの？」

「勘だよ。はい、どうぞ」

直人はオーディオプレーヤーを渡す。

「どうも」

友美は少し早い足つきで直人を離れていく。

直人はキヤツチフレーズが書かれた紙を手に取つた。一枚ずつ内容を確認していく。

やはり、否定するようなキヤツチフレーズはない。

「どう？ 調子は？」

話しかけてきたのは優子だった。

直人は耳からイヤホンを外す。

「ぼちぼちだね。まあ、そろそろみんな決めてほしいなあ」

直人はあまり待つのが得意ではない。そろそろ限界だった。

「じゃあ、私があなたについて話をしてあげるわ」

「丁度良い。今僕のキヤツチフレーズを考えていたところだ」

少し前に諦めたが。

「へえ……あなたの性格つて……一言で言つと、鈍感だよね」「え？」

「恋愛に関しては全然駄目だよねえ。プレイボーイつていうか、色んな子と付き合つてたのに」

「父さんの遺言だよ。色々な子と付き合つて恋愛をたくさん経験しろつて」

「あなたのお父さんいつも言つてたよねえ」

「第一、デートはしてたけど付き合つてはなかつたよ。付き合つてたのは今までで二人だけだ」

直人は自信ありげに言つた。直人は本当のことを言つている。四年生の終わりころに他県の子に告白されそのまま付き合い、今も

応別れではない。いないが、ほぼ自然消滅みたいな感じになつて
いる。もう一人は、中学一年の同級生。タイプの女の子で可愛く優
しかつた……そして何より他県のガールフレンドに似ていた、とい
う理由で告白を断れなかつたのだ。その一年後、同級生の女の子は
親の転勤が都合で海外に留学した。

「なのに、鈍感なんだよねえ」

「鈍感って、どういうことなんだよ？」

「だつて、大抵の人だつたら、この子絶対俺のこと好きだ！つて分
かるようなアプローチ受けても全く好意に気づかなかつたもん」

「そつだつたつけ」

直人はあまり覚えていないようだつた。

第二十一話 キャッチフレーズ・開始一時間十分後

確かに境直人はプレイボーイかもしれない。いや、確實にそうだ。
だけど、それはただ、直人が気分屋なだけで……

「僕つてそんなに気分屋かなあ？」

「気分屋、マイペース、超鈍感」

「わあ凄い。僕の性格を三連発だ。どれも褒め言葉として受け入れることはできないな」

「その通り」

優子は頷いた。

「今、あの女の子とはどうなってるの？」

優子が言つているあの女の子とは他県の子のことだ。

「そういえばちゃんと別れていなかつたなあ。でもなあ、捨てるには勿体無い子なんだよなあ。可愛いし、タイプだし、何より俺の理想の女性像に近い」

直人は自信ありげに答えた。

「関係を維持するの？ それじゃあ新しい出会いはいつまでたつてもないよお？」ここには女の子が48人もいるんだよ

「悪いけど、君たちは恋愛禁止だ」

「え？ どういうこと？」

直人は優子の瞳を見据えた。

「康さんが考えたルールだ。恋愛禁止条例

「何それ？」

「片思いはしていいが、両想いは駄目。それがAKBのルールの一つだ」

「ええ～？ そうなの？」ここには恋愛をしなきゃいけない年頃の女の子だつているのに

「仕方ないだろ」

直人自身、恋愛禁止条例には反対だ。女の子はやっぱり恋愛すべ

きだと思つし、何より十代後半でれ恋愛をしていないつのは
駄目だ。

「僕は恋愛禁止条例には反対しているよ。たぶん、他にも反対する

子はいると思つ

「かもねえ」

優子は小さな声で言った。

「決まりましたよ、直人さん」

優子と話していく、話しかけられるまで気がつかなかつた。
立つてているのは仁藤萌乃だ。

「じゃあ、優子。ちょっと待つてね」

直人の視線は優子から萌乃に映つた。

それから30分経つた。

キヤツチフレーズを決めていないのは後麻里子だけだ。

「あの時はふざけすぎて近くのおじさんに怒られたじゃないか」

「ああ、そうだったよね」

直人と優子は昔話に華を咲かせていた。

内容は中学生の時の話ばかりだ。

「コスプレした僕を見たときの敦子の反応、あれは面白かった。激

レアだよね」

「あつちゃん、凄い蒼白な顔してたもんね」

「ああ、そうだな」

直人が頷いた直後、麻里子がやつてきた。

「君で最後だよ」

麻里子は頷くと、自身の考え出したキヤツチフレーズを言い出した。

「魅惑のポーカーフェイス、篠田麻里子です」

「魅惑、か。なかなかいいんじやないか」

「なかなかいいね……じゃないの?」

「そう言つてほしのかい？」

「別に……どつちかつていうと言つてほしいかも」

「はいはい。じゃあ、智実が一人で聞いてるから、一緒に聞いてね

……智実って誰か分かる？仲塚智実だよ

「わかつてますよお」

麻里子は辺りを見回し、智実を見つけると近寄つていった。

「そういえば、君と一緒に聞いている子は今一人なの？」

「うん、そうだけど？」

「……早く戻れ！」

「きやあ！」

一応、追い返す形となつた。

第三十二話 キャッチフレーズ・終了一分後

これで全員のキャッチフレーズが決まった。
これから少しリズムを覚えてもらつ時間をとるつ、直人はそう想
い、携帯で時間を確認した。

歌のテスト、それにキャッチフレーズを考案する時間を費やした
結果、今は午後3時だ。丁度良いだろう。今から30分ほどこの時
間に費やして、その後は説明やらなんやらして時間をつぶすか。
「今から30分でリズムを完璧に覚えてくれ！」

皆音楽を聴いているので、直人は大きめの声で言った。
数人が頷いてくれた。あくまで数人。

「じゃ、俺も音楽聴くか」

再び直人はイヤホンを両耳につけた。左手でIpodを操作して
音楽を再生させる。ちなみに、直人は両利きだ。
流れたのはYUIの曲だ。

「……」

右手で携帯を手に取つた。待ち受け画面の写真に映つているのは
直人と、同年代ぐらいの女の子だ。身長は直人の肩ぐらい、髪を一
束ねにしていて、優しそうな瞳だ。

その写真は、他県のガールフレンドとの写真だ。今はほとんど会
つていない。

直人はもう一度左手で掴んでいるIpodに目線をやる。タッチ
パネル式のIpod。直人はこれを常日頃持ち歩いている。最近、
携帯をスマートフォンに変えようと思つていて。

直人のIpodのボタンを押すと、まずロック中の画面が映し出さ
れる。その画面に設定している壁紙にも、直人と女の子が映つてい
た。

だが、その女の子は彼のガールフレンドではない。直人が音楽界
へデビューさせたYUIだ。写真は丁度その当時のもので、デビュ

ー祝いのパーティーで撮つた。

ロック画面を解除させる。解除すると、ホーム画面が映し出され、そこであらゆるアプリを起動することができる。そのホーム画面の壁紙にも、写真を設定してある。中学三年生の夏に行つた遊園地で優子と敦子と直人で撮つた写真だ。その日、直人は敦子、優子と遊園地に行つたのだ。一日休暇があまりもえなかつた直人にとって、その日もらつた休暇はとても有難かつた。せつかくの休暇を無駄にするわけにはいかない。直人は敦子と優子を誘つて遠くに行こうと誘い、遊園地に行くことになつたのだ。その日の帰り際、最後に観覧車に乗ろうと言つた。その観覧車が頂点に達した時、直人の携帯で撮つた写真だ。

「僕つて、そんなに女癖悪いかなあ」

直人は呟く。

「女癖が悪いんじゃなくて、プレイボーイだつて言いたいのよ」「え？」

また優子か、と直人は思つた。だが、話しかけてきたのは優子ではなく、もう一人の大切な友人である、敦子だつた。

「佐江と一緒に聴いてるんじゃなかつたのか？」

「佐江は一人で聴いてる。ちょっと直人と話したくて

「じゃなくて、サボりたいんだろ？」

「かもね」

敦子は微笑みながら直人の横に座つた。

「あ、懐かしい写真……アプリで私の顔隠れちゃつてるうー！」

「まあ、仕方ないだろ」

直人はI podの画面を消した。ボタンを押すと、画面は一瞬に消える。I podをズボンのポケットにしまいこむ。直人は左腕の肘で床をついて寝転んだ。直人にとって、この姿勢はリラックス状態だ。

「あ、やばい。I podがつぶれそうじゃねえか」

慌ててズボンのポケットからI podを取り出して、再度肘をつ

いてリラックス。

右手で掴んだままの携帯を見た。その画面には変わらない写真が映し出されている。

「たまには会つてあげなよ。きっと寂しがつてると想つよ」
敦子が言った。それに対し直人は、首を横に振った。携帯を閉じて傍の床に置く。

「今は少し時間が必要なんだ。君たちの面倒を見なればならないから、今会うことはできない。それに、会いすぎると、きっと寂しくなると思うんだ。遠距離恋愛だから、会えなくて寂しくなるのは当然のことだ。だから……」

「もういいわよ。あなた、絶対話長くなるでしょ？」
「かも……」

「……しれないってばっか言つて曖昧な答えださない
直人は返すことがなかつた。最近「かもしぬれ」が口癖になりつつあるのかもしぬれない。

……また言つてしまつた。

直人は時間を確認してから敦子を見据えた。

「ところでさ、覚えたの？リズム」

「ええ、もう完璧に」

敦子は自信満々のようだつた。

「YUJIさんの歌声はとっても綺麗だつたわ。さすが、あなたの好みの女の子ね」

「何言つてんだよ、急に」

そうは言つているが、直人は敦子の言つている意味が分かつた。つまり、直人の、女の子の好みのタイプがYUJIだということだ。直人自身、否定はしていない。以前にも同じようなことを優子にも言われたが、その時も否定しなかつた。

それは、自分でも認めているからだ。

「なんでそういうこと言つかなあ、君も優子も」

直人は俯きながら言つた。

いや、YUJIが好みのタイプだと指摘されて少し照れているだけだ。

「なあ、敦子」

「何?」

直人は顔を上げた。

「あのさ……僕はさ、いつまで生きられるんだろうな

「え?」

「あ、いや、なんでもない。さあ、もう話は終わりだ! 佐江んとこ
言つてこい!」

「ええ? もう終わり? もうちよつとサボりたいよ

「何言つてんだよ、さあ早く行つた行つた」

敦子を自身から遠ざけた。遠ざけたかつた。

今の直人には、敦子に自身の病のことを言つたかどうか覚えてい
ない。それどころか、彼女との記憶すら、直人は忘れかけていた。

第三十四話 最後の夏で僕は……（前書き）

今回は回想ですが、スカウトの日ではありません。

第三十四話 最後の夏で僕は……

直人はまだ中学三年生で、アイドルになつて一年たつてもまだ大人の世界には興味が湧かなかつた。

中学校では直人はアイドルであることもあつて、皆の中心人物だつた。バスケ部のエースで、アイドルでなければキャプテンになつてゐるほどだ。

だけど、その才能も大して発揮できなかつた。アイドルという職業に縛られ、自由を得られることは滅多にできなかつた。アイドルという職業を得た代償に、自由の学校生活を失つた。バスケの試合にも出られなかつた。三年になって、出れたのは予選大会だけ。直人のチームは全国大会に出場したが、直人は出場することができなかつた。それを悔やんでもう一ヶ月だ。もうすぐ夏休みが終わる。

「え？」

「……だから、一週間後の日曜日は一日休暇よ」

その時の直人の笑顔は、作り笑いではなく、本当の笑顔だつた。両親を失つてからあまり見せなかつた笑顔だつた。きっと、敦子と優子でさえ見られない、いわばレアな笑顔だ。

「でも、なんで急に？」

「あなたにも、友達とゆつくりしたい日があるはずよ。だじやら、この日曜び、敦子ちゃんと優子ちゃんを誘つて遊園地に行つてきなさい」

そう言つて直人の女性マネージャーは机に三枚の紙を置いた。

それは、遊園地のチケットだつた。丁度三人分ある。

「絶対に誘いなさいよお。休暇をとるのに大変だつたんだからね」

「ありがとう……詩織さん。僕と四歳しか違わないのに、君はもう完璧な大人だよ」

「私をオバさんみたいに言わないでくれる？」

「あ……ごめんなさい」

その時のマネージャーの詩織はとても怖かったが、感謝の気持ちのほうが強かつた。

「遊園地？」

敦子が聞き返す。

「ああ、今度の田曜日なんだけど、開いてるかな？」

ここは中学校の教室だ。今日は皆部活でいない。もちろん、卒業生の優子もここにはいない。

「大丈夫だけど……仕事はないの？」

「詩織さんが一日休暇をくれたんだ。いける？」

「……うん、大丈夫」

「よかつた……優子も行けるって」

「そうなの」

言いながら直人は敦子にチケットを渡した。

「ホントに行ける？」

「うん、ホントに大丈夫だよ」

「そうか、ありがとう！」

せっかくの一日休暇を無駄にせずに済んだ。

「お、境くんがデートするの？」

「は？」

「おおい、あの境直人様がデートだつてよおー…」

「ええ！？ そんなあ……」

今のは、どうやら廊下で部活終わりのクラスメイトに聞かれていたようだつた。

「へえ、結構いいところだねえ。賑やかだしねえ」

優子が当たりを見回した。

「まことにどこから行こうか？」

直人が一人に聞いた。

「そうだねえ、やつぱり最初はジェットコースターかな？」

優子が提案し、二人はそれに賛成した。

ジェットコースターは丁度一列3人乗りだった。直人は真ん中にすわり、左右に敦子と優子が座る。

「はあ……実はさ、僕って遊園地初めてなんだよなあ」

「そうなの？」

敦子が問う。それと同時にジェットコースターが動き出した。

「両親がいないのに、兄妹だけで遊園地行くか？」

「…………うんうん」

敦子はしばし後悔した。直人に辛い過去を思い出させてしまった。

ジェットコースターがゆっくりと上昇してゆく。優子が下を見下ろすと、地面からは遠くかけ離れた光景が見えた。

「なあ……ジェットコースターって、怖い？」

直人が一人に聞いた。

「まあ、怖いっちゃ怖いよね。手を挙げたら相当スリルがあるい？」

優子がそう言いながら両手を空高く挙げた。その瞬間

ジェットコースターが……降下していった。

当然、優子は、相当、なスリルを味わうことになった。隣で直人は安全レバーをしつかり両手で掴んでいる。敦子も安全レバーを掴んで……簡単に言つとはしゃいでいた。

まあ、それはいいのだが……

「うおおおお！ わあああ！」

きやあ！ という悲鳴だったら分かるのだが、優子の悲鳴はそんな今時の女子高生のような悲鳴ではなく、無邪気にはしゃぐ子供のような悲鳴だった。

直人は子供のような悲鳴を聞きながら、ジェットコースターのス

リルを味わつた。

第三十四話 最後の夏で僕は……（後書き）

回想はまだまだ続きます。

第三十五話　一夏の思ひ出の母……（前書き）

前話の回想の続きです。

第三十五話　一夏の思い出の中で……

「さあ、ジエットコースターの次は何に乗る?」

優子はもう完璧に子供だった。敦子は敦子で中学生らしくはしゃいでいた。

「お化け屋敷なんてどうだい?」

「ええ? やめようよお」

優子が即座に否定した。それを見て直人は少しからかいたくなつた。

「怖いのかい?」

「ええ。怖いよお。敦子だつてそうでしょ?」

「うん……まあね」

「敦子もなのか……へえ、それが弱点なんだね。君みたいな元気な女の子にも弱点あるんだ」

直人は本当に優子が嫌がつてることに驚いた。

「どんな人だつて弱点ぐらいあるよ、ナオ君。インディ・ジョーンズだつてヘビが弱点でしょ?」

「君つてインディ・ジョーンズ好きだつけ?」

直人が若干話を逸らした。

「とにかく行こうぜ」

「ええ……」

「でも……」

「学校の掲示板に『三年生の前田敦子と卒業生の大島優子は世界一臆病者!』なんて見出しの新聞が張られるかもよ?」

直人のその言葉が一人をお化け屋敷へと誘うことになつた。はつきり言つて脅しだが、今の直人はからかうことしか考えていなかつた。一年後の直人と比べると、少しやんちゃな性格だつた。

お化け屋敷はこの遊園地でも人気があるアトラクションだつたが、

今の時間帯はあまり人気が少なかつた。

五分待つてから、直人たちの順番になつた。

「怖がつてるの？」

「直人がイジワルだつて今更気づいた？」

「へえ、そつなんだ。そういう君は怖がりつ子？」

本当に今の直人はからかうことしか考えていない。中に入ると、やはりそこは視界が薄暗かつた。

直人の左右に敦子と優子が並んで通路を突き進む。しばらく突き進むと、床が軋む音が響いた。少し優子が肩を震わせた。

軋む音がだんだん近くなつてきた。そして……

「うわああ！」

幽霊のコスチュームをした男が後ろから脅かしてきた。

「きやああああ！」

直人の左右で一人の少女が悲鳴を上げた。優子は直人の左腕にしがみ付き、首に両腕を回してしがみついた。健全な男子中学生なら、これは喜ぶべき事態だ。何せ、簡単に言うと一人の美女に抱きつかれているのだ。直人自身、喜ばしいことだ。喜ばしいことなのだが

……

「く……苦しい……」

よほど怖かつたのだろうが、直人に力強くしがみつきすぎて、直人に被害が及んだ。

それから七分ぐらいはその状態が保たれてしまつた。おかげで直人は怖がる余裕すらない。

「早く行こう」

直人は早くお化け屋敷から出たいと願うしかなかつた。

結局、直人は六回苦しみを味わうことになつた。

「なんで直人、中一の時の文化祭ではあれだけ怖がつてたのに、今は怖がらないの……？」

「あの時とは状況が違うの」

敦子の言つてゐる事、それは一年前の、中学一年時の文化祭のことだ。二年生のお化け屋敷に敦子と一緒に行つた直人だが、その時、直人は凄く怖がつてゐた。ただ怖かつたわけじゃない。アイドルとしてデビューした直人を知らない人は学校にはいない。二年生は後輩をからかうのが好きで、仕事であまり学校に来れなくなつた直人を標的にしたのだ。その結果、お化け屋敷で直人はしつこく幽霊に追い掛け回され、狭い通路を四つん這いで進む時には腕をしつこく握られた。約四人ほど。

「はつきり言つて、怖かつたつていうより、辛かつた」

「あ、ごめん、トラウマだつたかな？」

敦子の言つとおり、直人はその日の出来事がトラウマになつていた。

ちなみに、優子は話に全くついていけなかつた。

「私、何にも知らないんだけどお」

「だつて、優子。その時はもう卒業生だつたじやん」

「でもいつも会つてゐるじやあん」

「まあ、いいじゃないか。次はあれに乗る」

適当に直人は指差した。その先には、メリー・ゴーランドがある。

「あ、えつと……」

「……くすつ」

敦子が小さく微笑んだ。慌てる直人を見て可笑しかつたのだ。

「……乗ろうよ、ナオ君」

「……えつと」

やられた。お化け屋敷の仕返しだな……チキショウ。

「いいよ、乗つてやるよ」

直人はちょっと強気だつた。実際、彼は負けず嫌いだ。こんなことでただし返しされるのは性に合わない。

直人たちすぐさまメリー・ゴーランドに乗つた。直人は恥ずかしさを隠すのに必死だつた。

メリーゴーランドが発車したようだ。直人の乗る馬が徐々に動いていく。

「どう、ナオ君？ すつごく楽しそうね」

「ああ、そうみたいだな」

……完全に優子の口元が吊り上っていた。悪魔みたいに。

第三十六話 三度の飯の一度田の飯や…（前編）

回想の半分ぐらいが過ぎました

第三十六話 三度の飯の一度目の飯で…

「そろそろご飯にしない？」

敦子が提案した。その隣で直人はうかない顔をしている。メリーゴーランドでのことが原因だ。どうやら、彼がアイドル境直人であることに気がついた客たちが、メリーゴーランドに乗っている所を写真に撮つたのだ。きっと明日にでもなつたらネットで話題になるだろう。もしかしたらブログのコメントに「写真が載るのかも知れない。敦子か優子が映つていたらきっと交際疑惑をかけられてしまう。」
「いいねえ、私すつごくおなかすいたあ」

優子がおなかに手をあいた。彼女の食べる量は決して少なくはない。だが、敦子も決して引けを取らない。敦子は暇があれば食べるなんて言つてゐるほどの食いしん坊だ。この二人を一度におごると言つてレストランにでも連れて行けば財布の中身はほぼ空になつてしまつ。

直人は財布の中身を確認した。入つてゐるのは二万円だ。直人は人気絶頂のアイドルで、給料が非常に高い。それに加え、色々な人から同情されて晩飯代をくれるなんてこともあつた。

「どこが良い？」

直人が聞いた。この遊園地には様々なレストランがある。ピザの専門店なり、バイキングなりと、エリアの各地に散らばつてゐる。

「そうだねえ、あつちゃんは？」

「迷うなあ」

「一人とも迷つていた。

「あれ？ 優子、さつきは敦子つて呼んでたのに、今はあつちゃんつて呼んでるね」

直人が言つた。それに対して優子は「ああ……確かにそうだね」と相槌を打つた。

「なんかね、呼び方なんてどうでもいいんだよね」「それってちょっと敦子に失礼なんじゃないのか？」

「そう？」

優子が敦子を見た。

「……えつと……分かりにくいから、あっちゃんでいいよ。直人も

「いや、僕は敦子のままで良いよ」

敦子の言葉を途中で遮つて直人は言った。

今更呼び方なんて変えたくない、直人は思つていた。

「ナオ君はどこがいいの？」

「僕は……なんでもいいかな？」

実際、直人にはオムライスが食べたいといつ希望があるが、目の前にいる二人の希望を尊重したかった。

「優子は何が食べたいの？」

直人は自分から話を逸らすために優子に問つた。

「私はねえ、お肉をガツツリと食べたい！」

「はは、優子らしいなあ」

直人は笑つた。

「でも、焼肉はここでは食べれないよ」

「じゃあ、スイーツ男子さん？お肉がある場所を教えてください！」

肉に決まりかよ。

「スイーツ男子に肉のこと聞くなよ……そうだなあ」

直人は遊園地の地図を開いた。

「一番近いところは、バイキングだね」

「じゃあ、そこにしよう。あっちゃんもそれでいい？」

「うん、いいよ。バイキングは色々あるしね」

バイキングに決定した。直人は地図を敦子に渡した。敦子は自分の鞄に地図を入れた。

「さあ、いこうか」

3人はバイキングの店に向かつた。

ちなみに、直人の好物は、林檎とスイーツだ。スイーツが好きなのは小学生の頃からで、特別にタダで通うことが出来たミニバスケットでは昼飯に必ずスイーツを持ち込んだり、食べ物で最優先するものはスイーツ、と主張したことからスイーツ男子というニックネームがついた。その頃は、タダでスイーツをおごつてもらうために試合に出て20点決めると宣言したものだ。顧問がそのことを面白がって認め、その顧問はスイーツを10個以上奢ると言つた。

そして、試合に出て彼は30点以上決めた。一緒に出ていた正規メンバーはあまりシユートをする機会がなかつたうえに、レンタル部員として試合に出た直人が大活躍したのだから嫉妬する者もいたが、やはりみんなは直人を褒め称えた。

ちなみに、奢つてもらつたスイーツは30個は越している。

「さあ、ついたよ」

バイキング店についた。そこは、一人1200円で1時間半食べ放題という店だ。結構人気があるらしく、5分並ぶことになつた。店に入つてまずお金を支払つてから食べ放題の始まり。直人たち3人は入り口のドアから一番遠い奥の席に座つた。その席は窓に一番近く、何人かの女性が少し直人を見て2、3度振り向いた。きっと、直人がかの大人気アイドルだと気づいたのだろう。

「さきに取つて来なよ」

直人が椅子に座つた。椅子といつてもソファ式で、直人は横に持たれたかつたため奥、つまり窓際に座つた。優子と敦子はトレイに皿を乗せて、なにやら肉料理のほうに向かつた。

そんなに食べたかつたのか……

「ふう……」

直人はズボンの後ろポケットから録音機を取り出した。ジーンズだつたので少し取りにくかつた。

録音機は、遊園地に来る前から録音モードにしている。今までの音をずっと録音していたのだ。さすがにジェットコースターの時は録音機を持っていくことはできなかつたが。

直人のマネージャー・詩織がこの時期に一日休暇を取ったのにはもう一つ理由がある。

それは、「記憶障害が酷くなっている」ことだった。もしかしたら、敦子と優子のことも忘れてしまうのかもしれない。

忘れるのなら、そのまま前に、直人を支えてくれたこの二人と思い出を作ろうと、詩織は思ったのだ。彼女は直人にとって優しい詩織なりの、最高の配慮だ。

「ありがとう、詩織さん……」

直人は、自分でさえあまり聽こえないぐらいの小さな声で呟いた。

その直後、敦子と優子が戻ってきた。

「はい、直人の分。優子と一緒に取つて来たよ」

「ああ、ありがとう……つて、スイーツは？」

「たまにはサラダも食べなさい。野菜嫌いは駄目だよお

「僕が嫌いなのは寿司と納豆だ」

直人は言いながらも、敦子からサラダの入った皿を受け取る。

「次は自分で取りに行くよ」

テーブルの端に置かれた箱の中からフォークを取り出し、サラダのてつぺんらしきところのキャベツを刺した。そして素早く口に放り込んだ。

「……ドレッシングは苦手だな」

「ナオ君、好き嫌いが激しいんだよ。それじゃグルメリポーターになれないよ?」

「なりたくないよ」

第三十七話 青春の一ページは続く…（前書き）

遊園地回想編、午後にさしかかりましたね。

第三十七話 青春の一ページは続く…

直人はサラダを口にほうばつた。

「しかし以外だよねえ。直人が野菜嫌いだなんて」

「この15年間で優子からその言葉を聞いたのは35回目だよ」

「え？ 私そんなに言つてるの？ てかずつと数えてたの？」

「……まあ、そんなどこかな」

実際、最近の日の録音を聞いていたらまたま分かっただけだ。

「スイーツだけ食べようと考えてたでしょ？」

敦子が直人の顔を覗き込んだ。まさに図星と言つた表情である。

「まあ、いいじゃないか」

直人は早々にサラダを食べ終えた。

「てことで次は自分でとりに言つてくるよ」

携帯と財布を机に置いて……若干スイーツがある方向に向かつた。数分してから直人が戻ってきた頃には、二つの皿の3分の2をスイーツが占めていた。

「3度の飯よりスイーツ、だな」

直人が言いながら少ない量の炒飯を口にほうばつしていく。

炒飯の近くにワインナーが3つある。後はスイーツだけだ。

炒飯をたいらげ、次にワインナーをすべて食べると、待ち遠しかったように直人はスイーツにフォークを差し伸べた。

まずは少し小さめのチーズケーキ。直人の口の中に行くのにたつたの2口だった。

「ああ、おいしかった！ ねえあつちゃん？」

「うん、久しぶりにいっぱい食べたよお」

「いつもいっぱい食べててるじやん」

「あはははは、そうだったね」

楽しそうに会話する優子と敦子の後ろで直人は微笑んでいた。直人曰く、「スイーツは一ヶ月ぶり」だつたらしい。久しぶりに食べたから直人は凄く幸せだった。傍にいた優子と敦子の覚えでは、20個以上は食べていたが、

「まだ食い足りないなあ」

直人は呟いた。敦子よりも食いしん坊ではないのだろうか。

「食べた後だから、コーヒー カップに乗らない？」

敦子がアトラクションの「コーヒー カップ」を指差した。直人たちと同じ理由で乗っている家族やカップルが多数だ。

「そうだね、行こう」

直人と優子も賛成し、3人は「コーヒー カップ」に乗った。ただ大きな「コーヒー カップ」に乗るだけのこのアトラクションだけど、カップルには大人気の場所だ。だけど、子供にはあまり受けない。

直人あまり好きではなかつたが、2人が楽しそうだったので良いと思つた。

「コーヒー カップ」を乗り終えた後は、近くの回転ブランコに乗ることにした。これは人が多かつたため、1人乗るのに6分ほどかかった。

最初に敦子、次に優子、最後に直人の順で回転ブランコに乗った。敦子は少し怖がっていたようだつたが、優子ははしゃぎまくりだと言つていいほど叫んでいた。

ちなみに直人は、恐れず、逆に叫ばずに終わるのを待つていた。なぜなら、スイーツの食べすぎで嘔吐しそうになつたからだ。

「気持ち悪い……」

回転ブランコから降りてすぐ直人はうずくまつていた。

「あんなに食べるからだよお」

敦子が直人の背中をさすつた。

「ああ、大分よくなつたかも」

直人は上体を起こした。

「敦子のおかげだよ」

「どういたしまして」

「ねえ、私は？」

優子が自分を指した。

「君は……何かした？」

「イジワルウ」

「はいはい。次行こうか」

直人は辺りを見回す。優子はううーと唸りながらも次に乗るアトラクションを探した。敦子も探す。

「あ、これがいいなあ……クレージー・ヒュー・ストンか」

それは60メートルのツインタワーを急上昇したり急降下するアトラクションだ。

このアトラクションはすぐ乗ることが出来た。直人を真ん中に挟んで敦子と優子が席に座る。

「幽霊屋敷の時みたいに腕にしがみ付かないでくれよ。あの時めっちゃ苦しかったんだぜ」

「悪かったね」

優子が皮肉めいた口調で言つた。それと同時に、身体が浮いた。直人たちの座る椅子がゆっくり上昇してゆく。次第にタワーの頂上に到達すると、椅子が止まった。三秒間そのままだった。三秒後、椅子は急降下を始めた。何の予告もなく。

「きやあああ！」

さすがの優子も雄叫びのような悲鳴は出さなかつた。

「うお！」

直人も少しひっくりして小さな悲鳴を上げた。その悲鳴はほんの一瞬であつたため、左右の少女は気づいていない。

一瞬の急降下は1分あつたように感じられた。だけどそのスリルはまだ終わらない。急に椅子が止ましたがまた急上昇していった。急上昇が終わつた後はゆっくり降下しだけだった。それで終了ということだ。

「おもしろかつたね」

直人が2人に言った。当の2人はセットした髪が少しづちやぐちやになつたらしく、手鏡で顔を牛手髪を直していた。

「そんなに髪気になるかい？」

「そういうあなたも今日ワックスかけてるでしょ？」

「まあね」

直人は微笑んだ。

第三十八話 最後の夕陽になつても…（前書き）

遊園地回想編、ラストです。

第三十八話 最後の夕陽になつても…

「そろそろ終わり時だなあ」

「ええ、やだあ」

優子が駄々をこねるように直人の肩を揺すつた。

「仕方ないだろ、なあ、敦子」

「まあ、時間は止まつてくれないからね」

敦子の言うとおりだ。時間は待つてくれない。

残り少ない命のタイムリミットも止まつてはくれない。

「やつぱり思い出の最後を飾るのは……」

直人は言いながら観覧車を指差した。

「分かってるねえ、ナオ君は」

優子が肘でつついた。優子が言いたいのは、彼がデートの経験から言えるという事だ。

他県……言つてしまつと千葉だが、そこに住んでいる彼女と遊園地に行つたことがある。丁度、今いる遊園地に。

だが、直人はあまりその時の記憶がなかつた。記憶障害のせいだ。彼の脳は、次々と幸せの記憶を消滅させていく。

千葉県の彼女は第一印象で言つと、日元が女優の夏帆に似ているということだつた。本人はあまり自覚していないようだつたが。

「ななは今頃どうしてるんだろうな……」

ナオトは呟いた。

へえ、平仮名で『なな』かあ。

うん、死んだおばあちゃんが名付け親なの。

微かだけど覚えている片隅の記憶。それはどうでもいいような記憶の一部であり、何よりも大切な心の一部だ。

ありがとう！

録音した記憶で、彼が一番大切としている記録。たつた5文字の記録。それは、ななと会えなくなる……。デビュー当初かその前ぐ

らいに録つた。歩いていると直人はななを見つけた。彼女はハイヒールが折れて歩けなさそうだったから肩をかしてやつた。その拍子に録音機が録音モードに入り、彼女の言葉が録音された。

偶然生まれた、かけがえのないもの。それが、このときの録音だつた。

「結構並んでるみたいだよ」

敦子が指差したのは観覧車の下。三列ぐらい並んでいる。「気長に待とうじゃないか。さあ、行こう」

2人の手をとつて直人は歩き出した。

列は丁度最後尾で並ぶことができた。係員の話によると、観覧車は30分待ちだつた。

直人は録音機の電源をオフにした。少し休まさないといけない。もし2人と会話を交わして、何か重要な内容になつた場合はまた電源をつけなくてはならない。そうしないですむように、直人は音楽を聞くことにした。優子と敦子はガールズトークで直人に話しかける素振りはない。彼が音楽を聴いているせいもある。

30分なんてあつという間だつた。直人は音楽に夢中になりすぎていることもあつて30分経つたことに肩を揺さぶられるまで気づかなかつた。

直人がすわり、その正面に敦子と優子が椅子に座ることになつた。直人は両耳からイヤホンを取つて、再び録音機を再生した。観覧車つていうのはどの漫画でも告白並の重要な話があるはずだ。

「もう中学校生活終わりだね」

敦子が名残惜しそうにいつた。

「私は新たな学校生活を踏み出してますけど」

その隣で優子がくくくと笑つた。

「なあ、この観覧車が、回り続けて……僕たちが今乗つているこの部屋がてっ�んに到達したのと同時に、写真をとろう」

直人がズボンのふとも部分にあるポケットから何かを取り出した。それはデジタルカメラだつた。しかも超小型。

「そんなのずつと持つてたんだ。気がつかなかつたなあ
優子が言つた。しばらくすると、もうすぐつぺんになるところまで来た。

「早くこつちに座りなよ」

「そう急かすなよ」

敦子と優子の間、いわば真ん中に直人が座り込んだ。重さで少し傾いた。

「行くよお」

後10秒だらうか、てつぺんに到達するのは……

「はい、チーズ……」

3人がポーズを取りながら直人が右手でシャッターを押す。その時に、夕陽が昇つた。

「どれどれ、見てみようじやないか」

その写真はとても良い出来だつた。たいしたブレもなく、何よりバックが良い。夕陽が昇るのは直人の計算になかつたが、偶然といえどとても良かつた。

「また、これる日があつたら行こうよ。3人で、遊園地に」

直人が優子の顔を伺つた。優子は微笑んだ。

次に敦子の顔を覗き込む。敦子は小さく頷いた。

「私たちの、約束だよ！」

このとき、2人の少女は直人の病を知らなかつた。

直人にとって、これは最後の夏になつたのかもしれない。だけど、彼は信じていた。また、この2人と同じように夏を迎えることを。

第三十九話 一日目練習の最後に

直人は、一年前の夏のことだけは鮮明に思い出す自信があった。あの日は彼にとって最高の思い出だったからだ。

「……なな

直人の恋人であるななからメールが届いた。携帯から流れる着信音はYUJIの「to Mother」だ。

YUJIは直人に絶対的な信頼を置いている。だから、桜の花びらたちも歌つてくれた。

その女の子たちのためにも、あなたのためにも、私は歌うよ。

YUJIはそう言って引き受けてくれた。

直人もYUJIを信頼している。まるで、家族のようだ。

「……なな、やっぱり僕は、君が大好きだ」

直人は呟いた。

【最近会っていないなあ、私すっごく寂しいよ。でも仕方ないよね。アイドルをデビューさせるなんてもう二回目だからへっちゃらだよね！お仕事頑張って！あ、それと、私に電話しててくれるのはいつかな？女の子を待たせるのはいけないよ？】

それが、ななのメール内容だった。少し長かつたが、内容が大事だ。最近直人はななの事をあまり気にしなくなってきた。このままメールのやり取りを終えたら関係は終わるんじゃないかと。自然消滅という形でもう彼女とは会わないようにしようと。そう思つていた。

だけど、やつぱり僕には無理だ。僕はやっぱり、ななの事が大好きだ。大好きで、仕方がない。

直人はそう気づいた。

直人はすぐに返信した。

【ごめんな。一旦落ち着いたら、会いに行くよ。その時に、僕は君に最高の日をプレゼントする】

少し変かなとも思つたけれども、返信ボタンを押した。
ななの返信がくるのに時間はからなかつた。いや、1分も経つ
ていなかもしれない。

【ほんとにい？じゃあ楽しみにしてるよ。出来るだけ早く会いにきてね。ナアオ】

ななのメールを見て、直人はほくそ微笑んだ。これは、返信しなくていいだろうと直人は思つた。そこへ、1人の少女が顔を覗かせてきた。

「佐江、敦子が戻つてこなかつたのか？」

「イヤホンの調子がなんか悪いんだよねえ」

そう言いながら佐江はイヤホンを直人に渡しながらメールを見ようとしていた。

「彼女から？」

「君には関係ないさ」

「ねえ、どんな子どんな子？可愛い？」

「恋人がいなき君には関係ないさ」

佐江のおでこを人差し指で押した。だが彼女は逆にどんどん近づいてきた。

「ねえ、いいじゃんか、教えてくれるぐらい」

「分かつたから顔近づけるなよ、吐息が熱いから」

そつち？ヒツツコミながら佐江は直人から離れ、横に座りなおした。

「この子だよ」

直人はななの写真を見せた。

「うわ！すっごく可愛い！なんでこの子をAKBに入れなかつたの？」

「彼女には、夢があるんだよ。パティシエになるつていう夢が。今も専門学校に入れるように猛勉強中だ」

「そなんだあ」

佐江は写真を見続けていた。

「どんな子なの？」

「凄く優しいよ。それに明るくて、僕に積極的だった。君と比べたら天と地だね」

「うわあ！ひつど！直人その子にベタ惚れじゃん」

「違うよ、彼女が僕にベタ惚れなんだよ」

「大した自信だね。そんなのどうから湧き上がつてくるの？」

佐江は聴いた。それに対して直人は再度微笑んだ。

「そりやあ当然、僕の心からさ」

直人は携帯の画面部分を閉じた。

第四十話 終了の合図

直人は携帯を閉じた。その瞬間、外側の小さな画面に時刻が表示される。

今は午後4時だった。一日目のレッスンは「こらへん」で終わりにしどうと、直人は佐江に言った。

「みんな、聞いてくれ！今日のレッスンはこれで終わりにするから、支度が出来たら適当に帰つて言ってくれ」

直人が立ち上がった。

「後、オーディオ返して」

少女達は次々と直人にオーディオを返していくなり、更衣室に向かつた。

佐江も立ち上がり更衣室に向かつた。

再度、直人はレッスンルームに一人取り残された。いや、少し表現が悪いかもしないが。

だが、直人はすぐに他人と会話することになった。

レッスンルームに、直人の恩師である秋元康が入ってきた。

「どうだい、調子は？」

「どうも何も、全く僕はおかしくなったみたいですね。急がないといけないのにこんな時間でもうレッスンを終了させてしまっている。しかも今日のレッスン内容は中学校に入学したばかりの一年生たちの授業風景みたいでしたよ」

もちろん、その授業は音楽だ。

「きっと、最初の公演には誰もこないさ」

「そうかもしれません。ですが、僕は絶対に、5人は観客席に座らしてやりますよ」

直人は自信の笑みを浮かべた。

その笑みの意味を悟ったのか、康は問いただした。

「君に自信はあっても、彼女たちには不安しかないぞ？どうやって、

あの観客席を満員にする気なんだ？250人は必要だよ？」

「そんなの……後になつてみないと思いつきませんよ」

直人はその場に胡坐をかいて座りなおした。

「チツ……」

直人は舌打ちをした。さつき言つた自分の台詞に意味などない。康の言葉に負けたくなかつただけだ。

「また発狂したいのか？君は？」

「黙れよ、おっさん」

「もうしていいのか？」

「いや、今の演技です。すいません……」

康の声に圧倒されて、直人は慌てて謝つた。やつぱり、境直人は秋元康には勝てない。

「さて、僕も帰らせていただきます」

「そのまま帰るのか？」

「僕の手荷物はすべてポケットの中に」
ポケットをつまみ上げ、康にジェスチャーした。彼の所有物は、携帯とI podだけだ。デジタルオーディオプレーヤーは秋元康が用意したもので、ここへ来たのもそれを回収しに来たからだ。

「では、失礼いたします」

小さく礼をしてレッスンルームを出て行こうとする。

「待て」

ドアノブに手をかけたところで、直人は歩みをとめた。

「君は、死ぬ前に何をしたい？」

「……」

直人の瞳が一瞬、輝きを失つたかに思えた。

そのとき、脳裏に浮かんだのは、ななとYUI、敦子と優子、そして……自分をずっと護つてくれていた姉の顔だつた。

「……大切な人が、幸せに笑つているところを見れたら、未練はないですかね」

「ついこの間、未練があるから未練はないと言つていなかつたかい

？」

「ええ、そうですね」

直人は顔だけを康に向けた。

背を向けていた康も顔だけをこちらに向けた。

「君は、また逃げる気か？」

その康の言葉に対し、直人はふつと笑った。

「逃げない僕には、非常口は必要ありません」

いつものきめ台詞（その一）を言って、レッスンルームを後にした。

廊下に足を踏み入れ、ドアを閉めてから直人はうつむいた。

「人の決め台詞、勝手にアレンジしちまつた……」

ドン・キホーテを出ると、近くにAKBのメンバーが何人か歩いていた。

いや、まだメンバーと決まつたわけではない。

「あ、ナオティ」

「え？ あ、明日香」

変な呼び方をされて直人は少し戸惑つた。ナオティと呼んだのは倉持明日香だつた。確か、彼女は人に奇妙なニックネームをつける。「明日はダンスレッスンだから、体を休ませてきてね」

「はい、じゃあまた明日。さよなら」

「じゃあね」

明日香はとても温厚な性格だ。直人に対しても敬語でしゃべる。

直人のほうが一歳ほど年下だというのに。

「あ、明日香」

「はい？」

「敬語は使わないでくれるかな？ 僕のほうが年下だし、これから僕たちは仲良くならないといけない。敬語じゃ仲良くしろなんて言わ
れても無理だろ？」

「……はい、わかつたよ」

直人が微笑むと、明日香は微笑み返して駅へ向かっていった。

「優しい人。あんな人ばかりなの？ AKBは？」

気がつくと、隣に敦子がいた。逆の隣には優子が立っている。

「あなたにはななちゃんがいるでしょ？」

「僕が浮氣するつていうのか？」

直人は軽く冗談を口走りながら、駐車場へと向かった。敦子と優子も続く。

駐車場につくと、直人は黒と青のコンセプトカラーが特徴的なバイクのハンドルに触れた。

彼は、中学卒業時にバイクの免許を取つた。一人暮らしなのだし、移動手段は必要だ。

彼のバイクはオートバイクなのではない。サーキットに出場してそうな立派なスポーツバイク。

バイクのハンドルに吊るされていたヘルメットをかぶり、直人はバイクに跨つた。

「どっちか一人なら、乗せてってあげれるけど？」

「意地悪だなあ、ナオ君は……大丈夫。私たちは電車で帰るから」

「そうか。じゃあ、また明日な」

直人は軽く指を振ると、バイクのエンジンを鳴らさせた。

彼はレースに出場したいと少々思つてゐる。なぜなら、バイクの運転の腕前には自信があるからだ。

直人が乗るバイクは、騒音を出しながら、秋葉原の大通りを走つていつた。

一日目。今はあ……午後の一時を過ぎた頃だ。

一日目はダンスを中心としたレッスンだ。いや、性格に言つてダンスレッスンだけだ。

「たかみな、キレイがあつていいねえ」

「ホントですか!? いやあ、嬉しいなあ」

直人に褒められて照れているのか、たかみなは口元を両手で隠すような仕草をとった。

「夏海、腕をもつとこうして」

「えつと、こう?」

直人は一人一人を褒め、アドバイスした。皆が皆、直人のアドバイスに従つてダンスのレッスンをしていた。

ちなみに、直人は人を名字で呼ぶのを嫌う。当人は、「名前で呼んだら親近感が湧く」と言つてゐる。だが、敦子と優子は「名字で呼ぶと周りの人が遠い存在だつて思うんだろう」と解釈してゐる。

「とも、もうちょっと大袈裟に動いてみて」

「これでどう?」

「ああ、いいと思うよ」

名前がメンバーと重なつてゐると、ニックネームや名字で呼ぶ。

それは仕方がないことなのだろう。

幼い頃からダンスを経験してきた子もいれば、全く経験のない素人もいる。今の時点で差がついていたとしても、ステージに立つ時には、皆がダンスのプロになつていなければいけない。

そのためには、48人をデビューサせなければいけない直人自身にも責任がある。

「さあ、全員で会わせるぞ。適当に並んでくれ。さあ、早く!」

48人が適当に並んでいく。また背の順なのは気のせいなのだろうか。

「さあ、かけるよ」

もう馴染みになりつつあるラジカセの再生ボタンを押した。彼女たちが練習していたのは 桜の花びらたち ではない。デビューした時にシングルとして出すつもりの スカート、ひらり だ。

デビューすると決まつたわけではないが、直人には絶対的な自信があつた。それは、YUIをデビューさせることが出来た過去から来ているのかもしれないし、目の前で踊つている少女たちを見てなのかもしれない。だけど、これだけは確実だ。

デビューはまだ程遠い。

今だつて、直人が実際に見本として踊つていないと、彼女たちも通して踊れないからだ。

こつちは今日徹夜で様々なダンスを完璧に覚えたのに、スカウトして集めた女の子たちはまだ完璧に出来ないのか と直人は思つていた。

今日はジーパンを履いていなくてよかつたよ。結構汗かいているからな。

「オッケー。休憩してくれ」

体力に自身がある直人はまだ息を切らしていない。

携帯と一緒にあってあるスポーツドリンクを手にとつた直人はがぶがぶと飲んだ。

500mlのスポーツドリンクはあつという間に空になった。

「ああ、そういえば、あれをみんなに言わなきやな」

直人はI podを取り出した。メモアプリを起動し、三日前の記録を表示する。

「みんな、ちょっと集まってくれ」

直人が召集をかけ、皆が集まってきた。

「これから、君たちを三つのチームに分ける」

並んだ少女たちを見て直人が言つた。

「チームA、チームK、チームB。それが、三つのチーム名だ。あの舞台で毎日48人が歌うのは無理がある。だから、チームに分け

て、日によってチーム公演を行えるようにしたい。そのため、チーム分けをしてみた。別に、違うチームだからって……そんな会えないくなるわけじゃないからね」

直人はメモを見た。

「まず、チームAから発表するよ。チームAのキャプテンに、高橋みなみ」

「え？」

いかにもたかみなのは頭上にクエスチョンマークが浮かびあがりそ
うな表情だった。

だが直人は、たかみなに説明せず説明を続けた。

「……前田敦子、前田亜美、前原夏海。以上16名がチームAだ。
チームAはあつちに集まってくれ」

直人が指差したのは部屋の東方向の端だった。

移動する敦子や麻里子たちを見て、直人はチームKの説明を始めた。

「キャプテンに秋元才加。メンバーは彼女を含め、板野友美、内田真由美、……横山由依、米沢留美の16名だよ。チームKはこっちに集まつて」

指差すのは東の反対、西側だ。

「チームBキャプテンは柏木由紀だよ。で、石田晴香、……宮崎美穂、渡辺麻友の16名だ。君たちは、もうそこで集まってくれ」少し面倒くさくなってしまった直人は、もう考えるのが嫌になつてきた。

「後、AKBの総合キャプテンに、高橋みなみを推薦する」

「え？」

その時の声は、たかみな一人だけではなかつた。

第四十一話 キャプテン

直人を一度たかみなの表情を伺つた。彼女は困惑したような顔をしていた。

「今から、メンバー内で色々自分をアピールしてみてくれ。昨日の自己紹介で皆話したと思つけど、話しきれていない所もあると思うし、何より同じチームだ。同じチームの子の事を良くしらなきゃいけない。ここで、さつそく始めてくれ」

指で音を鳴らした。少しカツコつけたかっただけだ。

「ざわざわと声が聞こえてきた。直人はそれを確認してその場に座り込んで胡坐をかいだ。携帯の画面を見下ろす。

「あの、直人…… さん？」

「さんはいらないよ」

「えつと、直人…… どうして私がキャプテンなんですか？」

直人はその台詞ですぐに誰か分かつた。いや、声で分かつていたかもしれない。

たかみなだ。彼女のポニー テールは一目見ただけで凄く印象に残る。

「私、そんなキャプテンなんて務まらないですよ？」

「それは、君がそう言つているだけだよ」

携帯を閉じ、床に置いた。

「初めて君に会つた時から、僕は君をA K Bのキャプテンにしようと思つていたんだ。それは、君に統率力を感じたからだ」

「統率力って……？」

「いや、僕でも良くわかんないかな…… ただ、ただ単に君をキャプテンにしたかった。それだけなのかもしれない」

直人はたかみなを見た。その途端、たかみなの目が少し見開いた。

「コンタクトしてるんですか？」

「え？ 良く分かつたね。このコンタクト結構わかんないんだぜ？」

「いや、左目のコンタクトがずれかかっています」

「嘘！」

直人は咄嗟に左目を隠した。たかみなは少し驚いて体勢を崩しかけた。

「ちょっと、直してくるよ」

直人は立ち上ると、そそくさとレッスンルームを出て行つた。

「あぶねえ……危うく眼の色がばれるところだった……」

男子トイレの洗面台。直人は左目のコンタクトをとつた。鏡で自分の眼を見る。右目は茶色に近い色をしている。それはコンタクトをつけた状態の瞳だ。

左目は、深海のようなブルーの色を宿していた。

「しかし、母さんの遺言もわけがわからないな……瞳の色を誰にも見せるなって、そんなに自分の瞳の色が嫌いかよ」

直人はふつと微笑んだ。

実は、彼は日本人とフランス人のハーフである。彼の母が生粹のフランス人であり、姉は日本人の血を多く受けついたが、弟の直人はフランス人の血を多く受け継いだ。簡単に説明すると、直人は母に似ているということだ。瞳の色も、フランス人の血からきたものだ。小学生の頃は全く瞳の色を隠そうとはしなかつたが、姉が日本人らしいということで全く似ていないと言われた。

だからと言って、他の所がフランス人に似ているというわけではない。というか、そんなに違いはあるのだろうか？フランス人は金髪が多いが、彼は黒髪だ。

ちなみに、小学校の頃から友人関係にあつた敦子と優子は彼がハーフだと知っている。

「たくよ……」

昔はその遺言に従つていなかつた。なぜなら、コンタクトが苦手だつたからだ。遺言には従おうと思つたけど、その頃はまだ小1だ

つたし、眼に何かを入れるのはあまり得意じゃなかつた。

小5になつてようやくコンタクトがつくれるようになり、今はこの状態だ。

ちなみに彼は病気が悪化してきて視力は悪い。今だつて眼鏡をかけないと読書できない状態だ。

「僕はそのうち補聴器もつけなきやいけないのかな？」

そう言いながら直人はコンタクトを左目につけた。

あまり日本では売つてゐる所が少ないカラー・コンタクト。直人はこのカラー・コンタクトをマネージャーの詩織からもらつた。詩織と直人が出会つたのは小学五年生の初期だ。彼女のななの遠い親戚にあたる詩織は、ある俳優のマネージャーをやめたばかりだつた。その頃に、直人がアイドルになることを決意して詩織をマネージャーに推薦した。

「そろそろレッスンルームに戻らないとな」

直人は男子トイレをでた。

「ゲームはまだまだこれからだ。優子たちに頑張つてもらわないと、こつちも給料がさがるんでね」

直人は一人呟いた。

「僕のデマを愚痴にこぼすのはやめてくれないかな？」

「駄目ですか、康さん？」

一步足を前にだす。彼の後ろには康がいる。

「知つてますか？フランス人つて、言語が通じない人は無視するんですよ。後、アンフェアなことは嫌いです」

「何が言いたいんだ？」

「あなたが彼女たちにデマを言つたんじやないかと思つただけです

よ

直人は後ろの長い髪を揺らした。

直人がトイレに向かった頃、3つのチームに分かれた少女たちは自分をアピールしていた。

「ええっと……私がキャプテンの高橋みなみです。ああ、たかみなつて呼んでください」

たかみなは身を縮めながらも小さく右手を挙げた。

「別に、私、大して言うこともありません。まあ、えつと、歌は得意なほうだと思います」

たかみなは言う事が思いつかなかつた。それは他のみんなも一緒だつた。

たかみなはチームAのキャプテン、そしてAKBのキャプテンだ。今、チームAで円形に並んでいる。

「私もしかして最年長かな？」

声をだしたのは麻里子だつた。

「あ、歳は？」

「二十？」

「わあ、きっと最年長だよお！」

倉持明日香が両手を合わせた。眼を輝かせている。

「やっぱ年上の人は大人っぽくて綺麗だなあ」

それが明日香の本心らしい。

「ありがと。私ね、ファッショoonに興味があつてね、そのうち自分のファッショoonも見つけ出したいなあつて思つてるの」

「わあ、すごいい！」

明日香の目がもつと輝いて見えた。

これが引き金となり、チームAは盛り上がりを見せてきた。

次に、チームB。

「わあ、才加つて腹筋割れてるの！？」

「嘘！私も見せて……うわ！男みたい！」

「それは言わないで！」

とつぐに盛り上がりがつていてる。

チームBも同様だつた。こつちは若い世代の女の子が集まつて、アニメなどの話があがつていた。

それぞれのチームが盛り上がりを見せてきた頃だつた。

レッスンルームに一人の男が入つてきた。秋元康だ。彼が入つてきた途端、部屋の雰囲気が一瞬にして変わつた。秋元康から放たれるのはとてつもない威圧感だつた。

「やあ君たち。話があります、座つたままでいいから聞いてくれませんかね」

康はドアを閉めてそこから動こうとしなかつた。そこから用件を言つらしい。

「直人君がいないから言わせてもらいます。彼はたぶんですが、あなたたちを不作だと思つてingでしちう

「え？」

小さく声を上げたのは敦子だつた。優子も声を上げそになつたが堪えた。

この2人は境直人という人物にもつとも近しい2人だ。驚くのも無理はなかつた。

「きっと公演を始めてもデビューの日はこない……彼はそう思つているかもしません。諦めているかもしません。皆さんに失望しているのです。君たちが努力すれば、彼の想いは変わるかもしれません。私の言つたことはこれだけです。みなさん頑張つてください」

康は部屋を出て行つた。

その言葉を信じた人と、信じていない人、さらには迷う人に分かれた。康の言葉を聴いてショックを受けている子が大半だつた。敦子と優子は当然康の言つたことを信じていない。

もちろん、秋元康の言葉はすべてが嘘であり、でつち上げだ。

直人はこの事態を予測していた。彼がデマを流すのではないかと。

だが、このレッスン時に言うことは確率が低いだろうと思っていた。それは、康の性格を考えた性格だ。だが、計算は少し間違っていたようだ。康は、最初からこうしようと思つていたらしい。

レッスンルームから出て行つた靖は少し口元を吊り上げていた。「どこまで行けるかな……」

その言葉をレッスンルームのドアに残して彼は歩いていく。少し歩いてトイレの前を通り過ぎた。その時、物音がして歩みをとめた。数秒の後、直人が男子トイレからしてきた。

「……優子たちに頑張つてもらわないと、こっちも給料がさがるんですね」

直人が康に視線を向けることなく独り言を呴いた。決して気づいていないわけではないだろう。

「僕のデマを愚痴にこぼすのはやめてくれないかな？」

「駄目ですか、康さん？」

康に直人の給料を下げる覚えはない。いや、今から下げるかもしれない。何せ、嘘のことを愚痴で言つていたのだから。

「知つてますか？フランス人って、言語が通じない人は無視するんですよ。後、アンフェアなことは嫌いです」

「何が言いたいんだ？」

さつき自身が言つたデマのことを知つているのだろうか？だつたら凄い情報網だ。

「あなたが彼女たちにデマを言つたんじゃないかと思つただけですよ」

直人が顔を揺らした。その拍子に後ろの長い髪も揺れた。

「僕がデマを言つたかどうかは君が決めることだよ」

「また、わけがわかんないことを……」

直人は康と目線を合わそうとはしない。

「あなたが何をしようが、僕はいつだってあなたの逆手をとる。そうして僕はあなたに勝つってきたんですよ。音楽にも、人生にも」顔が見えなくても、康には直人の余裕の笑みが思い浮かんだ。

「まあ、否定はしないよ」

康も笑みを浮べた。きっとその笑みは、康の顔を見ていない直人にも分かつことだろう。

第四十四話 舞台×ステージ（前書き）

なるべく現実と同じ事を書いてこようとしていますが、最近どうもオリジナリティが増えています。

第四十四話 舞台へステージ

直人はレッスンルームに戻る前に、彼女たちの公演場所となる舞台へ向かつた。

ドン・キホーテの8階、AKB48劇場といつ看板をつけようとした数人の作業員が看板を運んでいる。

「どう？ 調子は？」

直人は近くの若い作業員に声をかけた。彼は直人と同い年であり、父の手伝いをしに今日ここへやってきた。

「おう！ 君が境直人君！ 生で見るの初めてだな！」

「そうだろうね。作業は順調なの？」

「ああ、ばっちりさ。なんなら中を見ていくといいよ

「ありがとう」

若い作業員に軽く手を振つて直人は歩き出した。

ドン・キホーテの8階を選んだのにはいくつかる理由がある。まず第一に、8階の天井には証明をはじめとして多くの機材を吊り下げる必要があったからだ。そのためにはある程度の天井の高さが求められたのだ。他にいくつかの候補もあつたが、天井高に難があり、最終的にここを選んだのだ。

あともう一つ、直人が直感的にここが良いと言つたからだ。秋元康も否定はしなかつた。それどころか、「さすがだよ、直人君」と褒めてくれた。

劇場に入る。三ヶ月前から全面的に進めたから大分劇場構成が見えてきた。

劇場の座席構成は、定員250名と決めていた。いす席は170席。椅子は6人掛けの長椅子で、残りの80席は立見となる。それは直人が実際にもう作り上げている。

AKBのコンセプトを『会いに行けるアイドル』と決めた直人は、それを理由にステージと客席を非常に接近させる提案をした。その

提案は採用された。

「みんな、今から休憩をとりなよ！」

直人がみんなに声をかけた。

「おお、ありがたい！」という声が漏れた後に、みんなは作業を中断して劇場ロビーにでた。それに続いて直人も劇場をでた。劇場ロビーに通じる通路の壁に、メンバーの写真を貼らうとも思っている。

「境君？」

「え？」

劇場ロビーで直人に話しかけてきたのは、三十代前半ぐらいに見える女性だった。

「あ、まゆみさん。ここにちは。わざわざ来てくれて有難うござります」

「いやあ、なんの

直人は女性と握手をする。その相手は夏まゆみと言つて、AKBのダンスレッスンを担当してくれる人だ。

「明日から頼みますので、宜しくお願ひしますね」

「ド素人だらうとなんらうと、絶対にプロにするわ」

夏まゆみは自信満々だった。過去に何人ものアイドルを担当したか直人には分からなかつたが、凄い人だということはわかつた。

気がつくと、もう午後の四時だつたため、直人は早々にレッスンルームに戻つた。

案の定、みんなが暇そうにしていた。

「あ、えつと、ごめんね。今日のレッスンはここまで。明日から本格的になるからね。はい、解散してね！」

直人は少し面倒くさくなつてしまつたためか、早口で説明した。ぞろぞろとレッスンルームから人が減つていつた。

直人はリラックスして適当に座り込んだ。

直人は疲れた。

正直、疲れた。

「ああ、まゆみさんのおかげで少しは楽かな？明日はライブ活動もあるし。ああ、久しぶりだから歌えるかなあ？」

直人はそのまま横になつた。そのまま眼を瞑る。

疲れが溜まつていたのか、そのまま寝てしまいそうだった。いつそ寝てしまおうか。

「あ……」

「どうしてそんなに溜息ついてはりますんか？」

眼を開けると、天井のライトを遮るように由依の顔が映つた。

「あ、まだ帰つていなかつたんだね」

「あ、少しナオと話がしたいかなあつて……」

「そつか」

直人は上体を起こした。由依は先ほどまでレッスンしていた格好とは違うが、ラフな格好という点は変わらなかつた。

「そういうえば、今日は日曜だつたつけ？京都に戻らなきゃいけないのか」

「はい」

由依は休日にしか東京に来ることができない。学校もあるし、上京するのはまだまだ先だらう。

「友達は、このこと知つてるの？」

「はい。応援してて言つてくれてました」

「そつか……」

あまり同世代の女の子から敬語で話されるのは好きではない。一応学校的に言えれば一つ学年は上だが、直人が中3の頃は、後輩に敬語を使わいでくれと頼んでいたほどだ。もちろん、「先輩」をつけるのも嫌だと言つていた。

だけど、敬語は使わいでくれと言つても仕方ないだらうと直人は分かつていた。

あまり会話を交わしたことがないけれど、直人には分かる気がした。

「随分遠くから來てるよね。梨乃は大分から上京してきたよ」

「そうなんですか。私も早く決めちゃわないよ」

「そうだね」

会話の内容があまり思いつかなかつた。

直人はなんとか言葉を繋ぎ合わせて文章にしようとす。

「じゃあ、平日は自主練習でもしておいてもらおうかな」

「あ、はい。そうするつもりです」

「じゃあ、ちょっと待つて」

直人はレッスンルームを出て行つた。数分後、紙とボールペンを持って戻ってきた。由依の横に腰を下ろす。

「じゃあ、まずは発声練習だよね」

紙の上らへんに『1・発声練習』と書き込んだ。

「次に、ダンスだね。振り付けはまだ覚えていないだろうから、次の1週間分を教えなきやならない。今、君たちにダンスを教える夏まゆみさんにこれをもらつてきた」

直人が別の紙を広げた。それは、ダンスの振り付けの説明書だ。色んなダンスがある。レッスン用のもあれば、君たちが歌うことになる歌のダンスの振り付けもある。当分はこれを練習していくれ

『1・発声練習』の下に『2・振り付け練習』を書き加える。

「まあ、こんなもんなんだよね……後、YUJIの 桜の花びらたちも聴かせておいたほうがいいんだよな」

直人はそう言いながら服のポケットを探つた。薄いチエック柄の上着の右ポケットを探る。すると、錠剤の入つたビンが落ちた。

「あ、落ちましたよ」

由依がビンを拾つた。

「風邪薬ですか？」

「まあ、そんなところだよ」

直人はそう言いながら左手でビンを受け取り、右手で取りたかつたものをとつた。それは銀色のMDウォークマンである。彼は音楽再生機を一つ持つてゐに飽き足らず、いくつも持ち歩いてゐる。一

番良く使うのはI podだ。

「これを君に貸すよ」

小さなヘッドホンと一緒にMDウォークマンを渡す。

「これに、YUIが歌つてくれた曲とメドレーが入つてる。アルバ
ムの一番上のフォルダがそうだから」

そのMDウォークマンには容量ギリギリまで音楽が入つていて。
ほとんどが直人の友人である。同じアーティストとして直人は親し
く接している。

「充電器がいるよね……バイクの椅子の中に入つてるから、帰ると
きに取りに行こう」

「はい」

直人は左手で錠剤のビンをポケットに押し込んだ。

「そろそろ帰つたほうがいいんじゃないのか? 何で帰るんだ?」

「夜行バスか新幹線です」

「じゃあ、今日は新幹線にしなよ。電車賃は僕が奢るからさ」「え? いいんですか?」

「大丈夫だよ。実は最近、お金を使いたくてしょうがないんだよ」

直人は笑みを浮べながら立ち上がつた。由依も立ち上がる。

駐車場につくと、直人はまず椅子を開けた。中からヘッドホンを取り出して由依に渡した後、黒のヘルメットと自分用のヘルメットを取り出した。

「これをかぶつて。君の鞄はここにいれるから

「はい」

由依は言われたとおりにした。直人が椅子に座りながらヘルメッ
トをかぶつた。後ろに由依が乗る。

「飛ばすから。しつかり掴まつてね」

由依は軽く直人の腰に両腕を回す。直人はハンドルを回した。バ
イクを走らせる。

「きやつ!」

予想よりも大分早かつたらしく由依の両腕が少しきつくなつた。

直人はそれを強く感じた。

（女の子の匂いって独特だよな…）

直人は暢気にそう思いながらも、第三者から見れば暴走している風に見えるぐらいの速さでバイクを走らせている。

由依は少し困惑していた。彼女から見た直人の印象は、「優しい人」だった。だけど、今の状況は明らかにギャップがあった。

駅から送り届けた直人は、由依に鞄を渡し、ヘルメットを受け取つた。

「ほら、電車賃」

直人が財布を取り出す。

「本当にいいんですか？」

「いいて。一応、僕のほうが先輩なんだからさ、ちゃんと言つこと言わないと」

「……ずるいですね」

「よく言われるよ」

直人は微笑んだ。由依はそれを見て溜息をついて手を差し伸べた。直人は電車賃をその手の上に乗せた。

「じゃあ……一週間後？」

「はい。そうなりますね」

由依は歩き出した。少し歩いてから振り向きながら手を振つてくれた。直人は手を振ることで対応した。

少し可愛いと思って、直人は照れ隠しにひたすら微笑んでいた。

第四十五話 レッスンスタジオ（前書き）

これからどんどん時間がスキップしていくので、そこは分かっておいてください。

第四十五話 レッスンスタジオ

三日目。直人は久しぶりに、野外ライブを行っていた。観客は総勢約2000人。女、男、子供に老人まで、まさに老若男女と言つべき風景だ。

「今日は久しぶりのライブで、少し歌が下手かもしれない。でも、最後まで付き合つてくれよ！」

直人はマイクに向かつて叫んだ。彼はギターを持っている。その周りには、ドラムとベース、ギタリストが立っている。

「よろしくな」

バンドの仲間に直人は小さく言つた。みんな快く手でグッドマーケを作つた。

「よし、行くよみんな！」

直人はまず最初に持ち歌である「心の欠片」を歌い始めた。

「あのとおりのきいみどり もし、てをつうなげえたら～」

会場は瞬く間に歓声に包まれた。

直人は半年ぶりにその光景を見た。自分がアイドルグループを作ると宣言した時は、会場に盛大が湧いた。効果音などではない。本当にどよめきだつた。

今はそのどよめきはない。何せ、発表することがないからだ。久しぶりのライブだ。思う存分歌わせてもらう。

「今日はサービスするよ！」

直人は少し調子に乗りながらも歌い続けた。当初は2時間の予定だつたが、直人はサービスしまくるので、ライブは3時間した。彼のファンは歓声を増していった。

ライブが終わるなり、直人はライブ会場の待合室にあるシャワーで汗を流していた。

「ああ、気持ちいい。シャワーも命の洗濯だよなあ」

頭のシャンプーを洗い流してシャワーを止めた。

直人の髪は艶やかで、鮮やかだつた。止めていないため、髪は背中の全体にへばりついている。

直人は前髪を上げた。深海が広がっているような鮮やかなブルーの瞳が、目の前の鏡に映る自分を見た。

「これが僕の顔なんだな……フランス人なのか、日本人なのか、どちらなんだろうな」

直人はシャワールームを出た。髪を乾かすのに苦労するため、直人はまず後ろ髪をくくつて、頭に巻きつける。そして軽く髪を拭いてから身体を拭く。それを終えてから髪を乾かすのだ。

それから30分経つてようやく髪を乾かすことができた。待合室で椅子に座つた直人は携帯をいじり始めた。そこへ、花蓮とは別のマネージャー詩織が現れた。

「直人君、午後の授業だけでも言つてきなさい」

「詩織さんはいつから僕のお母さんになつたんですか？」

「保護者よ。さあ、早く行つてきなさい」

もちろん直人は敦子と同じ高校だ。だがほとんど通つていらない為、出席日数が足りなくて危うい。

詩織はそれを心配して学校に行かせるのだ。

今、高校は午前の授業を終え、午後の授業に差し掛かっていた。たつた今、午後の授業を告げるチャイムが鳴つた。

「席につけえ」

敦子のクラスは今から数学だ。号令がかかつてみんなは席に座る。敦子は窓際の席に座つていた。一年生の教室は学校の正門を見渡せる位置にあるため、直人が来るとすぐに分かるのだ。

だから、直人が来た時は皆が窓に押し寄せた。

「おいおい！バイクの音だぞ！」

男子生徒の一人がいた。確かに、うるさいぐらいの騒音が学校に響いてきた。みんなは窓におしかかるように近づいた。

しばらくして黒と青のバイクが門を通りて入ってきた。軽くカーブしてバイクが止まつた。運転手はエンジンを止めた後、ヘルメットを取つた。そこから現れたのは、全校生徒の人気の的である境直人だ。

「直人、遅かつたなあ！」

別の教室から先輩の男子生徒が声をかけた。

「久しぶりのライブだつたんですよ！」

大きめの声で直人が答えた。

彼はバイクを自転車置き場に置いた。他に置き場所がないからだ。

直人が着る制服は大分乱れていて、ネクタイは完全に緩んでいた。

「境、早く来い！」

数学の教師が声をかけた。

「はあい！」

数分も経たないうちに直人は教室についた。彼は教材をすべて学校においてある。小さな鞄を持ちながら直人は教室に入るなりみんなに「おっす」と挨拶した。

「何を暢気にしてるんだお前は」

直人は誰よりもマイペースで、掴みどころのない人物だ。姉を失つて発狂してから、彼は情緒不安定と言われてきたが、直人はそれをネタにして場を盛り上がらせたことがある。直人に弱点はないと誰もが思つていた。

「あ、数学めんどいんで保健室行きます」

「そうはさせるか」

数学の教師は直人を無理やり席に座らせた。

「はあ……勉強だるかつたあ……」

「2学期始まつてばかりだよお。これから勉強ばかりが続くなんだからねえ」

机に突つ伏した直人に敦子が話しかけた。その隣には、同じAK

Bのメンバーである仲川遙香がいる。彼女は偶然同じ高校だった。

「いくらHQ-210でも、出席日数が足りないと……」

「仕事があるんだから仕方ないだろ。仕事のために頭の良い奴が違う学校も諦めたんだぜ？ 出席日数について一番甘い学校がここだたんだよ」

「私と一緒に学校が良いつていう理由じゃないの？」

敦子が自分を指差した。

「どうだろうね……さあ、部活行くか」

「あなたって部活入つてた？」

「入つてるわけねえだろ。レンタル部員だよ」

直人は席を立つた。

「君たちは今から厳しいダンスレッスンだぜ」

そう言つた時の直人は真面目な表情をしていた。

「私はあなたたちの公演を絶対に成功させなきゃいけない。そのために私は甘くしない。容赦しないからね」

レッスンルームとはまた別の部屋。直人は区別するためレッスンスタジオと呼んでいる。

そこに、敦子たちが集まつていた。由依など、東京から遠い所に居るためレッスンに来られない者もいるため少し人数は少ない。今レッスンスタジオにいる少女たちを見て、夏まゆみは厳しい一言を言つた。

「今のおんたたちじゃ、一生『デビュー』なんてできないよ

まゆみは少女たちを見回した。

「とりあえず、適当に踊つてみな。まず、その……高橋みなみから

「え？ 私ですか？」

たかみなは少し戸惑つたが、頷いて少し前に出た。小さな声で歌を歌いながら踊りはじめた。

「はい、全然駄目。そんなのダンスでもなんでもない。ただ暴れてるだけだよ」

まゆみはさらに言葉を飛ばす。

「どうせ全員これー」ときなんだな。お前たちのダンスなんか、誰も振り向かないよ」

まゆみは場の雰囲気を暗くしていく。だが、これがまゆみの作戦といつべき事だった。

これで、彼女たちが本気になってくれれば……

第四十六話 少女が輝くと渋谷も輝く（前書き）

今回は回想です。

第四十六話 少女が輝くと渋谷も輝く

秋葉原と同じ東京に位置する渋谷。その街はギャルが多く歩いていた。

境直人は、雑誌の取材を終えたばかりだった。詩織と花蓮の2人のマネージャーが、たまには仕事をした方が良いということで、スカウトの直前に取材を入れたのだ。

ここに来るのは久しぶりかも……と直人は思った。ありえないことではない。

直人が渋谷に行く理由は一つだけだ。服を買いにきた。それ以外には仕事でしかこない。

今日もスカウトの予定はあった。相手は板野友美だ。だが、先ほど彼女の家に電話したら、渋谷に出掛けていると彼女の母に言われた。

だから、直人は今ここにいる。

今、友美を探している直人は、最近ファッショングーテを変えようと思っている。

そろそろ夏に差し掛かるため、ラフな格好にしようと思っている。今の直人の服装は、シャツの上に黒のベストを着ている。ズボンは色が濃いめのジーンズ。

そして仕上げに黒のハットをかぶる。

渋谷を普通に歩いてても、自分が境直人とはばれない。それはそれでガツカリなのだが、都合が良いのは確かだ。

直人は近くに洋服店を見つけ、そこに入った。

男性服が並ぶ棚に向かう。

「やっぱ、黒シャツはこれがいいかなあ」

この頃の直人はいまいちファッショセンスに自信がない。以前服を買いに行つた時は、優子を連れて行つたものだ。

「ああ、これサイズが会わないな」

直人は黒シャツを商品棚に戻した。

その際に、直人は商品棚の反対側にいる女性の姿をとらえた。

「あ……」

「え？」

直人がいる商品棚の反対は丁度女性服が並んでいる。その商品棚は丁度直人の肩の高さで、女性の顔がはつきりと見えた。

「境……直人？」

女性が呟いた。いや、まだ少女だろう。

「や、やあ」

直人が、今探していた少女だ。

「友美ちゃん、だよね？」

直人がなんなく聞いた。友美は頷く。

「友美、AKBに入つてくれないか？」

「とも……受かつた？」

「ああ、受かつたさ」

直人は微笑んだ。

友美も微笑んだ。

「じゃあ、私、もう一流のアイドル？」

「いや、それはどうだろう……」

正論だ。

「で？直人は服を貰いに来たの？ともを探しに来たの？」

「両方さ」

友美が自分をいきなり呼び捨てで呼んだのには黙つておこう。

直人は友美に今していたことを話した。

「夏のコーデを考えたのさ。でも、ファッションにいまいち自信がなくて」

「じゃあ、私がコーデしてあげる」

友美が直人の隣まで來た。

「黒シャツがいいかなって、思つたんだけど……」

「じゃあ、ジーンズで……ほらほら、試着試着！」

「え？ ちょっと！」

直人は友美に背中を押された。

それから2時間は経つただろうか。

直人の両手は幾つもの袋を握っていた。もちろん、友美が選んでくれた服だが、それは一つだけだ。九割を友美の買った服が占めている。

「次は…こっちかな？」

「まだ行くのかよ？」

直人は溜息をついた。彼はたまに、口調を変えることがあった。いつもの時より比べて、口調が偉そうになるときがあるのだ。学生の時はいつも偉そうなほうの口調になる。

「今日は私の彼氏ってことで……」

「なんでそうなるんだよ？」

「彼氏は恋人の荷物を持たなければいけないのよ」

「そんな規則だつたつけ……？」

直人の経験では、そんなことをするのは規則ではなかつたはずだ。だけど、今の友美に言つても聞いてはもらえないだろう。今日だけは、友美の言つ事に聽こうと直人は思った。

直人は友美を見た。

彼女が輝いているように見えた。

第四十七話 不安（前書き）

出会い・レッスン編完結です。

「君たちの初めての公演日が決まった。今から一ヶ月後の12月8日だ。グランドオープンという形になる。もう振り付けは完璧だと思う。今日はレコーディングをしてもらつた。公演では君たちは踊るだけでいい」

直人は皆を見渡した。ここはレッスンスタジオ。部屋にはメンバーや全員と夏まゆみがいる。グランドオープンまで後一ヶ月ということを彼は伝えにきたのだ。

「明日からは、練習場所を劇場スタジオに移す。まゆみさんの指導に皆良く耐えられてきたと思ってる。今日はそれだけだ。解散してくれ」

直人はそれだけ言うとレッスンスタジオを出た。解散とは言つたが、彼女たちは夢を追いかけている。きっと練習を再開しているだろ？

「はあ……観客は何人いるんだろうな」

きっと、初の公演の観客席には関係者も座るはずだ。たぶん、數十人ほど。

直人は劇場へ向かつた。劇場は一応完成している。後は照明などの機具をとりつけるだけだ。

スタジオに入ると、一人の女性スタッフがすりを磨いていた。

「サクラさん」

「あ、直人君？どう、皆は」

「ボチボチつてとこかな」

スタッフのサクラは現場のチーフだ。任命したのは直人自身である。

「良いことを教えてあげよつか？」

直人はサクラの雑巾をそつと取ると、せり一枚をゆっくり丁寧に拭いていった。

「直線で雑巾かけるとね、すりの隙間に埃が落ちるんだよね」

「へえ、そうなんですか」

「親もいなくて、育ててくれる人もいなかつたから、姉さんは必死に金を稼いでくれた。出来るだけ僕は姉さんの役に立ちたくて、最初は家の掃除をしてたんだ。それで、家に床がすりの部分があつてね。埃が隙間に落ちていくのがわかつたんだ。それでこの方法が分かつたんだよ」

直人は埃を綺麗にふき取つて、水の入つたバケツに雑巾を入れた。「それと、パネルもちゃんと磨かないといけない。もし公演が、照明を暗くして行うのであれば、パネルを使って公演者を輝かせなければいけない」

直人はパネルを指差した。

「サクラさん、僕が言えるのはたつた一つだけだ

「なんですか？」

「皆は、スタッフはただの影だつて言つかもしれない。輝くのはステージに立つ者……つまり僕のようなアイドルで、サクラさんのようなスタッフはどれだけステージを磨こうが輝くことはできない。問題は僕たちが輝くかどうかということ……実際に誰か言つていた気がする……だけど、僕はそうは思わない。僕だって、アイドルとしてステージで立つてきた。だけど、アイドルは自分で輝いてるんじゃない。誰かに照らされて輝いてるんだつて思うよ」

直人はサクラの手を握つた。

「彼女たちを、照らしてくれ」

「……わかつてるよ、そんなこと」

サクラは微笑んだ。

その日の夜。直人の家には、敦子と優子が泊まりに来ていた。別に直人は変な気を起こすことはない。昔から泊まりに来ていたし、軽い気持ちだった。その代わり、その時の家事洗濯はすべて直人が

することになつたが。

「だから、ここはこう歌うんだよ……」

「うんうん」

当然、直人は振り付けと歌の練習を2人に施していた。2人は嫌がる事もなかつた。

「後一ヶ月で君たちは全く知らない人たちの前で踊ることになるんだから、覚悟しとけよ」

「直人は、初めてステージにたつた時、どうだつた?」

「そりやあ、緊張したさ。花蓮さんや詩織さんが裏で何をしたか知らないけど、小さな劇場に人がいっぱい集まつてた。その時は、同級生とバンドを組んで……学生ライブに出場しただけだつた。だけど、それがきっかけで、僕は康さんのおかげでアイドルになつたんだよ」

そうだ。あの時のライブですべてが変わつた。あの場所に秋元康がいなかつたら……今直人は孤独に苛まれ続けていただろ。だが、彼は今こうして、ふたりの少女と時を過ごしている。

「君たちがいてくれたおかげで、今の僕は平常心を保てるのかもしれないな」

「平常心を保ててるのはその薬のおかげでしょ」

優子が、今直人が飲もうとしている錠剤を指差した。

「どうだらうね」

直人は錠剤を一つ飲み干した。

「発狂したら私たちが困るんだよ? 平常心を保つためにはその薬を飲むしか方法はない。飲まなければあなたは狂いだしてしまつ。そういうでしょ?」

「ああ、その通りだ。あの薬は僕の病気の悪化を防ぐものじゃない。僕の発狂を防ぐものだ。病はもう止めることができない。だから、やりたいことを今やりつくしたいんだよ」

「じゃあ童貞は卒業しなきやね」

優子は言った。

「その話はタブーだぞ」
直人は軽くツッコミを入れておいた。

第四十七話 不安（後書き）

次話からは『デビュー編』に移ります。

第四十八話は直人の初ライブを描いた回想編です。

第四十八話 初ライブ（前書き）

今回は予告したとおり、直人の初ライブの日の出来事です。

第四十八話 初ライブ

中学一年生の6月初期。東京の片隅。境直人は、バンドを組んで、歌を歌おうと決めてすぐに実行に移した。

高校生の軽音部など、様々なバンドグループがライブを披露する小さな劇場に、眼鏡モードの直人は居た。

「みんな、ありがとう。僕のわがままで、ここまで付き合ってくれて」

「いいことよ」

「そうだよ。私たちはチームなんだしね？」

彼とバンドを組んでくれたのは、皆幼少期から音楽の道を目指していた者たちばかりだった。ボーカル兼ギターを担当する直人は、ギターを磨いていた。他に、ベースが一人、ドラムが一人の、3人のチームだ。

「大丈夫？」

「大丈夫ですよ、詩織さん」

直人はギターをテーブルに置いた。

ここは、用意された待合室だ。その部屋には、直人をはじめ、優子、敦子、詩織、花蓮、ベースの健崎当麻とドラムの鮎川陽菜がいる。

「手が震ってるよ、ナオ君」

優子が直人の手をそつと握ってくれた。

「ごめん、人前で歌うのは……初めてだからさ」

直人の心にあるのは、緊張ではなく不安だった。観客席に誰もいなかつたら、どうしよう。それでも僕は歌うのだろうか？

直人は優子の手を握り返した。

「ああ……どうしよう」

「ななちゃんに電話したらどうなの？」

「もうしたよ」

行動だけは早い直人だった。彼は考えるよりもまず実行に移すタイプだ。小ライブもその調子で歌つてくれるとしても有難いと、全員が想つていた。

「すいめせえん、次直しくお願ひします！」

ライブを仕切つている女性が待合室に入つてきた。だが、一言言つとすぐに出で行つた。

「……優子、いつもおまじないをやつてくれ」

「……わかつた」

優子は直人の両手を、自分の両手で包み込んだ。

「あなたは、絶対に後ろを振り向いてはいけない。前だけを向いて走り続けるの。そうすれば、あなたは本当の幸せを手に入れるわ」

一瞬、脳裏を姉の顔が過ぎつた。

「あなたは、今、自分にとつてすべきことを行つていますか？」

優子が問う。直人は頷いた。

「今からあなたがやることは、あなたがやりたいことですか？」

「ああ、そうだ」

「じゃあ、自分の限界を越えるまで、前だけを向いて走り続けなさい」

「……よし、やるか！」

直人は立ち上がつた。優子は手を離す。直人は眼鏡をとつた。コンタクトを入れ始めたばっかりなので、少し眼が痛い。

今優子が言つたのがおまじないだ。少し長いが、彼にとつて、このおまじないはとても必要なものだつた。

これは、親を失つた自分に、希望を与えてくれた姉がいつもしてくれたおまじないだ。これのどこがおまじないか、最初は分からなかつたけど、なぜかそのおまじないを聞くと…緊張も…不安も…すべて消し飛んでいた。姉がいなくなつて間もない今、おまじないをしてくれる人は、優子が敦子だけだ。

「こいつ、当麻、陽菜」

「おう」

「頑張ろうね」

直人は、当麻と陽菜と共に、ステージに出た。直人は、まだまだ募る不安を頭の中から追い払いながら、ステージに小走りで出た。

観客席は……満員だった。満員どころではない。椅子は見えなくなり、劇場にいる客全員が立つて直人の名前を「ホールしている。（もしかして、ユーチューブのおかげかな？」

直人は一ヶ月前に、今から歌う歌を動画としてユーチューブに流していた。それが反響を呼んだのだろうか。

「みなさん、今日は……宜しくお願ひします！」

直人は笑顔をみんなに見せた。観客席から瞬く間に歓声が沸いた。直人は歌いだした。

それは、心の欠片 だった。後に、彼の持ち歌となるその曲は、人々の心を掴んだ。

「がんばれえ、直人オ！」

観客席の最前列で敦子は右手を振り上げていた。優子も同様だった。

今、歌っている直人は、すべての嫌な事を忘れていた。顔を知らない両親、つい最近自殺した姉、自分の瞳の色を隠さなければならぬ理由が分からぬこと、すべてを忘れている。考えられるのは、歌を歌うと、心がスッキリするということだ。楽しくて楽しくて、しうがなかつた。

観客席の後ろのほうで、秋元康は、「見つけた」と呟いた。

第四十九話 恩師との過去

ドン・キホーテ8階のAKB劇場。完成間近のステージで、敦子たちメンバーは踊っていた。激しく身体を動かす少女たちは、夢を追いかけるだけの女の子に見えた。

観客席の後方列、3人の男女が座っていた。左から、夏まゆみ、境直人、秋元康である。

「予定のグランドオープンよりも一週間遅らせて正解だつたのかもしれませんね」

直人が呟く。まゆみは頷いた。

「彼女たちはまだまだ見直すべき点がある。一人ずつ指導をするべきだわ」

まゆみは行つた。直人も肯定する。康は、両腕で抱える猫に注意を払つていた。

「どこから連れてきたんですか？その猫は」
直人が康に尋ねた。

「君がさつき連れてきたんだろう？」
「そうだつたつけ」

直人はあまり覚えていないが、康が言つならそうなのだろう。

「どう思いますか？彼女たちを」

直人は……今度は、2人に尋ねた。

「このままじゃ、この席が満員になることはないわね」
夏まゆみが観客席を見回した。

店員席が、ざつと250人だ。250人集めるのは、彼女たちにとって困難だ。

「12月7日の、デビュー記者会見のことなんですが……あなたは本当に参加しないんですか？」

「それは直人君だけで十分だよ。僕は参加しない」

両腕で抱えていた猫が安から離れていった。

安しは少し残念そうな表情をした。

「康さん、じゃがりこあげます」

「ああ、ありがとう」

直人は安しにじゃがりこを渡した。近くのコンビニで買つてきたのだ。最初は自分が食べようと思っていたのだが、この際だ、仕方ない。

「じゃがりこは美味しいな」

「ええ、そうですね」

直人は踊り続けるメンバーたちを見る。

みんな、必死だった。それもそのはずだ。グランドオープン、つまり本番まで一ヶ月をきつた今、苦手な事があるのはまずい。優子も苦手な振り付けがあると言つていた。

「ゲームはまだ本編にも至つていない……」

直人は咳きながら、録音機を手に取つた。三十分前から録音をしている。

「そういう言葉好きだね」

まゆみが言つた。

「なぜか、『ゲーム』つていう言葉を使いたくなるんですね。何をゲームに例えてるのか、使つてる僕もあんま分かんないんですね」

「……はは、直人君らしいな」

康がじゃがりこをかじつた。

気がつくと、メンバーは疲れ果てていた。倒れている子もいる。

「みんな、だいじょう」

直人がみんなを心配して立ち上がるうとした時……

「もう動けない奴は観客席に座つてな。動けるものだけ練習を続けな」

まゆみが言つた。

「まゆみさん！」

「……あんたは甘すぎなんだ、直人。お前も分かつてははずだ」

「…………」

直人はステージの方向に眼を向けた。

カラーコンタクトが、ずれた気がした。

「……確かに僕は甘い。だけど、僕にはこうすることしかできないんだ」

直人は言い切った。そして、ステージに近づいた。ステージにいるのは25人ほど。そのうち10人がその場に倒れていた。優子も、その一人だった。

「これじゃ、熱中症になっている人もいるかもな」

直人は、劇場をでた。出てすぐのところに、ぬるめのスポーツ飲料が置かれた机がある。その奥には水道。直人はありつたけのタオルを集めて、冷たい水に浸した。

タオルをすべて絞り、再び劇場に入った。

スポーツ飲料とタオルを一つずつ、メンバーに渡していく。次は倒れている者たちだ。エアコンの設備は整っていないし、何より微風が必要だった。

「ほらよ

いつのまにか、夏まゆみが扇風機を一台持ってきてくれていた。その後ろには同じく風船気を一台持った秋元康。

「ありがとうございます」

直人は倒れている人を全員ステージから下ろした。最後に下ろしたのは、優子だった。

直人は優子を抱きかかえた。

「また……助けられちゃったかあ」

「これでまた借りができたな」

「またつて……どういうこと?」

直人は優子を抱きかかえたままステージを降りた。

「レッスンの初日に昼食奢つただろ? あんときの借りはまだ残つてるぜ」

「何の話かなあ……?」

「とほけんなよ」

そう言いながら、直人は優子をゆっくりと最前列の椅子に座らせた。延長コードをつけて扇風機を最前列の前にいて、微風にして起動させた。

「みんな……がんばろうな」

直人は、聽こえない人もいたかもしれないけど、小さくみんなに応援の言葉を送った。

「ゲームは、もう本編なのかもしれないな」

直人は、録音機の録音モードをオフに切り替えた。

第五十話 族・恩讐との過去（前書き）

今回は回想で、恩讐との過去を本当に明かします。

第五十話 族・恩師との過去

中学一年生。

初のミニライブは大成功を収めた。

直人はこのミニライブに大満足だった。もちろん、当麻や陽菜も満足していた。3人は汗を垂らしながら待合室でスポーツ飲料を飲んでいた。

「よかつたあ。私のおまじないのおかげかな？」

「そうみたいだ……もちろん、敦子やみんながいたおかげでもあるよ」

直人は微笑んだ。

「ああ、すつきりしたあ」

直人がスポーツ飲料を一気に飲み干した。

と、その時。

「やあ、お邪魔するよ」

いきなり、待合室に一人男性が入ってきた。小太りのその男は真っ直ぐ直人に近づいた。

「僕は、秋元康という者だ。君に少し用がある」

「なんですか？」

直人は明らかに警戒の目を向けていた。だが、その瞳もすぐに見開かれる事となる。

「僕は君の歌声に惚れてしまったようだ。どうだい？男性アーティストとして音楽界に『デビューしてみないか？』

「え？」

「は？」

その場にいる全員が声を漏らした。

直人はそんなこと想像もしていなかった。

「僕はプロデューサーもしていてね。そうだなあ……『おにやんこ』も僕が手がけたんだよ。あと、『着信アリ』の脚本とかもやったよ

193

「いや、さすがにそれは知っています」

直人は空になつたペットボトルをテーブルに置いた。

「君たちバンドグループ全員で、今度大きなライブをしてみないか？」

「そりゃあ、いい話ですけど……」

「実は……君たちのライブ映像をたつたいまサイトにアップしてねえ、今……一気に1000人ほど見ているね」

康はさも冗談のように言つているが、直人には冗談のように聞こえなかつた。

「どうだい？話に乗つてみるかい？」

尋ねられた直人は、敦子に視線を向けた。

敦子が……姉さんのように思えた。

姉さん、あなたはなぜ、僕を置いて逝つてしまつたの？

その答えが返つてくるはずもなかつた。

直人は強い眼差しを秋元康に向けた。

「やります。やらせてください！」

「……よし、決まつたな」

秋元康は満足そうに微笑んだ。

当麻も、陽菜も、直人についていくと言つて賛成してくれた。

「君たちは、今から一週間後の土曜日に、ある劇場で歌つてもらう。それじゃあ」

康は待合室を出て行つた。

「ナオ君、本当に大丈夫なの？」

優子が尋ねた。

「いや、大丈夫じゃない。なんかわかんないけど……」

直人は天井を仰ぎ見た。

「……姉さんが、やれつて言つてる気がするんだ……」

第五十一話 心

「ああ、ほんとにいけんのかあ？」

ドン・キホーテの休憩室。直人は音楽を聴きながらソファに寝そべっていた。この部屋にいるのは同僚の陽菜だけだ。

「大丈夫？」

陽菜が尋ねる。直人は首を横に振った。

「このままじや駄目だな。初公演はチームAにすることにしたけど……まだまだ素人なんだよな」

直人は言った。それは嘘ではない。

まだ、誰も完璧じやない。この公演をするために必要な事が出来ていない。振り付けが出来ても、歌が上手くても、まだ足りないものが一つだけある。

それは、観客に見せるための笑顔だ。その笑顔が観客の心に届けば、その観客はいつしかファンへと変わっていく。

直人はそう信じている。いや、確信している。自身も、そうしてファンを増やしていくのだ。いや、ファンが増えた理由が絶対そうだとは限らないが。

「陽菜、ありがとうな。この三年間、ついてきてくれて」「いきなり何言つてるの？ 何かあつた？」

「……」

直人はイヤホンをとった。そしてポケットからI pod……を取り出したはずだった。だが、直人が今手にしているのは録音機だった。直人は今初めて陽菜と目線を合わせた。

彼はカラーコンタクトをとっている。だから、彼の瞳はアクアブルーの色を宿していた。深海のような綺麗な瞳が陽菜の視線に映つた。

次第に、直人の瞳に潤いが生じた。

そして、彼の頬を大量の涙が流れていった。

「どうしたのよ……？」

直人は上体を起こした。それと同時に陽菜が直人の隣に座り、両手で直人の顔を包み込んだ。

直人は声を出せなかつた。一体、彼の身に何が起きたのか陽菜には全く理解できなかつた。

一分間、その状態が続いた。そして、涙が流れ続けるまま、直人は声を上げた。

「何も……思い出せない……」

「……そんな」

陽菜が悲痛の声を上げた。

「何も……って……いつの事を思い出せないの？」

「……僕は……自分の名前が……分からない」

「そんなことまで……」

「僕が病気で、記憶障害を持つているのも忘れてない……君たちの事も、敦子たちの事も覚えてる。なのに……唯一、想い出せない人がいるんだ……」

「それは誰？」

陽菜が尋ねる。直人の涙はこぼれ続けた。

「姉さんだ……」

「ああ……写真を探さないと」

陽菜は直人の携帯をとつて彼の姉の写真をさがした。

「ひ……な……」

直人はもう涙を流さないが、放心状態になつていた。

「ほら、お姉さんの顔よ」

陽菜が直人に携帯を渡す。

「姉さん……」

携帯に映つてるのは直人と姉が幸せそうに笑つている写真だつた。

「なあ、愛奈」「

「また」

「あ、『めん』

「もう、仕方ないなあ、これからは愛奈でいいよ」

「……」

いつのまにか、泣いていたのは陽菜のほうだった。
彼女の本当の名前は、愛奈だった。彼女は昔からのその名前が嫌いだつた。なぜなら、大嫌いな殺人犯の叔母と同じ名前だつたからだ。陽菜という名前は直人が考えたのだ。

でも、彼は自然と、本当の名前を覚えていた。何回か呼ばれた時は、陽菜は嫌がつていたが、直人に呼ばれるのは、自然と嫌ではなかつた。

「このまま、僕は君たちの事も忘れてしまうのかな？」

直人が恐れたような表情を陽菜……愛奈に見せた。

愛奈は直人を見据えた。そして、だまつたまま直人を抱き寄せた。女性の甘い香りが漂つた。

「例えあなたがすべてを忘れても、私が、すべてを思い出させてあげる」

「……愛奈」

直人は、自分を抱き寄せる少女の名を呴いた。

そして愛奈は、今の状況に罪悪感を感じると共に、嬉しくもあつた。

（ごめんね、ななちゃん、許して。私だけ、好きな人ぐらいいるんだよ……とつても優しくて、それでいて想いを伝えることができなかつたけど、私が持つ彼への想いは、これからずつと変わらないと思う）

愛奈は、声に出さず言つた。それは、想い人の　想い人へのメッセージだつた。

その頃、直人と愛奈がいる休憩室。そのドアの反対側。それは通路だ。その通路で、休憩室のドアにもたれかかる少女が一人いた。

前田敦子である。彼女は、親がいなくなつて情緒不安定となつた直人を支えてきた1人だつた。姉がいなくなつて、境直人という人物を端から端まで知る人物は敦子を含め3人だけとなつた。他の2人は、同じく幼馴染の優子と、彼が一番大事とする恋人なである。

敦子はずつと、今までの2人の会話を聞き取つていた。直人が「何も思い出せない」と言つた時には、敦子は顔を両手でうすめてその場にしゃがみ込んでいた。

「どうしたの……あっちゃん？」

敦子は顔を上げた。彼女に話しかけたのは、優子だつた。

「直人が……」

敦子の口から出たのはその言葉だけだつた。

「悪化したんだね」

優子は敦子の前でしゃがみ込んだ。

「大丈夫だよ。きっと良くなるから……」

最後は不安であまり言葉にならなかつた。優子は信じていた。信じたかつた。

直人が、たかが病氣で死ぬわけがないと。

AKB劇場。チームAのメンバーは、レッスンを始めるためここに集まっていた。後は、彼らの指導を担当する夏まゆみが来ればいいだけだ。夏まゆみが来ればレッスンは開始される。

だが、彼女たちはステージ上で踊っていた。

自主練習だ。彼女たちは、自分たちでも分かつていたのだ。このままでは駄目だと。

初日の公演は、チームAが担当する。公演名は『PARTY』が始まるよ『だ。その公演で彼女たちは計10曲の歌を披露してもらう。披露する相手が喜ぶかどうかはまだ分からない。

いや、喜んでもらわないと駄目だ。

「ねえ、直人君は？」

自主練習の最中、麻里子は敦子に聞いた。

「誰にも会いたくないんだって」

敦子は答えた。その表情は、明るくはなかった。

姉の顔を思い出せなくなつたのが相当のショックだつたのだろう。姉が映つているのは、愛奈がとっさに見せた、直人の携帯にある写真だけだった。

あの写真がなければ、直人はもう大切な姉の顔を思い出せる事はなかつただろう。

「どうしたんだろ？」「？」

「さあ、私にも分かんない」

敦子は言った。

「お、やつてる」

劇場に夏まゆみが入ってきた。彼女はメンバーを一瞥するなり、最前列中央の席に座り込んだ。

「今日はたっぷり時間があるから、すべて通してやつてみようと思つてゐるから。ステージへ上がる前から、降りた後まで、すべて通す

よ

ふと敦子はまゆみの手元にラジカセがあるのが気づいた。天井に視線を移すと、まだスピーカーは設置されていなかった。

「はい。裏から入るところからやるから、みんな裏に回つて」まゆみが指示を出した。メンバーはすぐさまステージ裏へと駆け込んだ。

休憩室。

直人はソファに寝そべっていた。愛奈を部屋から追い出した直人の瞳は、輝きを失っているようだつた。直人の瞳を見ると、深海の淵を泳いでいるようだ。

彼は放心状態と言つても過言ではなかつた。

恋が実らなかつた、なんてものじやない。一番大切だつた人、想い出の中で生きるたつた一人の家族が思い出せなくなつたのだ。

直人は左手に携帯を握り締めていた。その携帯の画面には、姉ろ直人の一枚の写真が映つている。

これを手放したら、また姉を忘れてしまうんじやないかと、不安でたまらなかつた。

ふいに、ドアが開いて横山由依が入つてきた。ちなみに今日は土曜日だ。

「ごめん。今日は1人でいたいんだ……」

直人の声はかすれていた。由依は心配したようにソファに近づいた。ソファの近くに椅子を置いて座つた。

「少しだけでも、話できなですか？」

まだ関東の言葉に慣れていないようで、由依の台詞は少し遅かつた。

「ちょっとだけしてくれよ」

直人は瞼を閉じた。

「お姉さんですか？」

由依は携帯を覗き見ていたようで、気になつて尋ねた。

「ああ、そうだ。僕にとつて、とても大切な人だよ」

直人は答えた。五ヶ月ほど前のTV番組で、直人は家族が誰もない事を明かしている。中一の頃に、姉がストーカーに殺されたという事も、インターネットで公表した。

それでも尚、公表していない事はたくさんある。

「悪い夢でも、見たんですか？」

由依が心配した。

「まあ、そんなとこかな」

実際は違う。だけど、記憶障害があることを公害してはいけない。

知っているのはメンバー内では敦子と優子だけだ。

「世の中には、色んな人がいるよね？」

「え？」

直人は瞼を開けた。

「乱暴な人、優しい人、格好良い人、可愛い人、美しい人……みんな違うよね。例え、血が繋がっていても、愛する人でも、好きなものが同じでも、他人が自分と違うのは当たり前だ。だから、人は……僕たちは、誰かを愛せる。それが、当たり前なんだ。だったら

」

直人と由依の目が合つた。

「人を愛せない僕は、誰なんだろう？」

由依は返す言葉もなかつた。

きっと、姉を失ったショックをまた感じているのだろうと、由依はそう思つた。そう思う事にした。

「ホンマは、あなたを初めて見た時、どうでもいいやとか思つてた。だけど、あなたと話してて、ほんとははこんなにも優しいって思つたよ」

「ありがとう、嬉しいよ」

直人は、目の前の相手が必要としてくれるのが分かつた。自分なんて必要ないのかもしれないと感じていたが、それは間違い

だつたようだ。

再びAKB劇場。みんな、息を切らしていた。まだ通し練習は終わっていない。今は6曲目を踊っている最中だった。

「まだまだ終わらないぞお！」

まゆみが声をかけた。チームAはたとえ練習であつても全力で踊り続けた。

その場に、今まで休憩室に引きこもつていた直人が現れた。敦子は少し驚く。だけど、喜んでいた。直人は黙つたまままゆみと同じ列（しかし少し離れた位置）の席に座り、ダンスをじつと見ていた。一人ずつ、確実に、全員。

「やっぱり、来た」

麻里子は、かすかに微笑んだ。

日曜日を過ぎる学生は、きっと一つの思いを抱くことだろう。

一つ、それは、今日は授業はない！

もう一つ、明日は授業だ……。

昨日まで、辛いレッスンに耐えてきた少女たち。たまには休暇も必要だと直人は思い、朝一時間だけ練習をさせて後は自由行動にした。

直人はせっかくなので、午前は高校のバスケ部の練習に参加した。バスケ部のメンバーは直人の登場に喜んでくれていた。顧問はしていた練習を中止してすぐさまゲームを開始した。彼も直人が来たのを喜んでいる模様。

「おい！そこはこうやるんだぞ！」

直人はディフェンスを軽々と避けてスリー・ポイントシュートをうつ。

ボールは綺麗にネットを抜けていった。

直人はゲームを十一時に終えて、渋谷を歩くことにした。もしかしたらメンバーに遭遇するかもしれない。まあ、一人は寂しいからそちらのほうがいいのだが。

「どこいこつかなあ」

両耳にイヤホンをつけて直人は渋谷の街を歩いた。

少し歩いて直人は脚をとめた。目の前の洋服店に視線を向ける。

「そういえば、友美と会ったのはここだつたな……」

あの時は、荷物持ちをさせられて本当の目的を忘れていた気がした。

この半年間、とても短かつたようで、長かつた気がする。この半年間で色んなことがあった。48人の少女の出会いの時期。初めて

歌から離れた時期。そして、境直人が変わった時期。

48人とも、全く異なった人物だった。当たり前のことだ。

「部屋の模様替えでもしようかな……」

そう思いながら、直人は雑貨店に立ち寄った。

彼の家は、生まれた頃から同じだ。マンションに住み替えようとも思ったが、今住む家には数え切れない思い出がある。なかなか離れることができなかつた。

雑貨店に入った直人は、本棚などを見て回つた。彼の家にはたくさんの中棚と、スピーカーがある。

直人の家は皆で洋館と呼んでいる。それは屋敷が広いからだ。一戸建ての家に1人暮らしどう上京はあまり愉快ではない。直人は

そう感じて、家に音楽を流すことで寂しさを消している。

友達に家に泊まつてもらうのも、寂しいからなのかも知れない。

「あれ？」

雑貨店を見て回つてゐるうちに、直人は知つてゐる人物に出会つた。

「あ、直人？」

宮澤佐江だつた。携帯で誰かと会話している。

「あ、ママ。後でかけなおすねえ」

佐江は母親と電話してゐるようだつた。電話を終えて佐江は直人に向き直つた。

「あなたもここに来てたんだね」

「まあね。僕1人暮らしだからさ」

「ああ、そうだつたねえ」

佐江は相槌を打つた。

「せつかくだから、一緒に他の店行く？」

「いいね」

直人は微笑んだ。

「じゃあ、早く行こう」

佐江が雑貨店のドアを指差す。

「じゃあ、行こう。もうちょっとで昼時だ」

直人は佐江の手を握った。そのまま引いて雑貨店を出て行った。

「うわ、強引だねえ」

「僕はどちらかといふと肉食系でね。さあ、行きたいところは山ほどあるよ」

「佐江も山ほどあるかなあ」

佐江が直人の横の位置までたどり着いた。歩道は人でいっぱいだつた。だが、その大半が直人に視線を巡らせていた。

「の人、格好良いなあ……」

「あれ、境直人じゃないの？」

「ほんとだあ。女の子と手繋いでるう。いいなあ」

周囲から女性の声がいくつも聴こえてくる。佐江はきっと彼のファンだろうと思った。それは正解だ。彼は優しくてイケメンだと思うし、学校では女子に人気があると敦子から聞いた。それも分かるような気がする。

「色々見て回る前に、お昼にしない？」

「いいね。マクドとか？」

「ファーストフード好きなの？」

「ちょっと意外だなあと、佐江は心中でそう思った。

第五十四話 日曜日のハンバーグ

「何が食べたい？」

直人が佐江に尋ねた。

「直人は？」

「うーん、ハンバーグ、かな？」

「おお、グッドタイミングだねえ」

そう言いながら佐江は目の前の店を指差した。その店はハンバーグをメインとするレストランだった。

「じゃあ、あそこにしようか」

佐江は頷いて、今度は彼女が直人の手を引いた。先程からずっと握つたままだったので、直人は手汗大丈夫かな？などと心配していた。なぜずっと握っているのかは考えていいなかつた。

「あ、境さん！また来てくれたんですね？嬉しいなあ！」

「久しぶりだね、恵美ちゃん、元気だつた？」

「はい！とっても元気です！」

レストランに入るなり、若い女の子のアルバイト店員が出向いた。その女の子は直人と知り合いのようで、佐江は話に入り込めなかつた。

「あ、境さん、彼女ですか？」

恵美と呼ばれた少女は佐江を一瞥してから直人に尋ねた。

「いいや、違うよ。でも、大切な友人かな」

「そうなんだ……」

恵美はふつと安堵の息を吐いた。

「どうかした？」

それを見て直人が心配した。恵美は首を左右に振つて応えた。

「席に案内してくれるかな？」

「あ、そうだつた……2名様、ご案内です！」

直人と佐江は窓に近い席に案内された。四人分の席に2人は向か

い合つて座つた。机に携帯などを置く。

「それ、録音機？ちょっと聞かせてよおー！」

「駄目だよ」

「じゃあそこに置かないでおおー！」

「仕方ないだろ。ジーンズなんだからポケットにいれてたら座れないだろ」

「どのズボンだつて一緒にような氣もするけど」

「早く食べたいもの探せよ」

「ああ、話そらしたあ」

傍から見れば、佐江と直人は恋仲に見えただろ。だけど、実際は親と子のような関係だ。何せ、直人は彼女をアイドルとして「デビューさせなければいけなくて、彼女はアイドルである直人に様々な事を学んでデビューしなければならないのだ。

「はい、お水でえす」

2人が仲良く喋っているのを邪魔するかのように恵美が水を運んできた。

「僕、チーズハンバーグで」

「あ、じゃあ私はダブルチーズで！」

「かしこまりました」

恵美は2人の注文を聞くなり、厨房の方へ向かつた。

「さつきも思つたんだけど、2人つて知り合い？」

「まあね。ここに来たことあるのは一回だけなんだけど、恵美ちゃんは……インターネットのあるサイトで知りあつてたまたま会つたつてわけ。なんていうのかな？掲示板、ていうんだつたつけ？みんながインターネット通じて会話する奴」

「まあ、掲示板、かな？私、読むのは得意じゃないからそういうのも良くわかんないや」

「そなんだ。じゃあ小説も読まないほう？」

「うん、そうだね」

佐江が人差し指を自分の顎にあてた。何かを考えているのだろう。

「ねえ、メアドってどれくらい持つてる?」

「数えたことないな…… 800人くらい?」

「嘘! マジで! 淫いなあ」

「外国にも友達いるからねえ」

「じゃあ、あの恵美つて子のメアドもある?」

「ああ」

「ふーん、ねえっと履歴見してよ。メールの履歴

「別に構わないけど、つまんないよ?」

直人は机の上に置いてある携帯を佐江に渡した。

「うわ! 女の子ばっか! あれ? あつちゃん、優子、由依ちゃん、麻

里子 e t c …… すごいメール量」

「e t c は言わなくとも良かつたんじゃ?」

「それで……」

直人の小さなツツ「ミミは遮られてしまった。

「佐江の予想だけど、あの子絶対あなたに気があるよ?」

「恵美のこと? そんなのありえないだろ」

「直人つて、意外に鈍感なんだね」

「鈍感?」

直人は、佐江の言つている鈍感の意味が良く分からなかつた。

第五十五話 ファーストキス

「へえ……そう見える?」

「見える見える。佐江は絶対そう思う?」

直人は本当に分からなかつたらしく、首を傾げていた。

「そういえば、雑貨店でお母さんと話してたよね」

「うん……実は佐江、人見知りで、店員さんに話しかけることさえ出来ないんだよね」

「ああ、だからお母さんと」

直人は納得したように相槌を打つ。

羨ましいな……と思った。佐江には仲の良い母親がいるが、自分にはいない。あの交通事故さえなければ、今頃母と仲良く紅茶でも飲んで笑いあつていいのだろうか。そんなの、夢でさえ見られない光景だ。交通事故がなければ、いや、自分が生まれてこなければ、あの交通事故だつて起きなかつたかもしれないじゃないか。

「どうしたの、直人?」

「え?」

「泣いてるじやん?」

そう言いながら佐江が右手を彼の頬に近づけてふき取らうとした。だが、直人はその手を遮つた。

「いや、君の話が可笑し過ぎて、つい

「ええ! 何それ! ひつどおい!」

佐江が手を直人から離す。苦し紛れに言つたのだが、どうやら誤魔化せたらしい。

女の子に弱い所は見せたくない。

「あ、そろそろ来たね」

気がつくと、恵美が二つハンバーグを運んできた。直人の前に置かれたのが、チーズハンバーグとう名称のハンバーグ。佐江の前に置かれたのが、それにさらにチーズを加えたダブルチーズハンバ

グ。

「ありがとう」

「ありがとね、恵美ちゃん」

「いやいや、仕事ですから」

恵美はお辞儀をしてから去り際に佐江に話しかけた。

「佐江ちゃん」

「何?」

「彼、恋愛経験豊富だから、キスの経験も多いんですよ?」

「おい」

直人が何か言おうとする前に、恵美は厨房へ逃げていった。

「へえ、ファーストキスはいつなの?」

聴かれて直人は少し戸惑つたが、答えることにした。

「小5」

「相手は?」

「彼女」

「え! 彼女いたの! 今も付き合つてる?」

「ああ」

「うわ! すつゞく長い!」

佐江は驚いたような表情をした。

「どんな子なの?」

「…ちょっと待つて」

直人は机に置いてあつた携帯を開けて佐江に渡した。

「うわ! 直人、なんか太陽の匂いがする」

「どんな匂いだよ」

「細かいことは気にしない。するもんはするの。直人全体から」
きつと、携帯を手に取る時に匂つたのだろう、その、太陽の匂い、
とやらば。

「へえ、すつゞく可愛いじやん!」

「だろ、君とは大違ひだ」

「もう、さつきから思うんだけど、あなたたまに人からかうよね?」

「からかうのは君だけだよ

「ええ！なんでえ！？」

「さあ、なんでだろうね

「直人は誤魔化し、携帯を無理やり佐江からとった。

「君とは気が合うかもしれないな」

「会つてみたいなあ

「今度デートするときに君も連れてついてあげるよ

「それじゃデートにならないじゃん」

「そうだな、と佐江のツツツツツに応えながら携帯を閉じる。

「キスは何人とした？」

「3人。そういうえば、珍しい時もあつたな

「へえ、聴かして？」

「いいよ

ハンバーグを一口サイズに切り取り、口にほうばった後、直人は話し始めた。

「女の子が交通事故に遭いそうになつて、助けたんだよ。その時、女の子からお礼についてキスされた。僕も女の子も中三だつたな」「なんか、ドラマみたいな話だね」

佐江はそう感じた。

「あつちゃんと優子は幼馴染なの？」

「うん、そうだよ」

直人は塩をかけたご飯を口に運ぶ。

「あ、辛い」

塩をかけすぎてしまつたようだつた。

「佐江のはちよつと塩が足りないかな？」

第五十六話 久しぶりの味

「こここのハンバーグすうごくおいしいね！」

佐江が言った。

「それ、凄く分かるよ！なんかね、評論家が肉汁がなんちゃら……つて言いそな程の美味しいさだよ」

「ううん、具体的な例え来たね」

佐江が小さくツツコミを入れた。

「しかも、安いんだよなあ」

直人が美味しい料理を食べる子供のように、ハンバーグを口に入れた。

その時の直人の表情が、TVでは見れないほど無邪氣だったもので

力チヤ。

「え？」

「境直人のお宝写真ゲット！」

佐江が携帯の画面を直人に見せた。そこには、無邪気な表情をした直人がハンバーグを口に入れる写真が写っていた。

「あ、佐江！」

慌てて直人が携帯を奪おうとするが、軽く避けられてしまう。

「保存しどこつと

「なんど！？」

「いやあ、面白いし、グーグルに流したら面白いことになりそうだ

し」

「いやあ、それは何でもやめといてもらわないと

直人が右手を左右に振る。

「じゃあ、何してくれる？」

「何でもします

「オッケー。私はもういじょっていう今までねえ」

やられた……と直人は後で気づいたのだった。

レストランを出て三十分後。

直人は佐江に付き添う形で同行していた。何も知らない人が見れば、『熱愛発覚!』みたいな記事が新聞の一面に載りそうな光景だ。だが、TVに出演する境直人を見ている人は、その光景を見ても友達と一緒に思うだろう。

「これなんかどう?」

「ううん、これはちょっと地味すぎるかな?」

今、2人は電化店にて、佐江が買うウォークマンとイヤホンを探していた。

「直人はどんなんなの?」

「僕はウォークマンじゃないな。強いて言つなら、好きな色は青と黒だな」

「青と黒、ねえ……あんまりないよねえ」

佐江は白のウォークマンを手にとる。

「それ、容量もいいんじやないかな?」

直人が佐江の持っているウォークマンを指差す。

「じゃあ、これにしようかな」

「じゃあ、それに合うイヤホンは……白でこれかな」

直人が別の商品棚から白のイヤホンを手にとった。その値段、実際に2300円だ。

「これ、僕が買つてあげるよ」

「え? いいよ、別に。高いよ?」

「いいから、奢るつて言つてなかつたっけ?」

そう言つて直人は佐江の手をひいた。

「これとこれお願ひします」

「かしこまりました」

レジ店員は女性で、直人を一瞥したあと、少し頬を赤らめていた。

(一体、どうしたんだ?)

直人の脳内で、一つ疑問が浮かんだ。

お金を店員に渡して電化店を出た。すぐ近くのベンチに座つて直人がウォームの説明をする。

「さつきの店員さん、絶対あなたに一眼惚れしたよ?」

佐江が説明を受けながら言つた。

「え? そんなわけないよ。一眼惚れなんてそういうよ」

直人がそう言つた途端

「あの、すいません」

直人に、先程レジで会つた女性店員が話しかけてきた。

「私、高校一年の真里菜つて言つんですけど、もしよかつたら、赤外線しませんか?」

その、テニスウェアが良く似合ひそうなその真里菜は携帯を取り出した。

「えつと、いいんですけど……僕、誰だか分かりますか?」

直人がそう聞いて、真里菜は直人の顔を良く伺う。

「あ! 境直人君! ? うわ! すつごい! 生で見たら死ぬほどイケメンじゃん! しかも私、年下に敬語使つちゃつたよお~」

「うう~ん、よくわからん。

「あ、えつと、どうぞ」

直人が携帯を取り出す。

真里菜は直人のメアドをゲットしておおいに喜んだ後、手を振つて去つていつた。

「佐江の言つたとおりだつたじゃん」

佐江が肘で直人をつづいた。

「そう、みたいだね……」

直人もいまだに信じられなかつた。

その再会は、唐突に起つた。

今の直人は、最悪のタイミングだつたのかもしれない。

富澤佐江という同世代の女の子と2人で歩いているところも目撃されたら、恋人としては放つてはおけないのが当然だ。

第一、彼女はとても甘える性格で、それでいて凄く妬く子だ。きっと、ただでは済まないだろう。

「ナオオ！」

いきなり後ろから抱きつかれた。呼び方が多少違つた氣もするが、直人には確信できなかつた。

「えつ？えええええ！」？

隣で佐江が奇妙な動きをして驚いている。

直人は全くこの事態を予想していなかつたもので、少しよろめいた。予測できる人がいたら教えてほしいものだ。

「え？」

直人も声を上げた。左肩に抱きついた人物が顎を乗せるのが分かつた。直人は慌ててそちらに視線を移すと。

「なな！」

「ええええ！」？

直人の次に、また変なジエスチャーを繰り出しながら佐江が声を上げた。直人は強引にななを離して向き直る。ナオトの目の前に映るのは、正真正銘自身の恋人だつた。長い髪を一束ねにした彼女はナオトを真つ直ぐ見据えた。彼女は可愛らしいピンクの色をTシャツを着ている。

「どうして、ここに……？」

「もう！ナオが全然会つてくれないから、会いに来ようと思つたの！」

「うわああ……。

直人は少し呆れるように息を吐いた。

「ちょっと、ここを見ていきたいと思ってみたら……超ラッキー！」

「あなたに会っちゃった」

言葉の最後にハートマークがついていた気がする、と佐江は声を出さず言った。

「会わないうちにより一層格好良くなってるう。さすが私のナオだね！」

そう言つてななは直人に真正面から抱きついた。

直人は彼女を突き放すことが出来ず、結果応えるしかなかつた。「周りの人を見るんだけど……」

直人は言いながら辺りを見回した。通行人の注目を浴びていた。自分が境直人と気づいているのか確かめることはできない。ちなみに、佐江もこの光景に釘付けだつた。

「別に周りの視線なんかどうでもいいじゃん？」

「いや、それでも……」

「ええ……！？寂しいよお」

「近くにいるじゃないか」

さつきと同じように強引にななを離す。通行人何も見ていないといつた風にその場を過ぎ去つていく。見ていた通行人の中に若干メンバーがいたのは気のせいだろうか？

「あのお、私を置いてかないで……」

入るタイミングを逃さんとばかりに佐江が話しかけてきた。

「ナオオ、もしかして浮気い？」

ほら、見ろ。今は可愛く聞いているだが彼女の頭の中ではいくつもの考えが過ぎつているに違いないさ。もうそれだけは確信できる。「この人は、宮澤佐江だよ。僕がプロデュースするチームの1人だよ」

「へえ……宜しく！私、ナオの恋人の剣崎ななです」

「宜しく」

佐江とななが軽く握手をする。

「一応、佐江は僕たちより年上だからね」

「一応つて何よ！？」

佐江がすかさずツツコむ。

「ナオがお世話になつてます！もう、この人と一緒にいると、絶対飽きませんよ！？」

凄い気迫で言われた。

「うん。ナオトすっごく優しいよ？」

「なんで疑問系？」

直人はそう聴いたが、無視されてしまった。

「じゃあ、私もう行くね？まだ仕事あるんでしょ？」

「えっと、うん」

直人は頷いた。

「会えて良かつた。じゃあね」

そしてななは……軽く直人にキスした。

「うわあ！」

両手を頬に当てた佐江の表情はある意味凄かつた。

「バイバイ」

手を振りながら、キスをしたななは去つていく。キスをされた直人はさも当然のように佐江に向き直つた。

「自分で言うのもなんだけど、彼女は僕にベタ惚れかな？」

「まさにその通りだよ……あんなラブラブカップル見たことないよ

お

「はは。それは褒め言葉なのかな？」

「でも、なんで嘘ついたの？」

そう聽かれて直人はななが去つていった方向を見た。スキップしているななが小さく見える。明らかに上機嫌だ。直人には会えたのが理由だろう。

「今は、距離を置いときたいんだ。会いすぎると、別れる時に辛いから……」

「え？別れるつもりなの？」

「そういう意味じゃないよ。もつと、深い事情があるんだよ。そう、一言で表すなら『タイムリミットの時刻』かな」

「え？ 意味わかんない」

「だろうね」

佐江は明るく振舞つていたが、直人は知つていて。自分は若いうちに死ぬのだと。三十歳になることもなく、下手すれば二十歳になることもなく死ぬのだと。だから、彼女に辛すぎる死に別れはさせたくないから……

距離を置いておく必要がある。

「そろそろ時間だね。帰ろうか。家まで送るよ。実は近くの駐車場にバイク置いてあるんだ」

「え？ いいの？」

「ああ」

直人は佐江を連れて行く。

今このこの時間、短い時を有意義にするには、一つ大事なことがある。

大切なものを手放さないことだ。

第五十七話 Fall in love again (後書き)

英語の綴り間違ってるかな?
ちなみに、次話は回想です。

第五十八話 ゆきりんワールド？（前書き）

予告したとおり、今回は回想です。誰のスカウトかは、題で分かれますよね？

第五十八話 ゆきりんワールド？

鹿児島。九州地方の南側の県。

直人がここに来るのは初めてだつた。九州で来たことがあるのは、離れた沖縄だけだ。

今日スカウトするのは、柏木由紀。聴くところによると、精神的にも肉体的にも弱い為、月の半分は学校を欠席しているらしい。A KBに入ることで、タフになつて強くなつてほしいと直人は思つてゐる。

今の中学校にはお別れだが。

由紀は直人や敦子と同じ同年代。つまりは同じ高校一年だ。きつと話しかけやすいだろうし、好きな食べ物を差し出せば、高感度がアップするはずだ。直人はそう思つて、夏の定番スイカを持つて彼女の自宅に向かつていた。彼女は、スイカだけで生きていく自信があるほど好きだと聴いた。

直人は薄いピンクのシャツにジーンズというラフな格好をしている。精神年齢が大人であるため、今の直人はきっと由紀の異性のタイプにぴったりだろう。今の由紀に恋愛は興味ないとと思うが。ちなみに、直人は鹿児島弁には慣れていない。

「ここか」

鹿児島県鹿児島市。柏木由紀の故郷。

チャイムを鳴らすと、結構早く1人の少女が出迎えてくれた。ジャージを着た由紀だつた。少し古そうなジャージだつた。

「え……えええええええ！」

途中で「つ」の文字が入るなんて、あまり見ないリアクションだつた。

「や、やあ。君、受かつたよ。これ、お祝いの品」

ちょっとリアクションに驚きながらもスイカを掲げた。

「うわ！スイカ！」

由紀の表情はうつて変わつて喜びに変わつた。あまり喜んでいるよつには見えないが、たしかに喜んでいる。喜怒哀楽がないのか？「ウチ選ばれた！めつざ嬉しいがよ！」

「めつざ」とは「めつちや」ということだろ？

「とりあえず上がつてがよ！」

直人は促されるまま家に入った。

それにして、上手い具合になまつてゐる。こんなになまつてゐるのか、鹿児島は。

「それにしても、かごんまで遠かつたかんね？」

「うん、凄く遠かつたよ。東京と鹿児島の距離つて凄いからね」

鹿児島弁はちょっとわからん。

リビングに案内され、直人はソファに座るよつ促された。直人はそのままの流れでソファに座る。

「なんで、ウチ選ばれたんで？」

「なんとなく？」

直人は即答した。由紀は少し驚いた表情をしたが、すぐに元に戻した。

「君、スイカ好きだつたよね？」

「はい、めつさ好きがよ」

「あ、直人君つて言つんだつたつけ？」

2人が会話を弾ませようとした丁度その時、ダイニングのほうから彼女の母らしき人物が現れた。

「お、スイカ？ 今すぐきつてくるがよー待つてな！」

母は直人が机に置いたスイカを手にとつた。

「でさでつかいがよ！」

そう言いながら母はダイニングに早歩きで向かつた。

「良いお母さんだね」

「そんなことないがよお。つるさいし、めつざ学校行けとか言つし、ホント嫌なお母さんがよ」

「でも、大好きだろ？」

「……もう、何言わせてん！」

「まだ何も言って」

由紀が何を考えているのか全く分からなかつた。妄想、か？

「はい、切つてきただよ」

母が切りとつたスイカを皿に載せて運んできた。

「大人気アイドルなんだつて？がんばってるねえ」

「ありがとうございます」

直人はスイカを手にとつて豪快にかじつた。ＴＶでの直人しか見

たことがない人には珍しい光景だろう。

由紀はといふと……綺麗に食べつくしていた。

「食べるの早」

直人は超時期にそう思い、いつのまにか声に出していた。

第五十九話 瞳の奥には

その日の夜。直人が一人で住む家のリビング。いつもの風景が、そこにあつた。

少し違うのは、そのリビングに少女、あるいは女性が多く居ることだろうか。

「え？ ほんとに？ すつごおい！」

「それでね、その人が凄くおもしろくて」

軽く見ただけで30人以上いることがわかる。実際には48人いる。

今日は、焼肉パーティーを開こうということで、たまたま会場が直人の家になつた。主催者は、敦子と優子。古い洋館のリビングはとても広いため、多くの人を招き入れることができた。焼肉をするためのホットプレートは計五つ。彼のリビングはどれくらいの広さか、住んでいる直人自身知らない。姉は教えてくれなかつた。別に知つても得することはないが。

ホットプレートの一つは外に置いてある。48人はさすがに人数が多いため、数人は外で食べている。リビングの窓のすぐ外はサンルームに繋がつていて、丁度良かつた。で、その窓のすぐ近くにホットプレート一つ。さらにその奥にちらばつて三つ群。

唯一心配なのが、金銭的問題だつた。

「ああ、そろそろ食材がなくなっちゃうねえ」

優子が言つた。ちなみに、優子はリビングの中央のテーブルに置いたホットプレートで焼肉を焼いている。直人や敦子もその団体にいた。ちなみに、優子たちがいるホットプレートに集まつているのは、3人の他に麻里子、たかみな、友美、佐江、才加、陽菜、みいちゃんの計9人。まさかこの9人のほとんどが未来、総選挙という大イベントでAKBのトップになると、誰も想像しりえなかつたことだらう。

「後で買いに行かなきゃいけないな」

直人が残りの食材を調べる。

「もうちょっと後で、買いに行けばいいじゃん。どうせ近くにできたばっかのスーパーあるしい」

「もうそこへ一回買出しに言つてゐる気がする。それもひとつも僕」

直人が豚肉を焼く。

その豚肉もそろそろ底を尽きようとしていた。今はまだ7時半だ。

「一回目は、私がいたし、二回目は友美がいつたじゃん」

佐江が言いながら、直人が焼いていた豚肉を横取りした。

「あつ……」

直人が声を上げたが、すでに遅し。佐江は一口で豚肉を口に押し込んだ。

「おいし!」

佐江が喜んだ表情をする。直人は、返す言葉がなかつた。優しい性格をした直人には、何も反論できなかつたのだった。

「直人さんは、ずっとここに住んでるんですか?」

秋元才加が聴いた。彼女はチームKのキャプテンだ。聴いた話では、腹筋が割れているらしい。

「生まれた時からずっと、ここで育つたからね。中々、この家を手放すことができないんだよ」

直人は今度こそとばかりに豚肉を焼いたが、またとられてしまった。

「はい、豚肉はなくなりましたあ

サンルームの近くの団体から美穂の声が飛ぶ。
「仕方ないな、買ってくるよ」

直人が立ち上がった。立ち上がる前に一つ口に放り込む。もちろん、それは今回のパーティーのメインである肉ではなく、野菜のに

直人が立ち上がった。立ち上がる前に一つ口に放り込む。もちろん、それは今回のパーティーのメインである肉ではなく、野菜のに

んじんである。

「誰か、一緒に来てくれないかな？」

直人は声をかけた。すると、数名が挙手する。直人は一番最初に手を挙げた倉持明日香に頼むことにした。

「明日香、行こうか」

「はい」

直人は明日香を連れて我が家を出た。財布の中身が心配だ。直人と明日香がいなくなつても、彼女たちの騒ぎは収まらない。家は直人が音楽を聴いたり練習したりするので、壁は防音できるようしている。なので、彼女たちがどれだけ騒こうが、一応安心というわけだ。

敦子は、トウモロコシを食べていた。

「それにしても、あっちゃん良く食べるよね」

たかみなが興味深そうに敦子を見た。彼女は素早くトウモロコシを食べる。

「私、直人がお肉食べれなくて可哀想つて思つたな」

「それ、私も分かるなあ」

「そう反応したのはたかみなではなく友美だった。

「直人さんつて凄く優しい人だね」

「才加あ、実はそうでもないんだよ？」

悪いことでも考へてるような優子は橋を掲げた。

「彼、結構チャラいよう。彼女いるくせに何人もの女の子口説いてるし」「田舎わせたら一田惚れされてるだけじゃん」

敦子がツツコミを入れる。

「彼女がいるくせに他の女の子にキスしてるし」

「多くは向こうから」

「……私にも口説いてきたんだよお！」

「どうやって女の子を口説くのかやつてみてつて言つたのは誰だつたつけ？」

「……あつひやんは、シシ ロリ役しかできないのかな？」
敦子の言っていることまでは正しい為、優子には反論する言葉がなか
つた。

第六十話 三度目の買出し

焼肉や鍋のパーティーというものは人数が多い分買出しの量も多いのが当然だ。だから、直人一人ではきっと荷物が多いだろう。だから、今回も一人連れてきた。倉持明日香。冬にさしかかりの11月終わり。別にパーティーは鍋でも良かつたんじゃないかと思うが、焼肉ということになつたため、財布の中身は急激に減つていく。

「ナオミン、二の腕見せてくれない？」

「いいけど……吸わないでよ？」

「吸いませんよ、男の人なんだから」

明日香は人を独特な呼び方で呼ぶらしいが、直人のニックネームはそれほど珍しくもなかつた。直人は「ナオミン」というニックネームを否定していない。それどころか、少し気に入つていて。直人はいつも、「直人」か「ナオ」だつたため逆に新鮮だつた。直人は服の袖をめくることができなかつた。

「これ持つてくれるかな？」

上着を脱いで明日香に手渡した。

シャツの袖が長いため、直人は仕方なくシャツを脱いだ。
「きやつ！」

明日香が小さく悲鳴を上げた。

「大丈夫だよ。シャツ着てるから」

「あ、そうなんですか」

めちゃくちゃ安心されると、逆に気分が悪くなる気がするのは気のせい……？

「うわあ、凄く硬い……」

「寒いから早くしてね」

直人が言った。

それにもしても、耳たぶと二の腕が好きって、相当珍しいよなあ……

…。

「体つきが細いのに、筋肉がムキムキですねー！」

「そんなに凄いかな？」

「はい、凄いですよ」

2人の歩みが止まる。

「私の異性のタイプの髪型つて、丁度あなたみたいに長い髪を後ろで縛つてるような人なんですよ」

「へえ、嬉しいなあ。じゃあ、告白したらOKしてくれるの？」

「いやあ、それはどうなんでしょう？」

2人は再び歩みを始める。

「後、私プロレスや野球が好きで、それを否定しない人がいいなあ。それはナオミンもそうなんだけど、ヒゲがないから……」

「明日香は大人の男性が好きみたいだね」

直人はそう言つてシャツを着た。明日香から上着を受け取つて羽織る。

「そういえば、僕小橋健太さんと会つた事あるんだよ」

「ええ！ホントですか？」

明日香がなんだか興奮したみたいな表情になつた。

「どうでしたか？」

「晩飯一緒に食いにいかねえかつて誘つてくれたんだよ。その日は、新人アイドルがゲスト出演、つて感じでプロレスの会場に行つたんだ。そしたら、一緒に飯に行くほど仲良くなっちゃつて。歳は大分離れてるけど」

プロレスが好きな明日香にとつて、小橋健太選手はとても好きな人だ。直人は明日香が喜ぶと思って今その選手の話をしたのだ。

「とても良い人だったよ。時間があつたら君にも会わしてあげるよ

「ホント？嬉しい！」

明日香が喜んでその場でぴょんぴょん跳ねていた。

「さ、着いたよ」

直人が指差す先に、スーパー・マーケットがあつた。

「財布の中身が心配だな」

「大丈夫ですよ。私の財布には一万円が入っています」

「何でそんなに入つてんの？」

「私、出掛けの時は一万円は入れてないと不安なんですよ。何を買いたくなるかわからないし」

「それも分かるね。じゃ、野菜を買つてくれないかな？肉は高いから僕が買うよ」

「はい」

直人は肉の商品が置かれているコーナーへ、明日香が野菜が置かれているコーナーへ向かった。

「豚肉がなくなつたからな、ステーキも買つてやるか」

最近、他人に大して甘くしすぎているのかもしれない。

お前は甘いから、俺に騙されるんだよ。

確かに彼の言う通りなのかもしれない。僕は彼に騙され、大切な物をオークションに出品されても尚、彼を信じた事を後悔している。だから、また同じ事を繰り返してしまうんだろうな……。

「……」

遠くにいる明日香を見る。彼女はとつても優しくて、少しみんなとは違つて、可笑しくなつてくるような所が好きな女の子だけど、直人は彼女が好きだつた。

「……甘えさせるのはいけないよな」

ステーキを取ろうとしたが、直人はすぐに躊躇する。だけど、皆の顔が脳裏に浮かんで、色んな思い出も、忘れ去つた思い出も蘇つていく。

「……たまには、サービスもいいよな」

やつぱり、自分が他人に甘いのは仕方ない。だって、もうこの性格は変えられないのだから。

「明日香あ、決まつたあ？」

大量の肉をカゴに入れて直人は明日香の元へ向かった。

第六十一話 パーティーの終幕

スーパー・マーケットから戻つてくると、アイドルとは思えないような姿勢をとつて、少女たちがいた。寝ている人までいる。

「これじゃ、ステーキは食えないなあ……」

直人が独り言のように呟く。すると、一斉に全員が体勢を整え、今か今かとステーキを掴み取る構えをした。

「最近の女の子つて……」

呆れる。

「明日香、ありがとう」

直人が持つて、ビニール袋をキッチンに置く。その中身の大半は人数分のステーキだ。

明日香が持つて、ビニール袋もキッチンに置く。

「こんな時間にステーキ食べたら太ると思うなあ」

「女の子はいつも先のことまで考へてるよ」

みんなを代表して、麻里子が言った。彼女は最年長で、教師側という直人でさえ五歳年下という年齢差だ。……五歳差だつける。

「ほら」

ステーキを皿に移し、5つの団体へ運んでいく。

みんながあつて、間にステーキを焼いていく。一応、別の肉も買つてきたのだが、必要なさそうだった。

直人も優子の隣に座つて、自分の分のステーキを焼き始める。

「ああ、上手そうだ……スーパーの安物だけど」

「美味しい！」

サンルームのほうから、幸せそうな声が聞こえる。これは、宮崎美穂の声だろうか。

「お、僕のもやけてきたかな」

明日香が買つてくれた野菜を口にほづばつてから、直人はメインのステーキを食べた。

「たかがスーパーのステーキで泣けてくるよ……」

直人は呟いた。いつも姉と二人暮らしで、この三年間は敦子や優子と過ごす日々だった。もちろん、ステーキなんて食べるチャンスなんか滅多にない。敦子や優子の家庭で一緒に食べさせてもらう時だけだ。

この半年間、スカウトの日々に追われてステーキなんて全く食えやしない。

「そろそろ終わり時だね」

「そうだねえ、ナオ君もお腹いっぱい？」

「ああ」

水を一気に飲み干す。

「さあ、片付けの時間だな。別に片付けとしかしなくていいからな。あ、でも、机の上は汚くしないでね」

そう言って直人はソファに寝転んだ。

「ゆっくり片付けたいからさ、早めに帰つてくれるとありがたいかな」

直人がそう言うと、みんながそろそろと帰つていく。

「ホントに手伝わなくていいんですか？」

明日香が聞いてきた。彼女の気持ちはおおいに嬉しかったが、直人は首を左右に振った。

「大丈夫だよ。明日は結構レッスンきついと思うから、ゆっくり休んでね」

直人は微笑んだ。明日香も微笑む返すと、玄関へ向かった。まだ残っている人がいる。敦子と優子だ。後、由依と麻里子がいた。

「由依、夜行バスで変えるんだろ？ 良かつたら、送るよ

「え？ いいんですか？」

「ああ、実はさ、僕が乗ってるバイクつてサイドカーもつけられるんだぜ。しかも屋根もつけられる便利なサイドカー」

そう言いながら直人は立ち上がった。

「ナオ君、実は、年齢偽造してるんだよ?」「え?」

優子の言葉に由依はぽかんとした。

「バイクの免許って、16歳からとれるんだけど、彼2月生まれだからまだ15歳なんだよね」

「駄目じゃないですか」

由依が言った。

「その通りだよ」

直人は答えた。ダイニングのカウンターに置かれた財布、携帯、バイクのキー、そして録音機を取り出す。

「サイドカーつけてくるから、待つてね。寒いから、屋根もつける?」

「てか、車で送ればいいじゃん」

「もしかして、ナオは車も持ってるんですか?」

由依が聴いた。その質問に対しても敦子が答えた。

「それはね、法律を無視したとかじゃなくて、特別に許してもらつたの」

「どうやって許してもらつたんですか?」

「……親戚のコネ、つて直人は言つてたよ」

敦子は人差し指をたてた。

「ホントは直人君自身が年齢を偽つてるのかもね」

麻里子が呟いた。

「ただ忘れてるだけかもしれないよ」

直人はキーを眺める。バイクのキーはチョーンにつながれ、家やその他様々の鍵が吊るされている。その中に、親戚からもらった車のキーがある。

「僕、車の免許は持つてるけど、乗ったことはないからやめといったほうがいいよ」

直人は言った。

「どうか、別にいいですよ。夜行バスで帰ります」

「お金がかかるだろ？」

由依の意見を遮った直人は、キーを振り回した。

「それに、家の片付けも……」

「敦子と優子がどうしてもやりたいんだって」

「そして私は助つ人」

麻里子が手を上げた。

「じゃあ、頼むね」

直人は言いながら由依を家のガレージへ連れて行く。

あつたのは、どこからどう見てもポルシェだった。シルバーカラード。

「あの、これに乗るんですか？」

「検問につかまつたら刑務所行きかな？」

直人が冗談を言ったように笑った。

「冗談に聽こえませんよ……」

「大丈夫。車は運転できるさ。それと、バイクのサイドカーが良い？ 寒いよ」

「あ、車で良いです。でも……なんで免許なんかとれたんですか？」
「中学三年生の頃に、スポーツカーのレースに出場したんだよね。元々はアイドルゲストとしてきてたんだけど、選手の1人が直前に足を捻挫。それを知らない観客たちをガツカリさせないために、僕が選手の変わりに運転したんだよ。そしたら見事に優勝したよ」
車のハンドルを回す仕草をする直人。

「僕の運転技術がそんなに良かつたのかな？ あまりにも凄すぎるから免許を獲得してもいいですよって言われちゃった。無免許運転で逮捕はされなかつたよ。姉さんの殺人事件が影響で同情されただけかもしれないんだけど」

直人はポルシェのドアを開けた。

助手席に由依を座らせ、直人が運転席に座った。

「ちなみに、その選手が、僕の親戚だよ」

ポケットからあらゆる携帯端末を取り出して由依に渡した。持つ

ていてくれという意思表示が届いたのか、由依はすぐに持ってくれた。

「シートベルトOK?」

直人がハンドルを握る。

「じゃ、出発進行」

「きやつ！」

予想を遥かに上回る速さだったため、由依はシートベルトにしがみ付いた。

ガレージを出たポルシェが急な角度でJターンして、時速限度ぎりぎりの速さで走り始めた。

第六十一話 心理的状況（前書き）

今回は回想です。
時は、中学三年生時。

第六十一話 心理的状況

中学三年生。冬休み。

境直人は、住んでいる街の総合病院に来ていた。

彼は、定期的に病院に診察に来るよう指示されていた。彼の体の状態と、心の状態を調べるらしい。

「いいわよ、状態は」

直人を担当してくれているのは三十代後半の女性だった。戸森先生と言つたか。その人は、同級生の母親であつたため、すぐに打ち解ける事ができた。診察室にはその2人しかいない。

「はあ、無免許運転つて、良くする気になつたものね」

「いや、お客様を喜ばせなきやと思つて」

「アイドルつて……良くわかんないわ」

戸森は直人の頬を引っ張つた。

「肌の状態も良いわね。ただ、いつ死んでおかしくないわね」

「もうちょっと優しい言い方はないんですか?」

直人は笑いながら冗談のように言つた。だけど、本当は恐怖に覆われている。

「遠まわしに言つよりはマジだと思つわよ

「まあ、否定はしませんよ」

直人は俯く。そのまま質問を投げかける。

「後、何年ぐらい生きられますかね?」

その質問は、直人にとっては聞いてはいけない質問なのかもしない。だけど、直人は知りたくて仕方がなかつた。

「……」

戸森は、しばらく沈黙を続けた。その質問の答えが確実であるとは言い切れない。だけど、確立は高い。それでも、直人が聞きたいと望むなら。

「早くて、一時間後ね」

「めちゃくちゃ早いですね」

「いつ死ぬかも分からないって言つてるじゃない。もしかしたら今から一秒後に死ぬかもしれない」

「うつ……」

「死ぬフリはしなくていいわよ」

「あ、すいません」

最近、自分のノリが通じなくてショックな直人だった。

「ま、一時間後つていうのは確立低いけどね。一番確立が高い時を言つと、一年後だと思うわ。今の段階では、成人にはなれないっていふ意見が多数よ」

「そうですか……」

直人は顔を上げることができなかつた。それは戸森と向き合つことができなかつたからか、確実に近づく死に向き合つことができなかつたからか、どちらだろう。どちらにしても、田の前にあるものに背いている事に変わりはない。

「失礼します」

診察室にスースイ姿の男が入つてきた。

「直人君。無免許運転はいけないじゃないか。今回は君の心理状態が異常だつたと言う事で処罰は受けなかつたが、今度はそうでは済まないよ」

「色々とすみません」

現れたのは警察に所属している四十代前半の男だ。名を野村敬二と言つ。名前で呼んでも、野村刑事と呼んでも呼び方に変わりはないのだからおもしろい。

「いつ死ぬか分からないということ、1人暮らしということで同情したんだろう。警察の上の方が、君に特別に運転免許証を獲得する事を許してくれた。本当は18歳からなんだぞ？それにお前、バイクの免許証も年齢偽造して手に入れただる。アイドルがそんなことをして良いと思つてるのか？」

「思つてますよ。僕が良い子だと思いましたか？」

直人は顔を上げた。ベテラン刑事が来てくれたおかげなのかもしない。

「じゃあ、今日はもう帰つていいわよ」

「ありがとうございます」

直人は立ち上がると、2人に頭を下げた。そして、顔を上げると同時に一言言つ。

「たとえ寿命がつきても、僕は長生きしますよ。ゲームはまだラスボスには到達していないから」

直人はそう言つた後、静かに診察室を出て行つた。

「可哀想な子だよ、ホントに」

野村敬二はベッドに座つた。

「死んだ親との記憶は一切なし。唯一肉親だった姉はストーカーの異常行動により殺害されて死亡。その後すぐにアイドルとしてデビュー、か。いいリスタートじゃないか。それで不治の病がなければ最高だらうに」

野村は直人を我が子のように慕つていた。彼の両親が交通事故に遭つて死んだ時から野村は直人を支えてきたのだ。親戚もいない、収入も少ない。だからこそ、野村も境姉弟にそれなりにお金を渡していた。

「彼のお母さんはとつても優しかつた。小さい頃、日本に留学して、瞳の色のことでからかわれてきて、直人君にも同じ事が起こらないようにコンタクトをしてと言つた。ホントに、優しいわよね」

「なぜ、弟の直人だけ瞳の色が青なんだろうな？」

野村が言つた。すると、戸森が重々しく答えた。

「病気のせいよ」

「は？」

「彼の病気は生まれつきの障害。彼の瞳が蒼いのは、お母さんのDNA原因じゃない。病気のせいで、瞳の色が黒から青に変色したのよ」

「おい、冗談言つなよ。そんなことありえないの？」

「彼にはありあえることなの。現に、彼は一年前と比べて瞳の色が明るくなってる。決して錯覚じゃないわ」

「じゃあ、今も病気の悪化は続いているってことなのかな？変色するつて、そういうことなんじやないのか？」「

「その通り。彼の瞳の色が変色してると言ひ事は、病気が悪化してるってことなの」

病院の外。直人はバイクにまたいだ。

「なんで、目の検査までさせられたんだろ？」

そう咳きながら直人はバイクを走らせた。まだ乗り始めて一週間しか経っていないが、自転車に乗ってる気分だと、自然と慣れてきた。

第六十三話 ガールズトーク

「さあ、片付け始めよっか」

麻里子が言つた。ここは直人が1人で暮らしている部屋のリビング。いつもなら部屋のあちこちにスピーカーがあるが、焼肉の汁が飛んだら嫌だということで階段に詰めて置かれている。

「面倒くさいなあ」

優子はそう言いながらも、真つ先に食器をキッチンに運んでいく。その次に敦子も食器を運ぶ作業に入った。

「よし」

麻里子は服の袖をめぐりあげた。2人が運んだ食器を綺麗に石鹼で洗つていく。キッチンは綺麗で、汚れなど一つもない。きっと直人は綺麗好きなのだろう。キッチンだけでなく、部屋全体が綺麗だつた。入つた時も清楚な印象が強かつたことだろう。

「凄い量」

「48皿あるもんね。それに加えてご飯とかね……」

敦子が言いながら食器を積んでいく。先に帰つた人はせめてに、とホットプレートのコンセントを抜いたり机を整頓したりはした。さすがに何もしないのは気が引けたのだろう。

「直人君つて、何か隠してるの？」

「え？」

敦子が麻里子の横に來た時、麻里子は唐突に言つた。

「なんで？」

敦子は尋ねる。一瞬、病 という一文字の言葉が脳裏を過ぎつた。

「なんかね、彼、いつも苦しそうなんだよね」

洗い終わった皿を敦子に渡す。敦子は受け取ると、食器専用の乾燥機に入れた。

「何かを抱えてるつていうか、人には言えない秘密をいくつも持つ

ているつていうか……」

麻里子は喋り続けた。 それのどれもが予想であれ確実に合っていた。

「そうかもね」
後ろで優子が呟いた。 彼女はサンルームの中の机を拭いていた。 直人が隠すこと。 それは4つ。 1つは、不治の病を抱えていて、 いつ死ぬか分からぬこと。 2つ目に、その病が原因で記憶障害や 情緒不安定な面が見られるということ。 3つ目に、瞳の色がアクア ブルーであるということ。 そして最後に、1人の少女を殺そうとし たこと。

「彼が中学生の頃は、ホント大変だつたんだよ。 色々と」
優子が少し大きめの声で麻里子に言った。 敦子がうんうんと頷く。
「彼、服がオシャレだよね。 なんていうか、性格はたまに子供っぽ いとこあるけど、服装は凄く大人でカジュアルだよね」

麻里子はオシャレに非常に興味を持つていて。 直人もオシャレの センスがあり、良く褒められていた。

「彼、たぶん過去に酷い事があつたから、服装で誤魔化そうとして るんだと思うな」

麻里子が呟く。 敦子はその言葉を聞き逃さなかつた。

「誰にだつて、嫌な過去はあるよ。 麻里子もあつたでしょ？」
「かもね」

麻里子は、過去には興味なんてなかつた。

同時刻。

直人と由依の乗るポルシェはパークリングエリアに停まつた。 たとえ夜でもそこには人が多い。 だが、その時間帯はトイレには 誰もいなかつた。 直人は洗面台で鏡に映る自分と対峙していた。
「はあ、なんて事思い出しちまつたんだろ」

直人は運転中に思い出したくない過去を思い出してしまつた。 記

憶障害が原因でずっと忘れていたのに、途端に思い出してしまった。そう、録音した音を聞くまでは。

直人は三年前の記録を消した。

その記録は、自身が発狂して、ある1人の少女を殺そうとした記録。

あの日の自分を、後悔した。他殺未遂で事件になりかけたあの忌まわしき記憶を葬りたい。あの後は、彼が病気だと教師が学年生徒に告げたから、いじめやからかいは発生しなかつた。だけど、問題は殺されかけた少女だった。

その少女に嫌われると思った。なのに、その少女は嫌うどころか、前にも増して彼のことを好いてくれて、愛してくれた。中一には不釣合いな言葉だけど、そこには本当の愛があったのだと思う。少女は己を殺そうした少年をどう思っていたのか、今となつてはわからない。

「本当にごめんな、なな……」

今、直人は恋人を殺しかけた日のことを「暗闇の日」と呼び続けた。それは、今まで過ごしてきた人生にとつて、最悪の出来事だったからだ。

トイレから出てきた直人はベンチに座る由依を見つけるなり近寄つていった。

「ごめん、待つたかな？」

「いいえ、大丈夫」

直人に気づくと、由依はベンチから立ち上がった。

「飲み物でも買う？」

「いらないです」

「そつか。じゃあ車にいこつか」

2人はポルシェに向かう。直人は警察がいないかと辺りを見回していた。事情を説明するのが面倒くさいのだ。

ポルシェに乗り込んだ。ガソリンはまだまだある。彼女を送り届けた後で入れれば問題はない。

「よし」

直人は一声かけてからポルシェを発車させた。やはり非常に早い。高速だと余計に早く感じる。車内では、いきものがかりの ありがとう が流れている。

「YUIさんの時は、どうでした？」

「え？」

由依の質問に直人は小さな躊躇いを見せた後、

「正直、今と比べたら楽かな」

そう答えた。

「あの時は、まだ中学生だったけど、相手は1人だったからね。48人とはわけが違うよ」

そう、アイドルとして初の大仕事だった初ライブ直後に行つた女性アーティストのプロデュース。YUIは、今大人気の女性アーティストだ。

AKBという名の大規模なアイドルグループも、いつしかトップ

になる日がくるのだろうか。冠番組なんかいくつも持つちゃつたり会つことが出来ないぐらい有名になつていつて……会えなくなつたらコンセプトの意味がなくなつちゃうよな。

由依はさらに別の質問をした。

「この車つて改造でもしてるんですか？スピーカーの設置も多いし、車内に本棚もあるし」

ポルシェの後部座席には大きめのスピーカーが設置されている。さらには小さな本棚までも。

「この車、ダブルエンジン積んでね……一口をガソリンに使つたこともある」

「……今も二一口積んでるんですか？」

恐る恐るといったように由依が聞く。怖がるもの当然だ。一口はすぐに爆発してしまう代物だ。

「大丈夫だよ、積んでないから。二一口は無免許運転した日だけ」

直人が冗談だとでも言つようにくすくす笑つた。

「冗談ではすまないと思うんですけど……」

「はははは……それよりさ、敬語いい加減やめない？」

「喋り方なんて、すぐに変えられないよ……」

「変わつてるじゃん」

直人は今度は小さく笑つた。由依も続けて笑つた。

これで場は和ませた。直人はそう感じた。

「後、三時間ぐらいだから、寝ときなよ」

「うん、そうする……」

先程から眠気が来ていたみたいで、由依はすぐに深い眠りに落ちていつた。

「赤い夢へようこそ……」

直人は呟いた。この言葉は、推理小説の作者が言つていた言葉だ。ただ格好よく言つたつただけで、別に何も深い意味はない。

直人にとっての決め台詞は、「ゲーム」という言葉を使った台詞と、ある恩師の言葉だけだ。

「僕のゲームは、もしかしたら彼女たちのゲームになるかもしれないなあ……」

無論、直人の言つ「ゲーム」とは何のことか分からぬ。ただ、小さい頃から聴いてきた敦子と優子は、「ゲーム」という言葉は、彼自身あるいは他人の人生の事だと解釈している。

でも、直人はこの言葉をそんな小さな解釈では埋めていない。この言葉の本当の意味を敦子たちが知るのは、まだまだ先になるだろう。

もしかしたら、直人自身、本当の意味を分かつてはいないのかかもしれない。

ふと助手席を見ると、ぐつすり眠つてゐる由依の表情が伺える。とても可愛らしい。

「うぐつ……！」

急に怒つた嗚咽。予告もなく襲いかかる吐き氣。左手で口を覆い、右手でハンドルを握つてゐる。

吐き氣がおさまると、直人は口から手を離した。

「おいおい……〔冗談だろ……〕

掌を見下ろすと、血がべつとりとついていた。染み付くように、彼の左手は真つ赤に染まつてゐる。

直人の視線がどんどん下へと向いていく。

だから、道路を逆走するトラックが迫つてきてることにも気がつかなかつた。

「……！」

気づいた時にはもう、トラックが目前に迫つていて。

直人は、間に合わないと思いながらもハンドルを勢い良く回した。スリップするような嫌な音が聞こえたかと思うと、ポルシェが勢いよくトラックに突つ込んでいった。

ポルシェの助手席では、由依はまだ眠つたままだつた。

第六十四話 夜（後書き）

中学生の僕は、明日からテスト期間に入るので、しばらく次話の投稿はできないと思います。今の予定では、来週の金曜日に投稿する予定です。決して今週ではありません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3985u/>

AKB48 少女たちの軌跡と少年の奇跡

2011年10月6日03時26分発行